令和３年度

地域との協働による高等学校教育改革推進事業

「地域魅力化型」

研究実施報告書

第３年次

岩手県立大槌高等学校

巻　頭　言

岩手県立大槌高等学校　校長　継枝　斉

大槌町と連携・協働した高校魅力化事業とこの文部科学省地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域協働事業）をはじめて早３年が経過します。この間、多くの方々のご協力のもと様々な取組を進めることができましたことに心から感謝申し上げます。

本校における地域協働事業は存続が危ぶまれる学校を魅力化する取組の一環として始まりました。魅力化にあたって地域と連携・協働したことには背景があります。本校と大槌町には東日本大震災津波という忘れることができない出来事がありました。震災からの復興過程においてお互いに支え合い、生徒たちも地域の大人が真剣に町づくりに向き合う活動に参加し、学校内の学習だけでは得ることができない力を育んできました。生徒は復興の過程を地域に出て学ぶことを通して大きく成長してきたのです。もともと政府は地域振興の核として高等学校の機能強化を図ろうとしていましたし、新しい学習指導要領においても「社会に開かれた教育課程」の実現により生徒の育成に努めることが求められています。学校教育を学校内で閉じずに地域と連携・協働して生徒の資質・能力を育てることが狙いです。本校が震災後の瓦礫の中から立ち上がり復興を進める町と協力したことは新しい教育を行う上で必然であったと思います。

本校の地域協働事業の柱は探究的な学びの実践による生徒の資質・能力の育成と、そのためのカリキュラムマネジメントです。探究的な学びについては総合的な探究の時間の代替科目として学校設定科目「三陸みらい探究」を設定して事業１年目から取り組んできました。手探り状態でのスタートでしたが教職員やコーディネーターの熱心な取組により、１年目終了時には生徒の成長をはっきりと感じ取れるほどの手応えがありました。生徒たちが地域の人たちと議論や検討を繰り返し、社会とのつながりの中で自分の学びを深めていく。このことは予測の難しい未来社会を生き抜くための力となるはずです。

また、教職員は探究活動が資質・能力の育成にとても効果的だと実感し、さらにカリキュラムの検討を進め５教科にそれぞれ探究的な学びを実践する学校設定科目を設定しました。この科目では震災からの復興や人口減少など地域や社会の抱える複雑な課題に自ら問いを立て、教科で学んだベーシックな学力を活かしながら探究する力を育みます。今年度から始めた科目なのでまだまだ手探り状態ですが、各科目の特色を出しながら本校独自の科目として育てていきます。

教員は目の前にいる生徒の成長を最優先に考えるため、どうしても変化しにくい慣性の強い集団になりがちです。そのため新しいことを始めることや必要のないことを止めることができにくいように思います。しかし、本校での３年間の取組はそれまでの古い慣習や教育観までも見直すきっかけとなり、生徒の資質・能力の育成のみならず、生徒に伴走した教員も共に成長することができたと感じています。そして、この事業がここまでの成果を収めることができたのは、忙しい中においても親身に生徒と向き合いながら、この事業に携わってきた本校教職員と関係スタッフのお陰です。このチームだからこそこれまでやってこられたと強く感じています。

最後に、大槌町から派遣され異郷の地の学校に飛び込み、私たち教職員に勇気と希望を与えながら仲間として奮闘してくれた、菅野祐太さん、三浦奈々美さん、小野寺綾さん、起塚拓志さんの４名のコーディネーター、常に町と学校のパイプ役を務めた黒澤直美さんに心からの感謝を申し上げ巻頭の言葉といたします。

目　次

巻頭言・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

目次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅰ　研究開発実施報告（概要）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

令和３年度成果概要図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

研究開発完了報告書・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

Ⅱ　研究開発の内容（詳細）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １６

１　会議関係 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １７

（１） 魅力化構想会議・地域協働事業コンソーシアム会議・・・・・・・・・ １７

（２） 運営指導委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ １９

（３） 地域協働研究協議会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ２２

２　学校設定教科「地域みらい学」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３６

（１）　三陸みらい探究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３６

ア　１年生の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ３７

ア　２年生の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ５０

ア　３年生の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ６２

（２）　ひょっこり表現島（国語）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ６７

（３）　まちづくり探究（地歴公民）・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ６８

（４）　くらしｍａｔｈ（数学）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ６９

（５）　おおつちラボ（理科）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７０

（６）　Ｅパスポート（国語）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７１

３　目標の進捗状況、成果、評価・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７２

（１） 資質・能力調査について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７２

（２） ルーブリックを活用した評価について・・・・・・・・・・・・・・・ ７５

Ⅱ　参考資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７６

◇目標設定シート・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７７

◇学校評価システムによる評価結果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ ７９

Ⅰ　研究開発実施報告（概要）

大槌高校三陸復興みらい創造プロジェクト（大槌高校魅力化構想）

事業背景	①高校が存置する大槌町は、東日本大震災津波によって壊滅的な被害を受け、**復興を担うリーダーの育成が急務(震災復興)** ②県内最大の人口減少率であり、地域貢献意欲が高い、地域を支える人材の育成が急務である(**地域を支えるリーダーの育成**)
魅力化コンセプト	大海を航る、大槌(ハンマー)を持とう
目指す人物像	**自立**　意志がある　課題をジブンゴトにし、主体的に探究・行動が出来る人 **協働**　仲間とともにある　他の価値観や文化等の多様性を受容し違いを越えて共創できる人 **創造**　逆境から創りだす　予測できない未来や想定外など逆境においても新しい価値を創りだす人

（町設置）大槌高校魅力化構想会議

→ 魅力化推進員派遣（NPO法人カタリバと連携）
カリキュラム開発専門家１名
地域協働学習支援員２名

コンソーシアム（管理機関：岩手県教育委員会）

- 町行政
- 商工会
- 町教委
- 高校PTA
- 大槌高校
- 認定NPOカタリバ
- 東京大学海洋研究所
- 町立学校
- おらが大槌夢広場

[校内体制]教員全員が所属するワーキンググループを設置。コンソーシアムと連動して魅力化を推進

令和元年度

①コンソーシアムの設置

・コンソーシアムが主導となりビジョンを策定
・コンソーシアムの各機関との具体的な連携

②学校設定科目「三陸みらい探究」の設定

・行政と連携した「SIMおつち2030」や「三陸復興ラーニングジャーニー」等の三陸みらい探究の初学年カリキュラムの設計

令和２年度

①「三陸みらい探究」２年生実施
・２年目となった三陸みらい探究では課題解決型PBL「マイプロジェクト」をコンソーシアム構成団体と協働し実施

②「三陸みらい探究」評価設計・運用
・学校設定科目の評価ルーブリックの設計、運用を全職員が連携して実施。

③学校設定教科「地域みらい学」設計（計 17単位）
・総合的な探究の時間「三陸みらい探究」に加えて５科目それぞれで学校設定の探究科目を開設。
※地域みらい学を学校設定教科として立ち上げ

総合的な探究の時間「三陸みらい探究」（5単位）

国語	公民	英語	数学	理科
ひょっこり表現島（2単位）	まちづくり探究（2単位）	Eパスポート（3単位）	くらしmath（2単位）	おおつちラボ（3単位）

令和３年度

①学校設定教科「地域みらい学」の実施

教科と探究の連携、教科横断性の設計等校内で研修会などを行いながら実施。
地域が抱える複雑な課題に自ら問いを立て、教科で育てた資質能力を活かしながら、探究することのできる力を育みます。

②学校設定科目「三陸みらい探究」の完成
毎年修正を加え、生徒が課題解決に向けたアクションを行いながら設定した問いを探究することで、資質能力を総合的に育成した。

③継続可能な体制づくり
事業終了後も取組を継続するため校内やコンソーシアムの体制の維持を図る。

令和４年３月 31 日

研究開発実施状況報告書

文部科学省初等中等教育局長　殿

住所　　岩手県盛岡市内丸 10 番１号
管理機関名　岩手県教育委員会
代表者名　　佐　藤　　博

令和３年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を，下記のとおり提出します。

記

１　事業の実施期間
令和３年４月１日（契約締結日）～　　令和４年３月 31 日

２　指定校名・類型
学校名　　岩手県立大槌高等学校
学校長名　継　枝　　斉
類型　　地域魅力化型

３　研究開発名
大槌高校三陸復興みらい創造プロジェクト（大槌高校魅力化構想）

４　研究開発概要
（１）学校設定教科「地域みらい学」の実施
学校設定６科目によるリベラルアーツカリキュラムの円滑実施
（２）学校設定科目「三陸みらい探究」による資質能力の育成
資質能力の育成に係る効果的な取組と３年間の指導体制の確立

５　学校設定教科・科目の開設、教育課程の特例の活用の有無
（１）学校設定教科・科目　　開設している
学校設定教科「地域みらい学」
学校設定科目「三陸みらい探究」「ひょっこり表現島」「まちづくり探究」
「くらしｍａｔｈ」「おおつちラボ」「Ｅパスポート」　６科目
（２）教育課程の特例の活用　　活用している
「総合的な探究の時間」１単位と「社会と情報」２単位から１単位を減じて「三陸みらい探究」に代替する。

6　運営指導委員会の体制

氏　名	所　属・役職等	備　考
牧　野　　篤	東京大学教育学部 教授	教育専門家
廣　田　純　一	岩手大学農学部 名誉教授	学識経験者
田　中　　潔	東京大学大気海洋研究所 国際沿岸海洋研究センター 准教授	学識経験者
伊　藤　正　治	前大槌町教育委員会教育長	学識経験者

7　高等学校と地域との協働によるコンソーシアム体制

通番	機関名	機関の代表者名
1	岩手県教育委員会（管理機関）	佐　藤　　博
2	東京大学大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター	青　山　　潤
3	大槌町教育委員会	沼　田　義　孝
4	認定 NPO 法人カタリバ	今　村　久　美
5	大槌町	平　野　公　三
6	大槌町商工会	後　藤　力　三
7	大槌町立学校長会	松　橋　文　明
8	大槌町議会	小　松　則　明
9	大槌高校ＰＴＡ	菊　池　久美子

8　カリキュラム開発等専門家，地域協働学習実施支援員

分類	氏名	所属・職	雇用形態
カリキュラム開発等専門家	菅　野　祐　太	ＮＰＯ法人カタリバ	常勤
地域協働学習実施支援員	三　浦　奈々美	ＮＰＯ法人カタリバ	常勤
地域協働学習実施支援員	小野寺　　綾	ＮＰＯ法人カタリバ	常勤

9　管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

活動日程	活動内容
令和３年６月 14 日	令和３年度第１回運営指導委員会 ・今年度の活動について指導・助言
7 月 28 日	第９回魅力化構想会議兼令和３年度第１回コンソーシアム会議 ・令和２年度事業報告並びに令和３年度事業計画を協議、承認 ・全教員並びに地域協働関係者で意見交換会を開催

12 月 22 日	第 10 回魅力化構想会議 ・事業経過、関係機関との調整・要望を協議、承認
令和４年２月７日	第２回運営指導委員会 ・地域協働事業並びに今後の取組に対する指導・助言
３月 23 日	第 11 回魅力化構想会議兼令和３年度第２回コンソーシアム会議 ・令和３年度事業報告及び令和４年度事業計画を協議 ・地域協働事業の総括

（２）実績の説明

ア　管理機関による事業の管理方法とコンソーシアムの構成について

復興推進のリーダーとなる人材の育成を目指し、大槌町役場、高等教育機関、地域、産業界、ＮＰＯ等がコンソーシアムを構築し、協働して子どもたちの実践的な学びを支援しながら地域を活性化し、教育と地域復興の相乗効果を生み出すことで、新しい価値を創造できる人材を育成する。また、管理機関独自の予算措置を行うとともに、事業をきめ細かく実施できるように教員の配置等の人的支援を行い、定期的に学校を訪問して事業の進捗を確認し、必要に応じ指導助言を行う。

イ　カリキュラム開発等専門家について

菅野祐太（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週５日常駐

活動日程	活動内容
毎月１回	・大槌高等学校の職員会議等に出席 ・魅力化の取組の進捗や運営指導委員会やコンソーシアム等開催された会議の内容を共有
不定期	・コンソーシアムによる魅力化に関する会議の企画・運営 ・教育課程検討会議に参加 ・町立学校コミュニティー・スクール等の会議に参加

ウ　地域協働学習実施支援員について

三浦奈々美（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週５日常駐

小野寺　綾（町から認定 NPO 法人カタリバへの業務委託）　週５日常駐

日程	内容
毎月１回	・大槌高等学校の職員会議等に出席 ・魅力化の取組について共有
毎週１回	・１・２年生の総合探究の企画・運営 ・教員と打合せを行い、次回の授業方針を決定
令和３年７月 20 日	マイプロフィールドワーク ・各テーマに精通した地域の大人と出会うことを目的として「マイプロジェクト・フィールドワーク」を実施した
令和３年９月 17 日	「大槌発みらい塾！」の企画運営 ・地域の方々による１・２学年向け職業講話
９月～	・ＩＣＴ機器の活用・管理 ・オンライン探究連携の企画・運営

年２回	・地域協働事業の評価および集計・分析
年継続	・探究のルーブリック評価の構築
随時	活動の発表および紹介 ・地域の中学校を訪問し中学生に高校を紹介 ・来校者に探究活動について説明・紹介

エ　管理機関における主体的な取組について

（ア）管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

・大槌町からカリキュラム開発等専門家１名、地域協働学習実施支援員２名の配置

・管理機関による、継続的な取組を行うための教職員の特別加配１名

（イ）事業終了後の自走を見据えた取組について

本事業により開発した研究内容について、事業終了後も充実発展させていくとともに、管理機関により、所管する高等学校へ広く周知していく。また、学校設定教科及び学校設定科目の実施について、適切な教育課程となるよう指導助言を行う。

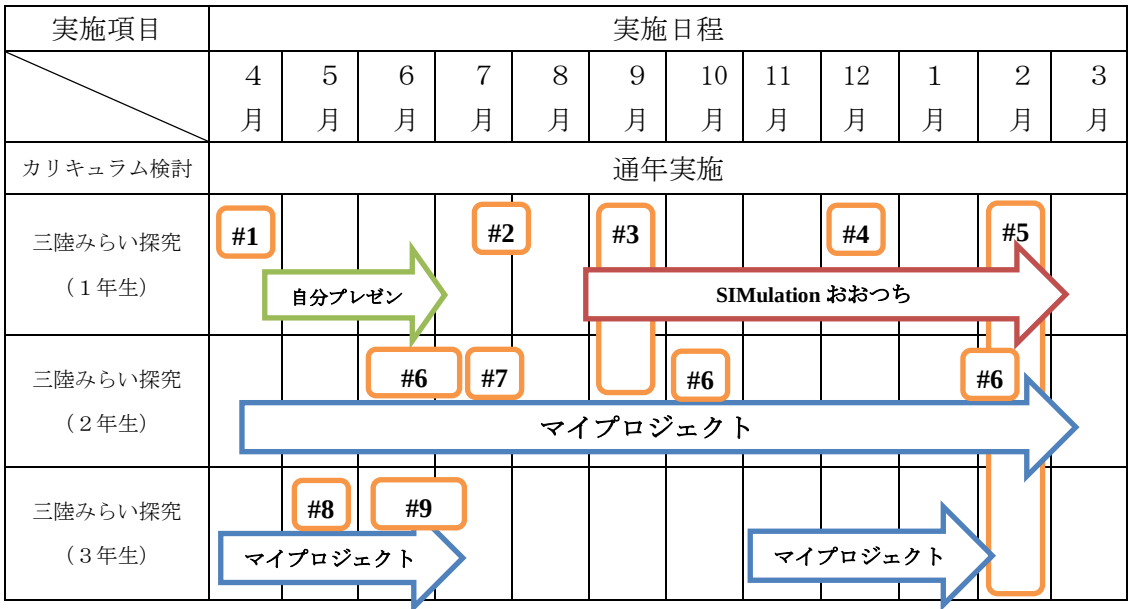
令和４年度から始まる本事業の後継事業である「新時代に対応した高等学校改革推進事業」への参画について検討し、全日制普通科としての在り方を柔軟に見直していく。

（ウ）高等学校と地域との協働による取組に関する協定文書等の締結状況について

大槌町と大槌高校は「震災伝承推進活動に関する協定」を交わし、町の文化交流施設に本校の特徴的な取組である復興研究会の常設展示を行っている。

10　研究開発の実績

（１）実施日程



＃１：オリエンテーション　＃２：ちょこっとマイプロ　＃３：大槌発みらい塾！

＃４：ラーニングジャーニー　＃５：探究発表会　＃６：online 探究連携交流授業

＃７：マイプロフィールドワーク　＃８：職業インタビュー

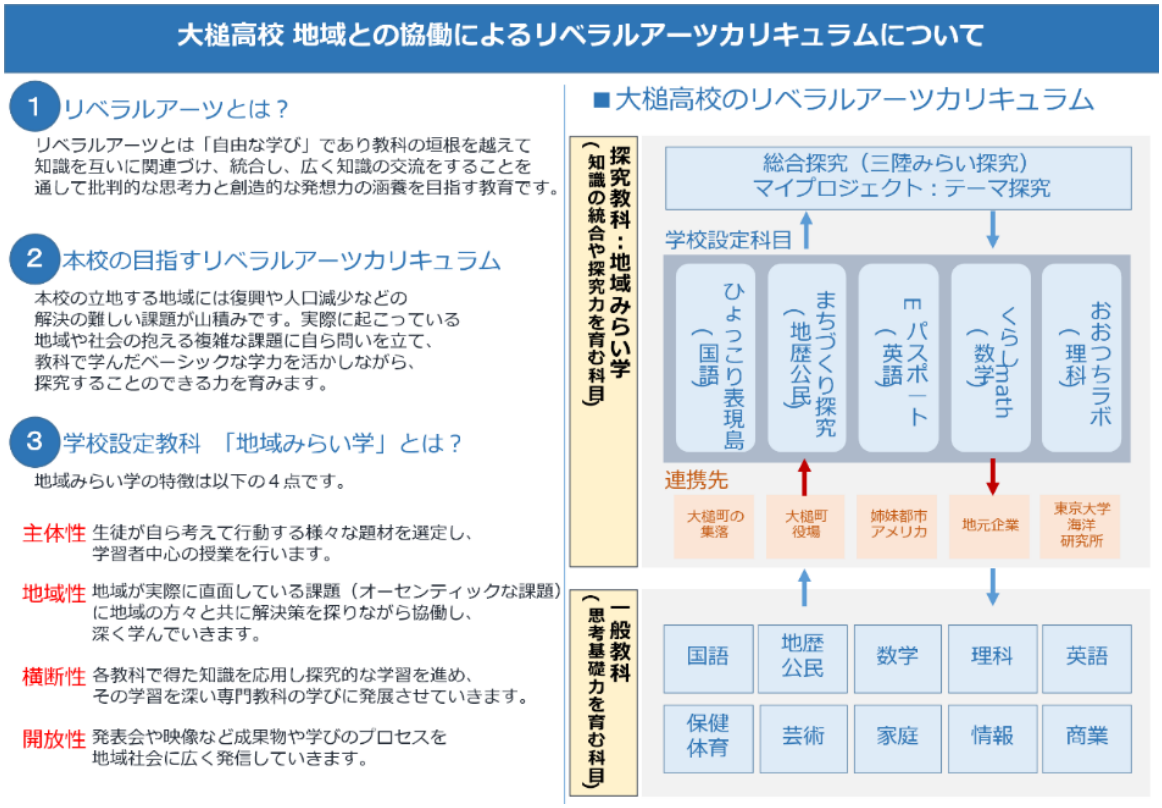
＃９：アカデミックオンラインディスカッション

（２）実績の説明

ア　研究開発の内容や地域課題研究の内容について

（ア）学校設定教科「地域みらい学」の実施

総合的な探究の時間の代替である三陸みらい探究を軸にして、５教科に探究的な学びを実践する科目を設定した。三陸みらい探究の中心はマイプロジェクトであるが、新しい学校設定科目ではそれぞれの教科の特性を踏まえながら、必要に応じて科目を横断的に接続しながら地域課題探究に取り組む。



科目名 学年・単位数	今年度の取組	今後の取組
ひょっこり表現島 ２年生 ２単位	［他地域の生徒へのインタビュー調査］全国で使用される方言を調査し、学級内で共有し合うことを通して自分の住む地域以外で使われている方言と比較しながら、自らが無意識に活用している方言について理解を深めた。また調べた方言を活用して、関西の学校とオンラインで連携し、方言がどのような場面で使用されるのか（話す相手や状況により使用言語が異なるのか）に関するインタビュー形式の調査を行った。 ［方言地図の作成］大槌の 26 の方言（「ごんぼほる」「ひゃっこい」「のらすなよ」等）が釜石、鵜住居、大槌のそれぞれの地域における使用実態に違いはあるかを地図にすることで定量的に可視化した。 ［方言による地域ＰＲ動画］方言を活用して、大槌町・大槌高校を自分なりの視点で映像としてまとめる。どのような方言や視点が見られるのか等、他者視点を持ちながら制作を行う。	・今回の活動で興味を持った生徒は教育課程外の時間を活用して、さらなる探究の機会を得る活動を行う。 ・引き続き探究的な視点による学びや他関係機関との連携・継続性を担保する。

まちづくり探究 ３年生 ２単位	前期中間は身近なテーマ（「犬」と「猫」どちらを飼うべきかなど）のディベートを通して主張を立論することに重点を置いた取組を行った。前期末は「大槌町と釜石市を合併すべきか」というテーマで議論を行い、立論の背景となる町の課題や財政の課題について理解を深めた。 後期中間はデザイン思考で課題を解決することを目指し、「学校の課題をデザインする」ことをテーマに学習を行った。校内で交流が生まれることを狙った「子ども食堂」の設置や「校内表示盤」の改良など具体的な意見が出された。後期末は町の交流センターの課題を解決するというテーマで「若者への震災伝承の方法について考えよう」など、解決策を提案した。	・課題を構造的に捉えることができる効果的なインプットの機会を拡充する。 ・次年度以降は教科の学びとの接続を図る。同時期に学習する公民科目と関連付け、教科と探究の横断を図る。
くらしmath ２年生 ２単位	前期は、商業活動において数学がどのように活用されているかを学んだ。料理の原価を計算で求める方法を学んだ後、生徒自身が作りたいメニューを決めて、必要な材料とその費用を算出した。その後、売価も想定して、効率的に目標売り上げをあげるための計算を連立方程式から求めた。 後期は、日常で使われている道具を用いて数学がどのように関わっているかを学んだ。建物の高さをメジャーと角度から算出することについて、Ｅｘｃｅｌを活用して計算し、レポートにまとめた。これまで学んできた手法を活用し、現在は大槌町をデータから数学的に考察する活動を行っている。	・大槌町を数学的に考察する経験を活かして、今後は他の市町村との比較もテーマに入れて取り組むことで、大槌町の課題を数学的に捉える機会とする。
Ｅパスポート ２年生 ３単位	前期で身につける資質能力をジブンゴト・課題設定と置き、ネイティブスピーカーの故郷であるカナダ・トロントに「留学してみる」ことをテーマに、ホストファミリーへの自己紹介やお土産、自分の学校等を紹介するというプレゼンの作成を行った。生徒たちは伝えたいことを英語にして、英語を母語にする人ともコミュニケーションを図ることができることを学んだ。 後期は身近にある複雑な事柄についてプレゼンや文章をつくり伝えるという取組を行った。外国人に災害に関することや防災グッズについて説明し、大槌を１日満喫できるようなプランを作成し、大槌の姉妹都市出身のＡＬＴにオンラインによるプレゼンを行った。また大槌で生活する外国人を授業に招き、身近にいる外国人について意識する機会を設けた。	・外国人に向けた大槌の紹介映像を作る等の取組に発展させる。積極的にフィールドワークを行うことを通して、より身近なテーマで表現する機会を作る。
おおつちラボ ３年生 ３単位	日常生活において「便利・不便」に感じることや「不思議」なことから調べたいテーマを設定し、仮説を立て、調べ学習によって検証する過程を学んだ。また、仮説に対して、自分なりに実験等を行い、データを活用した検証を行う過程を学んだ。例：「カップ麺は鍋で煮たら早くできるのか。」「本当にシャボン玉は雨の日割れないのか」 地域課題とＳＤＧｓに注目し、17 項目ある中の食糧問題、医療、海の生態系等の理科的な到達目標に特化して調査を行った。まずは国・企業・県・大槌や釜石市の成果と課題や取組の現状把握を行った。その上で自分の町をより持続可能にしていく視点を提案するため、他の市町村で取り組んでいる前例を論文から見つけ、効果の有無を検証し卒論ポスターとしてまとめた。 例：「どうしたらごみの量を減らすことができるのか」「無人バスをどのようにしたら走らせることができるか。」	・町内でのフィールドワークや、出前授業の機会を増やす。また郷土財エリアなどを題材に、自然保全について考えるような授業を組む。自分なりに課題を見出し、噛み砕くことができるような基礎的な学力をつける。

（イ）学校設定科目「三陸みらい探究」による資質・能力の育成

［１年生の活動］

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
５月～７月	<u>自分紹介プレゼンテーション</u> 探究を進めていくために必要な課題設定力を育むために、自己発見・自己理解を通して自分なりの視点を獲得した。自分を紹介するプレゼンテーションを作成し、町内の中学生に発表した。	**［表現し内省する］** 相手に伝わるよう表現することを通して、自己を内省する。
８月	<u>１週間マイプロジェクト</u> 自分が普段気になっていることから、１週間で実施できるプロジェクトを設定し、プロジェクトによって解決できたことを振り返った。	**［課題解決の枠組みを知る］** 身近なテーマで小さなプロジェクトを実践し、課題解決の方法を知る。
９月	<u>大槌発みらい塾！</u> 町内外で働く大人（大学生３名含む）10 名が取り組むマイプロジェクトを聞き、今後の進路や、地域社会との関わり方について考えた。	**［生き方を考える］**他者の生き方に触れることを通して、自らの生き方について考える。
10 月～２月	<u>SIMulation おおつち 2030</u> 理想とする町の姿を考え、町内にある地域課題の解決策を構想した。地域課題は、町の総合計画に掲げられた分野に沿って大槌町議会に設定していただいた。10 月には課題の現状を理解することを目的に、大槌町議会議員による講義や、町役場に対するヒアリング調査を実施した。12 月には解決策の先進事例を知ることを目的に、町外の自治体や民間団体を訪問し、フィールドワーク調査を実施した。２月に校内で発表会を実施した。	**［地域課題を知り、解決のための方策を考える］** 町内の地域課題を題材に、課題解決のための方策を考え、提案を行う。

［２年生の活動］

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
５月～７月	<u>マイプロジェクト①テーマ設定</u> 短期間でのプロジェクト活動や大人への相談活動を通して、個々人の興味関心あるテーマを発見し、探究したい問いを設定した。 **・ちょこっとマイプロジェクト** 個人で身近な題材から問いを設定し、１週間で調査を行い、得られた成果を報告した。 **・マイプロジェクト・フィールドワーク** 自分のテーマと似た活動に取り組む地域の方を訪ねて、体験活動やアドバイスをもらうフィールドワークを実施した。	**［マイプロジェクト探究に向けた課題を設定する］** 個人の興味関心あるテーマを発見し、探究したい問いを設定する。
９月	<u>大槌発みらい塾！</u> 町内外で働く大人（大学生２名含む）10 名が取り組むマイプロジェクトを聞き、今後のプロジェクトの発展や卒業後の進路選択に役立てる機会とした。	**［地域と探究を接続する］** 地域課題解決のモデルケースに触れ、マイプロジェクトに活かす。
９月～12 月	<u>マイプロジェクト②課題解決アクション実践</u> 課題解決に向けたアクションを行いながら設定した問いを探究す	**［アクションを通して課題解決を学ぶ］**

	ることで、課題解決を行う資質能力を総合的に育成した。定期的に成果報告の機会を設け、考えを相手に伝える力を高めた。 **・ゼミ活動（10 月～１月）** 課題設定から解決策実施までの流れを繰り返した。テーマに応じてゼミに分かれ、教員が分担して生徒の活動を支援した。 **・オンライン探究連携（５月・７月・12 月・２月）** 山形県・熊本県の小規模校とオンライン接続し、互いの活動について発表しフィードバックする交流活動を定期的に実施した。 **・中間発表会（10 月）・最終発表会（２月）**	課題解決を行う資質能力を総合的に育成する。

［３年生の活動］

時　期	内　容	各単元のねらい（連続性）
４月～７月	**<u>アカデミック・オンラインディスカッション（大学・短大進学、公務員希望生徒）</u>** ２年生のマイプロジェクト探究で取り組んだテーマをさらに深めることを目的に、論文等を読みながら新たな問いを設定した。問いを深めるために議論したい専門家に依頼し、４人グループでオンラインディスカッションを実施した。 **<u>職業インタビュー（専門学校進学、就職希望生徒）</u>** 就きたい職業に必要な能力を理解することを目的に、生徒が関心ある職業の社会人にオンラインでインタビューを実施した。自分の現状と就きたい職業に必要な能力とのギャップや課題を把握し、それらを解決するミニアクションを１週間で実践した。	**［マイプロジェクトを進路に繋げる］** マイプロジェクトでの探究活動を軸に卒業後の進路を考え、必要な力を育成する。
11 月～２月	**<u>18 年間で身につけた“大槌(ハンマー)”と知見</u>** オープンダイアログや人生グラフの作成を通して、各生徒が 18 年間の人生で身につけた“大槌(ハンマー)”＝強みを自分の言葉で表現した。また、身につけた“大槌”や知見をプレゼンテーションにまとめ、探究活動等で関わった町民に向けて発表した。	**［探究での学びを総括する］** これまでの探究活動や学びを整理し、自分なりの言葉で表現する力を身につける。

イ　地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け（各教科・科目や総合的な探究の時間、学校設定教科・科目等）

令和元年度から学校設定教科「地域みらい学」を設定し、その中に総合的な探究の時間の代替として学校設定科目「三陸みらい探究（５単位）」を設置している。令和３年度からは学校設定科目「ひょっこり表現島」「まちづくり探究」「くらしｍａｔｈ」「おおつちラボ」「Ｅパスポート」の５科目を追加開設した。地域や社会の抱える複雑な課題に自ら問いを立て、教科で学んだ基礎学力を活かしながら、探究する力を育む。

ウ　地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ，教科等横断的な学習とする取組について

各科目に関連付けた探究科目である地理歴史・公民「まちづくり探究」、理科「おおつちラボ」ではそれぞれの科目で検討を行う枠組みを「理想の状態」「課題」「仮説の設定」「解決策」として共通させることで、生徒自らが設定した事象に対して社会的な視点、理科的な

視点という違いを活かしながら、課題解決のフレームを学んだ。

探究的な学びを実践する５つの学校設定科目では各科目の特性を活かしながら地域課題を考え、解決方法を模索・表現することを目的としている。この過程において「三陸みらい探究」で培った知識や技能、思考力や表現力を効果的に活用した。

エ　地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラムマネジメントの推進体制

令和２年度に策定した新カリキュラムを今年度から実施している。

オ　学校全体の研究開発体制について

副校長とカリキュラム開発等専門家が事業の企画・運営の中心となり進めている。地域連携は地域協働学習実施支援員が中心となり週１回学年ごとに探究活動の進捗を確認・検討している。この検討には校内に配置されているコラボスクール（公営塾）のスタッフも参加している。新設した５科目についても定期的に授業公開や教員研修会を開催し指導内容・方法を情報共有している。

カ　カリキュラム開発等専門家、地域協働学習実施支援員の学校内における位置付け

カリキュラム開発等専門家１名、地域協働学習実施支援員２名が職員室に席を持ち常駐している。入学者選抜関連以外のすべての会議に参加するなど、教員とともに教育活動を行っている。各学年に１人ずつ配置し、学年の活動に参加するなど、生徒の状況を把握しながら活動している。

キ　学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

研究開発・推進に関わる各施策は、校長の指示のもと副校長が主に担当しており、必要に応じて校務運営委員会や職員会議に諮られる。また校内で行う、中間反省会議や年度末反省会議で成果や課題について共有し、取組についての意見交換を行う。

ク　カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

新しいカリキュラムについてコンソーシアム会議や魅力化構想会議において協議した。委員からの指導・助言を学校設定教科・科目に反映した。また、三陸みらい探究における生徒の活動に対して指導・助言をいただいた。

ケ　取組に対する指導・助言等の専門家による支援について

毎年度２回運営指導委員会を開催した。委員からは専門的な観点から活動計画や評価方法・検証等について助言をいただき、活動の改善を図った。

コ　類型毎の趣旨に応じた取組について

小規模高校は地域資源と接続しやすいというメリットがある反面、自分と同様な興味関心を持つ生徒や教員と出会うことが難しいというデメリットがある。オンラインを活用することで学校の域を越え、同じような探究テーマで活動する生徒や、そのテーマに専門性を持つ大人と交流することが可能となる。そこでマイプロジェクトを行っている小規模校３校が集い探究交流授業を行った。生徒の探究活動のジャンルごとにグループを作り、グループごとに発表・質疑を行った。

※連携校　山形県立小国高等学校、熊本県立小国高等学校

サ　成果の普及方法・実績について

活動の内容や状況について学校ホームページで公開している。また、大槌町の広報誌に毎月活動の様子を掲載し町内へ広報している。

管理機関が実施する各種協議会等において本校の取組を周知し、地域と協働した教育活動

による学校の特色化・魅力化を推進している。

毎年、地域協働についての研究協議会を開催し事業の成果を発表している。昨年度に続き今年度もオンラインでの実施となったが全国から 100 名を超える参加があった。

11　目標の進捗状況、成果、評価

本事業申請時に提出した目標設定シートに準じて進捗状況の成果を検証する。

（1）卒業時に生徒が習得すべき具体的能力を測るものとして設定した成果目標

下記指標に対する４件法によるアンケートの肯定的回答の割合

三菱 UFJ リサーチによる地域協働校対象の調査結果から抽出したもの。

番	設問	R1 入学生		R2 入学生		R3 入学生
		R1 入学時	R3 12 月	R2 10 月	R3 12 月	R3 12 月
1	**課題の発見と解決に必要な知識および技能**	67.9%	71.6%	59.4%	67.0%	48.3%
	―自分で計画を立てて活動することができる	73.8%	67.6%	56.6%	68.2%	39.0%
	―現状分析し、目的や課題をあきらかにすることができる	61.9%	75.7%	62.3%	65.9%	57.6%
2	**探究の意義・価値理解、地域社会との関わり合い**	71.4%	63.5%	51.9%	59.1%	50.0%
	―地域をよりよくするため、地域の問題に関わりたい	76.2%	67.6%	52.8%	63.6%	50.8%
	―誰かに言われなくても自分から勉強する	66.7%	59.5%	50.9%	54.5%	49.2%
3	**課題発見・解決への指向**	76.2%	78.4%	67.0%	67.0%	66.1%
	―情報を、勉強したことと関連づけて理解できる	81.0%	81.1%	69.8%	65.9%	64.4%
	―地域や社会での問題や出来事に関心がある	71.4%	75.7%	64.2%	68.2%	67.8%
4	**主体性・協働性**	65.5%	74.3%	58.5%	67.0%	59.3%
	―忍耐強く物事に取り組むことができる	64.3%	75.7%	67.9%	68.2%	55.9%
	―自分の考えをはっきりと相手に伝えることができる	66.7%	73.0%	49.1%	65.9%	62.7%
5	**価値創造への提案と次へつながる学び**	64.3%	68.9%	55.7%	63.6%	50.8%
	―国や地域の担い手として、政策決定に関わりたい	47.6%	62.2%	37.7%	54.5%	37.3%
	―学習を通じて、自分がしたいことが増えている	81.0%	75.7%	73.6%	72.7%	64.4%

※実施会社の都合で毎年同時期に行うことが出来なかった。しかし、Ｒ１・２入学生ともに資質能力の向上が見られる。R3 入学生は入学から時間がたっており低い数値となっているが、入学時から２年生にかけて他校も含めて減少傾向にあるため最も低い時期での調査と考えられる。

（2）目標設定シートは別添

12　次年度以降の課題及び改善点

（1）研究開発に係る課題や改善点について

ルーブリック評価については、生徒自身が目指したいと思う目標を項目として設定することが必要である。また、昨年度はルーブリックの精度が低く、評価に多くの時間を要したので、今年度はルーブリックを改善し実用的なものとした。ただし、より目標に基づいた自己評価の機会を増やすなど、生徒自身が総合探究を通じて目指したい姿を考える等の工夫が必要である。

今年度から開始した探究的な学びを進める学校設定科目においては各担当が手探りで試行錯誤を繰り返している。定期的に全体での検討を行い、科目の目標を確認しながら、より深い探究活動が行える科目にしていく必要がある。

（２）今後の自走に向けた方向性について

県教育委員会では大槌高校の地域協働の取組を高く評価している。

地域との連携・協働、コーディネーターの配置、探究的な学びの充実及び目指す人材育成のためのカリキュラムマネジメントなど、県内の高校では最も先進的に取り組んできた。次年度以降はこれまでの取組を継続しながら、個別最適な学びと協働的な学びの効果的実現に向けて普通科の見直しを含めて検討していく。

【担当者】

担当課	学校教育室　高校教育担当	ＴＥＬ	019-629-6140
氏　名	中田裕治	ＦＡＸ	019-629-6144
職　名	指導主事	e-mail	nakata-yuuji@pref.iwate.jp

Ⅱ　研究開発の内容（詳細）

１　会議関係

（１）魅力化構想会議・地域協働事業コンソーシアム会議

大槌高校では、高校と町行政、町議会、各種学校の教育機関及び企業、研究機関との連携を拡充するとともに、生徒の主体的な学びへとつながる様々な教育機会の提供の充実を図り、県が主催するコンソーシアム会議と町が主催する大槌高校魅力化構想会議を設置している。

ア　魅力化構想会議委員・コンソーシアム会議委員

No	氏名	所属・役職	魅力化構想	コンソ委員
1	平　野　公　三	大槌町長	○	○
2	青　山　　潤	東京大学大気海洋研究所教授	○	○
3	小　松　則　明	大槌町議会議長	○	○
4	継　枝　　斉	大槌高校校長	○	○
5	岩　崎　友　一	岩手県議会議員	○	
6	芳　賀　　潤	大槌町議会議員	○	○
7	後　藤　力　三	大槌商工会会長	○	○
8	今　村　久　美	認定ＮＰＯ法人カタリバ代表	○	○
9	千　田　伏二夫	千田精密工業取締役会長	○	
10	神　谷　未　生	おらが大槌夢広場代表	○	
11	阿　部　　司	大槌学園ＰＴＡ会長	○	
12	芳　賀　　新	吉里吉里学園ＰＴＡ会長	○	
13	阿　部　　武	大槌高校同窓会長	○	
14	菊　池　久美子	大槌高校ＰＴＡ会長	○	○
15	北　田　竹　美	大槌町副町長	○	
16	沼　田　義　孝	大槌町教育委員会教育長	○	
17	松　橋　文　明	大槌学園学園長	○	○
18	浅　沼　寿　典	吉里吉里中学校長	○	
19	志　田　　敬	大槌高校副校長		○
20	藤　元　　衛	大槌高校事務長		○
21	鈴　木　紗　季	大槌高校教務主任		○
22	熊　谷　一　郎	大槌高校生徒指導主事		○
23	菊　池　竜　太	大槌高校進路指導主事		○
24	谷　藤　怜　美	大槌町教育委員	○	
25	八木澤　弓美子	おおつちこども園園長	○	

イ　他出席者（オブザーバー）

No	氏名	所属・役職	魅力化構想	コンソ委員
26	藤　原　　淳	大槌町総務課長		
27	太　田　和　浩	大槌町企画財政課長		
28	岡　本　克　美	大槌町産業振興課長		

ウ　第９回大槌高校魅力化構想会議兼地域協働事業令和３年度第１回コンソーシアム会議

日　　時：令和３年７月 28 日（水）14 時 00 分～15 時 30 分

場　　所：岩手県立大槌高等学校

内　　容：新委員紹介、令和３年度事業計画、学校設定教科「地域みらい学」について、
令和３年度入学者に関すること、校則検討委員会について、
委員と教職員による大槌高校魅力化に関する意見交換ワークショップ

発言要旨：

- 在校生が後輩に入学を勧めたいと思えるような高校を目指してほしい。
- 地域住民と高校生が学び合い、町と一緒に学んでいく学校にしていきたい。
- 発表等を通して表現力がついてきた中で、それらに対して苦手意識を持つ生徒をどのようにサポートするかを検討していきたい。
- 先生たちが変わったとしても、地域が支えながら取組を続けられる体制をとってほしい。
- 卒業しても町に帰ってきて、学びのフィールドとして活かせるような地域・高校になってほしい。
- 魅力化のキーマンとなる先生方に、大槌高校で働きたいと思われるような学校にしていきたい。

エ　第 10 回大槌高校魅力化構想会議

日　　時：令和３年 12 月 22 日（水）13 時 30 分～15 時 30 分

場　　所：大槌町文化交流センターおしゃっち

内　　容：経過報告、マイプロジェクト探究発表、はま留学生より報告、
来年度の事業方針及び会議の体制について

発言要旨：

- ９年生で大槌高校を志望する生徒は、大槌学園 38 名、吉里吉里学園３名であり、地域みらい留学で徳島に進学する生徒も１名いる。内陸への進学志望や部活動で進学先を選ぶ生徒が増えている。
- はま留学生を上手く活用し、地元の子供達が地域の魅力を再確認する機会を創ってほしい。生徒数の減少の分析と対策を行っていく必要がある。
- 大槌高校の魅力は何であるのか、この会議を活用して考えていく必要がある。また多様性の時代に合わせて、生徒に個別でフレキシブルに対応できるカリキュラムを魅力として打ち出すという方向性もある。
- 個別的な学びと協働的な学びの両方を支えていくためには、それらをコーディネートしていく人材の確保が必要である。
- 中学生にとって高校選びの選択肢が多様化している中で、大槌高校を選ばない生徒たちの理由を分析していくべきである。

・　高校に対する固定化したイメージがあるため、大槌高校生の取組を中学生や保護者に情報提供する機会が必要である。
・　話し合い活動を通して、生徒の会話力や発信力を育てる必要がある。

オ　第 11 回大槌高校魅力化構想会議兼地域協働事業令和３年度第２回コンソーシアム会議

日　　時：令和４年３月 23 日（水）14 時 00 分～16 時 00 分
場　　所：大槌町文化交流センターおしゃっち
内　　容：令和３年度事業報告・決算、普通科改革支援事業について、
　　来年度の事業の方向性について

（２）運営指導委員会

大槌高校では事業の効果を高めるため運営指導委員会を設置し、研究開発の実施状況について有識者から指導・助言をいただき事業運営に反映させている。

ア　運営指導委員会委員

番号	所属	氏　　名
1	東京大学教育学部教授	牧　野　　篤
2	岩手大学農学部名誉教授	廣　田　純　一
3	東大海洋研国際沿岸海洋研究センター准教授	田　中　　潔
4	前大槌町教育委員会教育長	伊　藤　正　治

イ　出席者

番号	所属	氏　　名
1	岩手県教育委員会事務局学校教育室高校教育課長	須　川　和　紀
2	岩手県教育委員会事務局学校教育室指導主事	中　田　裕　治
3	大槌高校校長	継　枝　　斉
4	大槌高校副校長	志　田　　敬
5	大槌高校事務長	藤　元　　衛
6	大槌高校教務主任	鈴　木　紗　季
7	大槌高校進路指導主事	菊　池　竜　太
8	大槌高校生徒指導主事	熊　谷　一　郎
9	１学年主任	近　藤　健　一
10	２学年主任	野　田　啓　志
11	３学年主任	菊　池　直　美
12	大槌町教育委員会学務課　班長	黒　澤　直　美
13	大槌町教育委員会学務課　指導主事	八重樫　英　広
14	大槌高校カリキュラム開発等専門家	菅　野　祐　太
15	大槌高校地域協働学習実施支援員	小野寺　　綾
16	大槌高校地域協働学習実施支援員	三　浦　奈々美

ウ　令和３年度第１回運営指導委員会

日　　時：令和３年６月 14 日（月）14 時 00 分～15 時 30 分

場　　所：岩手県立大槌高等学校（委員はオンラインによる参加）

内　　容：経過報告

令和３年度事業計画に関すること

研究開発成果の分析・検証等に関すること

発言要旨：

［学校設定教科に関すること］

・　地域にある経験知や暗黙知が研究の最先端とつながっていることを認識させる機会として、探究等の教科を活用してほしい。（田中委員）

・　興味関心からの探究だけではなく、なぜその問いに向き合うのか、生徒自身が自己に問いかける力を高めることを意識したカリキュラムを考えてほしい。（牧野委員）

・　「まちづくり探究」では、議論を通して課題を抱える人たちへの共感を学ぶ要素も入れると良い。（廣田委員）

［評価に関すること］

・　生徒の発話や行動の変化をテキストベースで記録し、定性的な評価を取り入れても良い。（廣田委員）

・　クラスター分析等の分析手法を用い、生徒が持つネットワークを可視化することが効果的である。（牧野委員）

［持続可能な体制及び CS に関すること］

・　３年間の取組が大槌高校及び大槌町の文化として引き継がれていけるようなカリキュラムや地域連携を意識してほしい。（牧野委員）

・　CS の趣旨は、先生が教育の専門職として子供たちと向き合えるよう地域が責任を持つことである。高校と自治体との関係性を保つため、役場が責任をとる体制が必要となる。（牧野委員）

・　学校や地域、保護者が共に「どのような子供たちを育てたいか」というビジョンを描きながら、大槌高校の顔となるカリキュラムや CS の体制を模索してほしい。（伊藤委員）

・　高校の活性化には自治体の強い想いが重要であり、担当者の異動等を考えると役場が主体的に関わる組織は残しておいたほうが良い。（廣田委員）

エ　令和３年度第２回運営指導委員会

日　　時：令和４年２月７日（月）15 時 00 分～16 時 30 分

場　　所：岩手県立大槌高等学校（委員はオンラインによる参加）

内　　容：経過報告・令和３年度事業計画に関すること

令和３年度教育課程の運用に関すること

研究開発成果の分析・検証等に関すること

後継事業の検討について

発言要旨：

［学校設定科目に関すること］

・　学びを科目ごとに体系化された学問分野と考えるのではなく、それぞれの学問や学びが融合し合っていることを意識してほしい。（牧野委員・廣田委員）

・　地域を活かした学びを展開することで様々な成果が出ているので、生徒が毎年変わっても対応できるようなカリキュラムにしてほしい。（伊藤委員）

・　全ての教科が生徒それぞれにとって強く探究したいこととなるのは難しいかもしれないが、手を動かしていきながら学ぶという体験を通して、自分の限界を超える経験をしてほしい。（田中委員）

・　おおつちラボでは、地形や地質などの地学分野を取り入れることで地域社会と関わりが生まれる。（廣田委員）

・　くらし math では、経済に関わる投資や取引など数字が関わる実学を取り入れると、より生徒が社会とつながっている感覚を持てる。（廣田委員）

・　Ｅパスポートでは、相手のバックグラウンドを意識したコミュニケーションの方法について学んでいけると良い。（廣田委員）

・　お互いに対話をしながら学んだことを公共財にしていくことで、生徒たちの学びはさらに深まり、新しい価値観を得ることができる。（牧野委員）

［評価に関すること］

・　入学当初は数値が高いが、学年進行とともに下がった生徒の要因を分析し、必要に応じてフォローをしてほしい。（廣田委員）

・　学校のカリキュラムに合わせることが困難な生徒に対しては、学校だけに閉じ込めておくのではなく、地域の人たちにも積極的に関わってもらう方法も取れるのではないか。（牧野委員・田中委員）

［今後の取組や体制に関すること］

・　義務教育段階との接続が進むことで、さらに高校の学びも充実するような体制を整えてほしい。（伊藤委員）

・　取組を継続させていくためには、町や県教委からの人的な支援や財政面でのサポートが必要である。（伊藤委員）

・　過去の経験に囚われるのではなく、常に新しいものに触れていきながら学び続けていく力が生徒や教員にも求められている。（牧野委員）

・　学校が対話型の組織となり、子供たちを通して地域と高校も対話ができる関係性がつくられると、さらに学校や地域も魅力的になる。（牧野委員）

（３）地域協働研究協議会

日　　時：令和４年１月 12 日（水）13 時 00 分～15 時 00 分

場　　所：Zoom によるオンライン開催

発表内容：事業の柱として取り組んできた３分科会において、生徒の取組発表及び有識者と教員によるパネルディスカッションを実施。また、有識者と高校魅力化の方向性について協議を行う全体会を実施。

［分科会］

【Ａ】地域と協働した探究的な学び（三陸みらい探究）

①　２年生生徒によるマイプロジェクト活動発表、質疑応答

②　パネルディスカッション『探究的な学びを通してどのような力が身に付くのか』

登壇者：東京大学教育学部教授 牧野篤氏、大槌高校教務主任 鈴木紗季

【Ｂ】地域の資源を活かした特徴的な学び（はま研究会・復興研究会）

①　はま研究会及び復興研究会生徒による活動発表、質疑応答

②　パネルディスカッション『県立高校と地域・大学との連携で実現できる学びとは何か』

登壇者：東京大学大気海洋研究所 国際沿岸海洋研究センター長 青山　潤氏

はま研究会顧問 遠藤宗啓、復興研究会顧問 木村有里

【Ｃ】校則を通して対話的に課題解決をする学び（校則検討委員会）

①　校則検討委員会生徒による取組発表、質疑応答

②　パネルディスカッション『生徒が主体的に校則を変えることで学校はどう変化するのか』

登壇者：経済産業省サービス政策課長(兼)教育産業室長・スポーツ産業室長　浅野大介氏

認定 NPO 法人カタリバ代表　今村久美氏

生徒指導主事 熊谷一郎

［全体会］パネルディスカッション『これからの高校魅力化の方向性について』

登壇者：青山潤氏、浅野大介氏、牧野篤氏、継枝斉氏（大槌高校校長）

司　会：認定ＮＰＯ法人カタリバ代表　今村久美氏

発言要旨：

［分科会Ａ：地域と協働した探究的な学び］

・　マイプロジェクトを通して、自分から出発している課題を他者と関わり合いながら考えることで、自分の課題を地域や社会の課題として捉え直すことができる。

・　学校をハブにして社会と行き来する循環が起こることで、子供たち自身が新しい経験を常に組み替えることができる。また、学校や教員の機能もバージョンアップしていく。

・　探究活動や地域協働を通して言葉を豊かにしていくことで、言葉を介して地域との関係性をつくることができ、子供たちも社会の一員として位置付けられる。

［分科会Ｂ：地域の資源を活かした特徴的な学び］

・　大槌高校と東大海洋研は、「大槌町のために」という共通の目的があったから上手く連携ができた。

・　学校の中だけではなく、地域を積極的に頼り生徒と一緒に学んでいく姿勢が、これからの時

代の教員には求められている。

［分科会Ｃ：校則を通して対話的に課題解決をする学び］

・　初めに生徒が主体となって作った生徒宣言が、その後も立ち帰れる大切な理念となった。
・　校則をただ変えるのではなく、何のために変えるのか、そこにどんな理念があるのか、ということが最も重要である。
・　「論理的に逆らう」「主張し続ける」といったことは、学校だけでなく、日本全国のどの組織でもできなくなっているからこそ求められている。大人になってからもずっと続けてほしい。
・　生徒たちが学ぶ環境として素敵な学校をつくるために、環境を整えていくことが重要。校則検討は、それを捉え直すための１つのあり方だった。

［全体会］

◎なぜ学校と地域の連携・協働が必要なのか

・　学校で習った知識や議論が社会の中に活かされ、学習が面白いと思えるような場面を用意するという意味で地域が必要である。
・　すべての学校が地域の上に立っているからこそ、教育資源として地域を捉えるべきである。
・　小さな連携からスタートし、子供たちが教員以外の大人と関わることでどのように変化するのか体験する機会が必要である。

◎どのように地域と学校は連携・協働していくべきか

・　地域住民と教職員が雑談できる関係をつくり、それぞれの専門性を活かしながら、お互いの役割を認め、高め合う関係が必要である。
・　自分の考えた問いから社会とつながり、世の中の当事者として関わる経験を重ねることで、学び続ける生徒が増えるのではないか。
・　地域が抱える人口減少や地域振興等の課題に共に取り組む同志として学校と地域の関係性を捉え、双方にとってメリットのある連携をすることが重要である。

――――――――――――――――――――――

［参考資料］地域協働研究協議会 全体会（パネルディスカッション） 発言録

（今村）

では、全体会を始めていきたいと思います。分科会ではそれぞれの議論を深めていただいたと思いますが、ここからは全体で考えていきます。みんなで考えていきたいテーマは「どのように地域協働をするか」です。なぜ地域と高校という、これまであまり協働してこなかった両者が協働していくのか、それは生徒たちの主体性を育むために有効である、ということに確信を持つ場にしていきたいと思います。ですので、地域と学校が協働することは難しいということは承知の上で、協働することでどのように生徒の主体性や可能性が広がっていくのかを、それぞれのセッションの気づきを踏まえてまとめていきます。

ここから登壇いただく方には、簡単な自己紹介とそれぞれのセッションでどのような話題が上がったかをシェアしていただきたいと思います。その前に、冒頭でもご挨拶いただきました継枝校長先生にもこのセッションに参加いただきますので、改めてご挨拶をお願いいたします。

（継枝）

こんにちは、大槌高校校長の継枝と申します。この４月に赴任して参りました。どうぞよろしくお願いします。

（今村）

校長先生、ありがとうございます。それでは、分科会Ａの牧野先生お願いいたします。

（牧野）

こんにちは、東大の牧野です。私は、大槌高校の運営指導委員会の座長をさせていただいております。この分科会Ａでは、生徒さんからマイプロジェクトの紹介をしていただきました。一人目は、津波の経験が風化しやすいということから、避難を考えるときにどうしても「正常化バイアス」がかかってしまうのを何とか取り除けないかと考え、基本になるようなことを勉強されていました。特に、認知的不協和理論という自分の心に矛盾が起こった場合に色々な社会的圧力を感じながら整合性を取ってしまおうとする動きが、避難に遅れをもたらしたのではないかということを、仮説を立てながら実証していこうと考えているようでした。今後は、それらを実際に勉強できるようなツールを作りたいとのことでした。二人目は、「伝える」と「伝わる」ということで、大槌の魅力を伝えたいという気持ちはとても強いけれども、単に伝えるだけではなく、どうしたら伝わるようになるかということを考える過程で、様々な実践を繰り広げている話がありました。

その過程で、生徒さんたちがマイプロを通してとてもプレゼン能力を高めていることもよく分かるのですが、私が関心を持ったのは、自分の課題だと思っていたことが地域と関わることによって、徐々に自分の課題が実は地域の課題にもなっていくということです。自分の思いだけでなく相手の思いも汲みながら、相手の立場から自分のことを考える過程で、どんどん自分の問いのあり方がバージョンアップして、更新されていくことを強く感じます。それがマイプロジェクトの魅力だと思いました。さらに、学校でマイプロジェクトをやっていく中で、問いが更新されていくと同時に、子供たちが地域に出ることによって、地域の様々な大人と出会い、もっと面白い大人がいることが分かってきます。また、自分が困っていることは他人も困っているのではないかという視野が広がっていくことがあります。子供たちが学校を拠点にして地域と循環するようになると、大槌高校が学校設定科目を作られたように、今度は先生方の教育のあり方がバージョ

ンアップしていくのでしょう。やはり地域との協働活動において、学校を閉じられた空間にするのではなく、開くことによって子供たちが循環することで、先生方の力量もあがっているのではないかと思います。そのような意味で、学校そのものが子供たちによって、よりバージョンアップされていくという循環が出来上がってきたのではないかという印象を持ちました。

（今村）

非常に興味深いシェアをありがとうございます。学校を開くことで、生徒だけではなく先生も成長していく環境になっているのではないかというのは、新しい気づきだと思いました。

それでは青山先生、自己紹介と分科会Ｂでどのような話題が上がったのか、また「はま研究会」の活動についてもシェアをお願いします。

（東大海洋研 青山教授）

東大の大気海洋研究所の青山と申します。私は、うなぎの産卵や生態を研究するのが本筋で、高等学校教育は分野外というのが正直なところです。先ほど話がありました「はま研究会」も含めて紹介をさせていただきます。私がおります大気海洋研究所は、牧野先生がおられる学部のように学部生への教育という機能は一切なく、研究するという目的で作られたところです。相手にするのは大学院生であり、ずっと研究をしています。当研究所は大槌町に半世紀近く前からあるのですが、基本的に地域や大槌町には目が行かず、研究所内の研究機器やサンプルには目が行くのですが地域のことは全く頭にありませんでした。しかし、東日本大震災の際に職員の避難やセンターの復旧、再建する姿を目の当たりにし、やはり地域の人たちの力がなければ研究機関は存続できないと感じました。振り返ってみると、長いこと大槌の人たちにとって、私たちは「隣人」ではあったが「友人」ではなかったということです。震災以降、大槌にある基礎科学研究機関として大槌町民にとっての良き友人でなければならないということを、研究所のモットーとしました。同じく東大の社会科学研究所という、教育ではなく純粋に研究をしている人たちがいるのですが、その研究所と協力して、地域振興のために「海と希望の学校」というプログラムを立ち上げました。その一貫として作ったのが、大槌高校と協働する「はま研究会」です。

分科会Ｂでは、はま研究会の生徒たちと、2013 年から取り組まれている復興研究会の生徒たちの２グループから、それぞれの取り組みを発表していただきました。はま研究会の顧問の遠藤先生が、地域に頼ることが一番大切だとおっしゃっていたことがキーになるかと思います。はま研究会において我々は受け手側なのですが、頼られているわけではなく、私たち自身にとっても大きな学びがあります。私たちにとって、はま研究会の生徒たちは、他の高校の出前授業のように学んでもらうためにサービスする相手ではなく、背中を見せて「ついてこい、やれ」と言える関係性があります。我々も良い意味で頼って、お互いに持ちつ持たれつの関係ができています。

復興研究会に関しては、全国的に彼らの活動は有名なのですが、私は一地域住民として彼らの活動から新たなことに気づかされます。長い期間、同じ町を見ているので変化に気づかないのですが、彼らなりの視点で話してもらうと、前はこんなだったかもしれないと思い出し、地域を振興させるためのモチベーションを多大に受けていると思います。分科会Ｂの話をまとめると、高校側としては地域に頼っていくのですが、大事なのは地域が相手側にサービスをするのではなくお互いに何かしらを受け取り合う双方向の関係ができているということが、２つのグループの成功要因だと考えました。

（今村）
　私自身も「はま研究会」のことをあまり知らず、ホームページに掲載されているレポートを見ているのですが、東大の先生たちと大槌高校の生徒たちが立候補制で集まって、研究を一緒にされているということなのでしょうか。
（青山）
　はい、そうですね。ただ生徒たちに海について学んでもらうということは、大槌高校に限らず日本中どこでもやっています。そのため、大槌高校ならではのことをやりたいと思っていました。受け入れをしている教員たちには、サービスを一切しなくて良いと言っています。言い方が悪いですが、人足だと思って良い、それぞれが興味を持っている世界最先端の研究の手伝いだけをしてもらう、そういうスタンスでスタートしました。一例を紹介すると、ウミガメの糞を分類するという我々は面白いと思っていないようなことを、高校生は非常に面白がってやってくれます。また、他の高校にいくと〇〇高校〇年〇組の生徒たちと私たちの関係で授業が進みますが、はま研の子たちとは人と人との関係になります。ですので、研究や海以外の雑談も進んできます。はま研の子たちからは、活動に参加することによって大学や研究者に対する見方が大きく変わり、大学進学をしたいという気持ちが高まってきたと言っていました。そう考えると、我々は海の専門家という立場以上に、長く生きてきた人としての情報を若い生徒たちと共有しているような気がします。冒頭の説明で「学ぶ」というキーワードが出ていましたが、生徒だけが学んでいるのではなくて我々も様々なこと学ばせてもらっている活動になります。
（今村）
　本当にマニアックなテーマを、生徒と一緒にマニアックに探究していくということですね。これは高校生のためにサービス的に作った体験授業ではなく、マニアックな研究に生徒たちをそのまま巻き込んでいるというのが素敵です。
（青山）
　高校生にとってもらったデータを使って何名かが研究を進めているのですが、学術論文になるときの謝辞にはま研究会の名前が入ります。そういう意味では、担当している事柄に関しては、うちの研究者が世界で１番知っているとしたら、はま研の生徒たちは世界で２番目に知っているということになります。
（今村）
　私も震災直後に大槌町に住んでいたことがあったのですが、近くに東大の研究所があったということに気づいていませんでした。大槌町は大学まで車で３時間の場所ですと色々なところで話していたけれど、こんな近くに大学があったとは知らず、それくらい隣人ではあったけど友人ではなかったということです。ありがとうございます。
　それでは、私も参加しました分科会Ｃについて、浅野さんから自己紹介とセッションの共有をお願いします。
（経産省　浅野室長）
　よろしくお願いします、経済産業書の教育産業室長をしている浅野と申します。教育の分野でＩＣＴを活用してＤＸを進めつつ、対話的で協働的で主体的な学びを再構築するという仕事を文科省と一緒に進めているところです。今回の分科Ｃで話題になったのは、ルールメイキングプロ

ジェクトです。ルールメイキングという言葉は、日本にとって本当に大切な言葉です。自分たちが置かれた環境をどれだけ理想の姿に自分たちの力で変えられるか、つまり土俵を整えられるかという人として社会を作っていく上で非常に欠かせない力です。これらを高校生であるうちに構築するチャンスが日本中に溢れていると良いですよね。不思議な校則の類を良い教材と捉え、おかしいと思うなら自分たちで変えてみることが大切です。しかも、ただの判断者ではなく、論理的に相手の立場も思いやった上で、確実に自分たちがありたいと思った方向性に持っていこうと取り組みます。まさにそのプロジェクトの雛形になったのが、大槌高校とカタリバさんがこの数年やってこられたことです。

大槌高校の事例として印象に残っているのは、ツーブロックの髪型を禁止していたことをやめたことや、体育館に生徒たちを集めて、もみあげが長いだの裾がどうだの厳しく取り締まっている整容指導をやめたことです。今は岩手県独特の文化の応援歌練習について、とにかく大声を出して強めに応援歌指導をする文化について考えているそうです。様々なことをやっていく中で、最後に生徒さんたちが非常に良いことをまとめていらっしゃいました。大事なことは論理的にしっかりと逆らえということ、何でだろうと思った話は口に出して人に伝えないと始まらないということです。例えば、変える権限を持っている人たちのところまで声が届いているのか、納得してもらえているのかを確かめなければならないですし、なぜ変えなければならないのか、なぜ変えるべきなのかということを感情ではなく論理で話せることが大切だと、大槌高校の生徒さんたちが当たり前のように語っていらしたのが印象的でした。また、先生の変化もあります。今回のルールメイキングプロジェクトをカタリバさんとやっていて気づかされたのは、職員室の中も変わるということです。先生たちもこのルールは変だと思われていたり、ちょっとやりすぎじゃないかと思っていても、口に出せない場合があると思います。要するに同調圧力や伝統、秩序、公共という二字熟語が重すぎて、それを聞いた瞬間、職員室の中の思考回路が回らなくなる状態に置かれないようになったという先生たちの振り返りがありました。これは日本中の会社や役所のあらゆる組織で、きっとやらなければならないことだと思います。生徒さんたちが事もなげにおっしゃっていた論理的にしっかり逆らうことも大切ですし、きちんと成立するには繰り返し言い続けて、言うだけでなく届かなければいけないのです。役人という職業を選んでルールメイキングという仕事をやってきて久しいのですが、その過程の繰り返しばかりやっていると実感します。それを事もなげにおっしゃっている生徒さんたちの得たものは、一生ものだと思いました。そういったところから学びは始まります。

今話題に上がっているのは、校則を緩めたことで秩序が乱れていないか、秩序とはどこまでいったら乱れて、どこまでいけば保たれるのか、そもそもなぜ秩序が必要かということです。学校の中でこれらの困難を上手く乗り越え、みんなが行きたい場所をつくろうという原点に立ち返ることができれば、ルールは不要だし、合意形成しながら誰もが満足できる学校環境を少しずつ整えていけるのだと思います。今日振り返っていただいたものを全国に広げていくため、カタリバさんに集めていただいた全国のルールメイキングプロジェクト参加校の皆さんも聞いてくださいました。実際にこういうシンプルでとっても大事な経験を生徒さんも先生たちもされているということが、大槌のプロジェクトの価値だと思います。何より探究というのは、当事者意識を持ちづらいテーマばかりだと思います。先ほどの海洋研のプロジェクトも、目の前の魚や海の不思議

が楽しいと思うからできますが、そもそも校則は自分たちの生活そのものだし、学校環境は自分の生きる環境そのものなのです。それを題材にするということは、最も当事者意識を持ちやすいものとして、これからの探究テーマとして相応しいものだと確信を持たせていただきました。

（今村）

ありがとうございました。

校長先生にここまでの話を踏まえてお伺いします。校長先生は今年から大槌高校に赴任されて、これまでいろいろな学校を経験されて大槌高校に来られたと思いますが、他の学校と比較しながら生徒たちの様子を見て、主体性が育っていると思いますか。それともまだまだ「やらされ探究」の部分があるのでしょうか。

（継枝）

４月に来て、驚きの連続でした。生徒たちは自分たちで動いているように見えますし、意見もしっかりとまとめて話すことができるようになっていると感じます。探究活動の時間というのはこれまでの勤務校においては職員室に残る先生が確実にいたものですが、本校の場合は職員室に誰もおりません。「あれ、みんなは？」と聞くと、「探究の時間です」と当たり前のように言ってくれます。忙しい先生もいるはずなのですが、それらを一旦置いて探究にみんな参加しています。探究の様子を見に行くと、先生方は生徒の周りにいて色々と話をしています。なぜここまで先生方が一生懸命になれるかというと、生徒たちが変化を先生方が実感したからだとのことです。だから全ての先生が、総合的な探究の時間にも一生懸命になっていると感じ、驚くことばかりです。

（今村）

今、文部科学省のほうでも来年度から正式に探究が始まるということで、各地で先行して様々な取組をされていると思います。探究という言葉はもちろん、地域との連携による探究という表現もあり、様々な言葉で各学校受け止められているかと思いますが、地域との連携がどうしてもタスクになってしまい、なぜそれが必要なのかという納得感があまり持てない学校も多いかと思います。

牧野先生は中教審でもこれらの議論について深められていたかと思いますが、何かご助言はありますでしょうか。

（牧野）

やってみないと分からないということになってしまうと思います。大槌高校もこのような事業で地域と一緒にやっていくことで、子供たちが変わっていく姿を先生方が受け止められていました。分科会Ａでも先生方が楽しいとおっしゃっています。子供たちが変わっていくことを実感すると同時に、先生たちもバージョンアップしていくという一面もあります。先ほど海洋研の青山先生のお話を伺っていて、青山先生の表情が楽しそうだし嬉しそうなので、東大の教員も高校生と交流することが楽しかったのだろうと思います。手加減せず、人足として使うという関係性ですし、子供が面白がるということは研究者には嬉しいことで、良い関係ができてくると思います。

すぐ地域に出そうという議論になる前に、大学の研究室と連携を取ってみたり、どこかの機関とある程度連携を取ったりしながら慣らしていき、子供たちが教員以外の大人と関わることにどのような意義があるのか、どう子どもが変わるのかを先生たちが体験することから始めていくのが良いと感じます。例えば、経産省の事業等で企業との連携もされていると思うので、そういっ

たところを取り入れながら、先生たちも子供たちが変わっていくことを実感し、子供たちが変わっていくことが学校にとっても良いことだと実感していけるようなサイクルを作っていくことが大事になってくると思いました。地域との連携といっても、先生たちはただでさえ忙しいのにどうしたら良いのかと言ってしまいがちです。そうなると地域の人たちと連携するのは面倒なことという認識になってしまうので、少し手順を踏みながら、戦略的に考えても良いと思います。

（浅野）

地域との連携という言葉が一人歩きするのだと思います。学校の先生方とお話をすると、地域と連携しなければならないとなると、地域以外とは連携してはいけないのか等、とても厳密な語彙の解釈に走られてしまう方もたくさんいらして難しいと感じます。文科省が地域との連携と言っているのは、どの学校もある地域の上に立っていて、一番身近な社会はどこかと言えば、学校が立地している地域になるわけです。要するに、学校で教えてきた知識や技能、表現力や思考力、判断力が活かされる場所がどこにあるかと問われたら、地域だと言いたいのではないでしょうか。ネットじゃダメかと言われたら、ネットで世界中繋がることもできるのですが、社会の課題や生活、自然事象という学校で習っていた一見無味乾燥な知識や議論も社会の中に活かされたら面白いと思えるような場を用意してほしいという意味だと思います。そのため、地域と連携しなければならないのではなく、学校で教えた知識や技能、思考力・判断力が実際活かされる経験をしてほしいということ、それによって先生たちも教科の壁を超えていけるのではないかということです。そもそも数学や理科、英語の先生が一緒になって対話する機会は少ないですが、地域で起きている話題は教科の壁を超えるというやりやすさがあるのではないかと思います。本当にやりたいことは、地域でもなく、連携でもないということがうまく伝われば良いと思います。

（今村）

そういう意味では、地域というものがそこにあるからこそ、使える資源があるのではないかと捉えることが大切ですね。地域あるあるだと伝統芸能や商品開発になりがちですが、偶然大槌は友人になれていない隣人の東大海洋研がありました。青山先生、初めて連携の話があったときに、抵抗や不安はありましたか。

（青山）

我々は震災後、地域を盛り上げなければならないし、大槌が限界集落になってはならないから三陸全体を盛り上げたいという大目的を掲げました。その議論で言うと私は高校というより地域側の人間ですが、大槌高校は同じ目的を掲げた戦友でした。その時は探究の話は出ませんでしたが、大槌高校が輝くことで大槌町が魅力的になるというスタンスを持っていることを伺って、それは我々と同じ目的だと思いました。それならば、大槌高校を輝かせるために我々に何ができるかということでスタートしました。地域と連携しなくてならないというよりは、目的が一致していることが重要で、大槌高校の手柄は我々の手柄になりますし、我々の手柄は大槌高校の手柄になるという関係が一番理想的です。さきほど浅野さんがおっしゃったように、地域と連携しなければいけないということではなくて、偶然知り合った戦友が地域であり、地域にそういう資源がたくさんあるということだと思います。

（今村）

震災があってもなくても、地域が直面しているのが人口減少です。先日校長先生がおっしゃっ

ていましたが、全国の多くの自治体が１市町村に１高校しかないという実情があります。かなり多くの地域が少子化で高校の統廃合も免れないという課題を抱えている中で、それらを解決していくためには、やはり同士を見つける必要があり、都会では考え得ない手の組み方、目的を共有する同士的な存在が必要なのかもしれないと思いました。

とはいえ、チャット欄にはどうしたら教員を巻き込めるのか、教員の意識をどのように変えていけるのかというコメントがあり、大変な変革の真ん中で旗を振っていらっしゃる方の悲痛な声が聞こえてきます。それらに対して何かアイデアがある方、ここに参加していらっしゃる大槌高校の先生方から何かご意見はありますでしょうか。

（継枝）

最初にやらなければならないことは、管理職を含めて教員が本気で話し合って理解することかと思いますし、そこからがスタートです。また、地域協働しなければならないという表現がありましたが、高校の先生は地域の人たちと話すことは経験が少なく苦手です。保護者や生徒とは話しますが、地域の人とは話したことがないのです。しかい、地域の人に聞いてみると、高校に関わりたいという気持ち大きいようです。町にとって高校は遠い存在で何をやっているかわからないと思っています。一方で、高校に何らかの形で関わりたいと考える方も多いです。本校の場合は、コーディネーターの方々が３名いて、その方々を中心に先生たちも地域と交わることができています。最初はハードルが高いですが、思いきって地域の方々と話す場を作ってみるというのも良いのかなと思います。

（浅野）

そういう良いきっかけづくりなのですよね、きっと。

（今村）

先ほど牧野先生から、小さい連携から成功体験を積んで、みんなで生徒が変わるという共通の体験を創っていくということが良いのではないかという話をされました。大槌高校を開いていくという初期の段階で大槌高校に赴任されていた鈴木紗季先生に聞いてみたいと思います。様々な人と手を組むということは、先生側から見ると自分たちの力で出来ないことを認めることかもしれないですし、外の風が入ってくると変わらなければならないこともあると思うのですが、管理職ではない一プレイヤーの立場として、地域との連携を軸にした改革を数年見られてきてお感じになっていることやご自身の変化はありますでしょうか。

（鈴木紗季教諭）

私は大槌高校７年目になるので、探究が始まる前から大槌高校で働いています。最初にこの探究が始まるときは、なかなか難しさがありました。一般化するわけではありませんが、教員は私自身も含めて新しいことや変わることが怖いという感覚があります。生徒には新しいことをどんどんやりなさいというのに、自分がやることには怖さがあると思います。個人的なことを言うと、マイプロの伴走を３年間させていただいて、生徒が先に進んでいき、自分が知らない知識を得ていく様子を目の当たりにすると、できない自分や生徒に向き合えない自分に自信がなくなったことが正直ありました。生徒が良い課題を持っていても、それは難しいから一般的にはこうなんじゃないかとか、どうしても自分が知っているところや分かりやすいゴールに導きがちだと思います。しかし、この３年間で子供たちが一番学びたいと思えることを探究していく様子を怖さもあ

りながら見ていくと、生徒たちが成長した姿を見る喜びのほうが大きくなりました。子供たちが笑顔で学校に来て、学ぶことが楽しいと思えるようになれば、私たちにできることが限られているということを受け止められます。先ほどの青山先生のお話のように地域に頼り、色々な方に関わっていただくことで生徒の知見が深まるのであれば、どんどん子供たちや学校もそこに入っていき、みんなで子供たちに関わることができる環境にしていくことが一番良いと思いますし、これからの教育のあり方だと感じました。

（今村）

ありがとうございます。今、愛知県の前田先生からテーマの設定はどのようにしているのですかという質問がありました。これについても紗季先生から、「ちょこっとマイプロ」や自学ノートの改革に関する話もシェアいただけますか。

（鈴木）

マイプロも始めるときに、生徒の課題や変えたいこと、社会問題から入るなど様々な方法がありますが、問いの設定は難しいと感じます。初めに、「ちょこっとマイプロ」でやりたいことを１週間で１つ決め、それを自分で取り組んでみた成果をシェアし、次の問いを設定していくということを繰り返しました。その先に、大きなプロジェクトができます。教員がカリキュラムの中で探究を行う場合、例えば生徒からゲームをテーマとして流行っているゲームのキャラをどうしたら強くできるかを探究したいと言われたときに、どうしても教育課程上ダメなのではないかと考えがちです。しかし、そこからでも何かを探究できないかと思って、ゲームや料理、漫画や筋トレなど生徒がやりたいということを何でもやってもらいましょうということにしました。こっちが思っているほど大きく逸れることはなくて、１週間やりたいことをやり遂げることができたという達成感を得られたことが子供たちの中では大きかったです。分科会でもお話ししましたが、自分ができないと思っていたことや学校の先生に話したら無理だと思われるようなことができたというのが重要だったと思います。その経験を１回、２回、３回と繰り返していった先に大きなマイプロジェクトがあって、それが３年間の学びにつながっていったと思います。テーマ設定は学校によっても状況が様々だと思いますが、もしかすると生徒がやりたいと思うことを何回か経験させてあげるのも良いかもしれません。

本校では、これまで家庭学習として自学自習ノートというのがあり、これをやっていた立場から言うのは心苦しいのですが、毎日Ａ３のノートを１ページ分勉強してきて提出するというのがありました。教科書を写すことや、英単語を 100 回練習するということを課している学校でした。時間がかかる課題ですので、学習時間調査をすると確かに１時間、２時間など学習をしたように見えるのですが、それが本当に学びだったのかを振り返ると微妙なところです。その時間が今は探究に当てられると思うと、幸せだと感じます。

（今村）

これまではｃａｔ、ｃａｔとひたすら書いていた時間を、１週間に１つ問いを設定して、やってみて振り返るという取組に見直したということですね。学校の大掛かりなカリキュラム再編はもちろん、放課後の東大との連携というオプションもあり、いろいろな方面から教育活動をやられており、その全てが生徒たちの主体性につながっているのだと思いました。紗季先生、ありがとうございます。

こうやって学校を開いていくと、いろいろなプレイヤーが参加したい学校になっていくと思います。今、牧野先生のところの学生さんが大槌高校に参加されているとのことですが、事例をお話しいただいてもよろしいでしょうか。

（牧野）

本人がこの場にいますので、後ほど話してもらいたいと思います。私たちはありがたいことに、良いことではないかもしれませんが、コロナ禍でオンラインによって色々なことができることを実感しました。この２年間は完全オンラインで授業をやっています。１年生で地域のことをやりたいと入ってきた子がおり、高校時代から大槌にはお世話になって震災の記憶の聞き取りをされていました。１年生の段階から地域に入り込んで、大槌高校や海洋研にもお世話になりながら授業を受け、地域の様々なことを勉強し、研究できる時代になりました。東大側も配慮していて、試験のためにわざわざ東京に来なくても良いという措置をとっており、様々なことができる時代になりました。高校と地域の連携というのは、使い所によっては私たち大学や地域にとっても良い話で、新しい教育のあり方を見直すことにもつながっていくと思います。その意味で、私たちもありがたいと思っています。

（今村）

今、宮島さんという東大生が大槌高校でインターンシップをしながら大学に出席もしているということですね。

（宮島）

現在、カタリバでインターンとして毎日大槌高校に通わせていただいている、宮島と申します。本当に貴重な経験をさせていただいているとしか言いようがないのです。県外留学生をはじめ大槌高校生と通学路を一緒に歩き、探究の授業に参加して、私自身も新たな知識を得ながらマイプロジェクトの伴走をし、合間を縫ってオンライン授業を受けています。机上での学びとフィールドでの学びを行き来し、大槌の中高生と一緒にバスに乗って通う日々が非常に面白くて、あっという間に３ヶ月が経ってしまいました。残り２ヶ月も、学びを還元する期間にできたらと思います。

（今村）

東京のど真ん中で生まれ育ってきた人が、東京ではない大槌町で手触りのある地域で暮らすことを選ぶことができる時代になったのは希望ですよね。宮島さんだけに限った話しではなく、地方地域側の方からしたらびっくりするかもしれませんが、都会で生まれ育ってきたという人たちがむしろ地方に住んでみたい、人間関係に揉まれてみたいという新たな形の需要が出てきています。オンラインを駆使すればそういう需要も拾えて、インターンシップやボランティアをしながら大学の授業の出席も認めてもらえるかもしれないというのは、大学がない地域の高校にとってはすごく良いロールモデルの提供ですし、大学生にとっても学びになるという双方にとって良い新しい現象だと思います。宮島さんはそれを体現されている大学生で、牧野先生はそれを応援されているということでした。

終わりに近づいてきていますが、最後にふたば未来学園の鈴木先生から、教員間の目線合わせや教員と地域との目線合わせが大切なのではないか、どのようにやっているかご助言をいただきたいということでした。青山先生と牧野先生、校長先生から一言ずつお話しいただきたいと思い

ます。
（青山）
　はま研の場合は、とにかく顧問の先生と顔を突き合わせて話をするということです。顧問の遠藤先生を見かければ、世間話でも何でも良いのでとにかく何かコミュニケーションを取ることを心がけています。
（浅野）
　大学側が積極的にコミュニケーションを取りにいっているのはすごいですね。
（今村）
　校長先生から、先生方の目線合わせについてどのような仕掛けをされているのか、何かお知恵はありますでしょうか。
（継枝）
　地域との目線合わせに関しては、コーディネーターの方が間に入ってくれることで上手くできていると思います。本校では、３名のコーディネーターが各学年に１人ずつ入ってくれていて、地域との打ち合わせに関してはコーディネーターが中心となって行います。その際に必ず教員も一緒に入るので、そういったところが上手くいっている要因なのではないかと思います。
（今村）
　牧野先生も全国の様々な事例を見ていらっしゃると思いますが、地域との目線合わせ、先生同士の目線合わせについてどうお考えでしょうか。どうしても地域はお客様になってしまいますし、地域の人たちを学校としてはどのように受け入れていくべきなのでしょうか。時に何が目的かわからなくなってしまうこともあるかと思いますが、好事例があれば教えてください。
（牧野）
　地元の市町村に立地する高校のほとんどが都道府県立高校であり、学校が、ある意味隔離された場所になってしまいます。先生たちも県職員という意識で動いているので、地元ではないという場合が多く、なかなか地域との意思疎通が難しいです。大切なことの一つ目は、先ほど青山先生がおっしゃったような雑談ができる関係性で、一緒にお酒を飲んだらどうですかね。私は社会教育の出身なので、地域とは酒を飲んで話さなきゃ始まらないという意識があり、私自身はあまり飲めないですが酒の場というのは好きなんですね。そこまでいかなくとも、そういう場づくりは必要かと思います。二つ目は、先生方が教育の専門職でいらっしゃるというプライドを傷つけず、一方、先生自身も専門職のあり方が変わってきていることを認識していただく必要があるかと思います。これまでは、豊富な知識を持っていて指導要領に基づいて知識を伝えるという役割が大きかったと思いますが、今は学習指導要領が変わり、伝えるということもありますが寄り添って一緒に探究して一緒に驚くということが重要です。私たちがよく言う“sence of wonder”＝びっくりする力、驚く感性を大切にし、子供たちと一緒に共有しながら寄り添い、探究していくことがこれから求められると思います。そういう役割を先生が担えるように、地域の方々が付き合っていくことが求められます。先生方が地域と連携していくことで先生の専門性を犯すということではなく、むしろ高まっていくような関係性が必要です。雑談ができる関係の中で、お互いの役割を認め合う関係ができていくのではないかと思います。それが上手くいっている学校は、県立学校だとしても地域と良い関係ができていて、子供たちが地域に出ていけるように取り組ん

でいるところがいくつかあると思います。先生方の考え方を少し切り替えていただいて、地域の方々も高校の先生だからと敬遠するのではなく、子供たちの専門職としていらっしゃるのだから一緒にやろうよと雑談でもできる関係を作ってください。それによって、地域のコミュニティのあり方や学校組織のあり方も深く関わっていくのではないかと思います。少し抽象的な話になりましたが、簡単に言えば人として付き合っていくということですよね。

（今村）

本当にそうだと思います。先ほどの校則の議論でも、地域と学校の関係だけではなく生徒と先生の関係でも同じような話が出ました。先生が生徒に対して、今までやっていたことが間違いだったかもしれない、何が正解か分からないと胸襟を開き、先生は答えを持っていて正しい存在ということを一旦置いておける力が先生にあることで、生徒と先生の関係も、生徒にとっての学びの質も、地域と学校の関係性もずいぶん変わってくると感じました。

時間が来てしまって質問にすべて答えられませんでしたが、最後に浅野さん、この場にいる方にメッセージをいただければと思います。

（浅野）

経済産業省にいて 20 年ちょっと経ちましたが、私も探究する日々です。探究とは、こういうことなのかと社会人になってからようやく分かりました。目の前に発生する事案に対して、なぜこれをやる必要があるのか、日々自分たちが回している仕事が誰のためのやるのか、やっていることが本当に届いているのか、もっと良いやり方があるのではないか、そもそもこんなもの止めたほうが良いのではないか、むしろ代わりにこんなことをやったほうが良いのではないかと考えて、実践する日々です。これは役所で政策をつくるだけではなく、ビジネスでも同じだと思います。

学校とは何なのだろうと私自身の経験を振り返ると、確かに楽しい時間でもありましたが、学ぶというより友達と集まって良い時間を過ごしたという印象です。しかし、学習を振り返ると、社会のこれにつながっていたのだと素直には実感できなかったというのが正直なところで、今の仕事にどうつながっていたのかがあまりよくわかりませんでした。だからこそ、探究が大事なのではないかと思いますし、出口がない学びは考え直すべき時期だと強く感じます。ただ実際に探究をやってみると難しく、問いを立てるのはとても難しいです。いい加減な問いはいくらでも立てられますが、一本レポートや論文を書こうと思うような真剣な問いを立てるのは本当に大変で、みんなが本当にできるのかと言われれば難しいですね。しかし、３年間訓練をしていけば、面白い問いの１つは立てられるのだと思います。研究者の皆さんもそんなにポンポンと問いは出るものではないと共感していただけるはずです。二番煎じや三番煎じの問いかもしれないけれど、自分自身が考えた問いから世の中とつながり、当事者として考えたというところまで行きつく経験が高校生活の中で一つでもあったら、きっとそこからも学び続ける生徒さんがいらっしゃるのではないかと、大槌の生徒さんたちのコメントを聞いて確信しました。私は大学を出てからそのような学習経験が積めたと思っていますが、15、16 歳やもっと幼い時からそのような学びができたら、ぜんぜん違うと思います。現場の変革は大変だと思いますが、私たちも力を合わせて頑張れればと思います。

（今村）

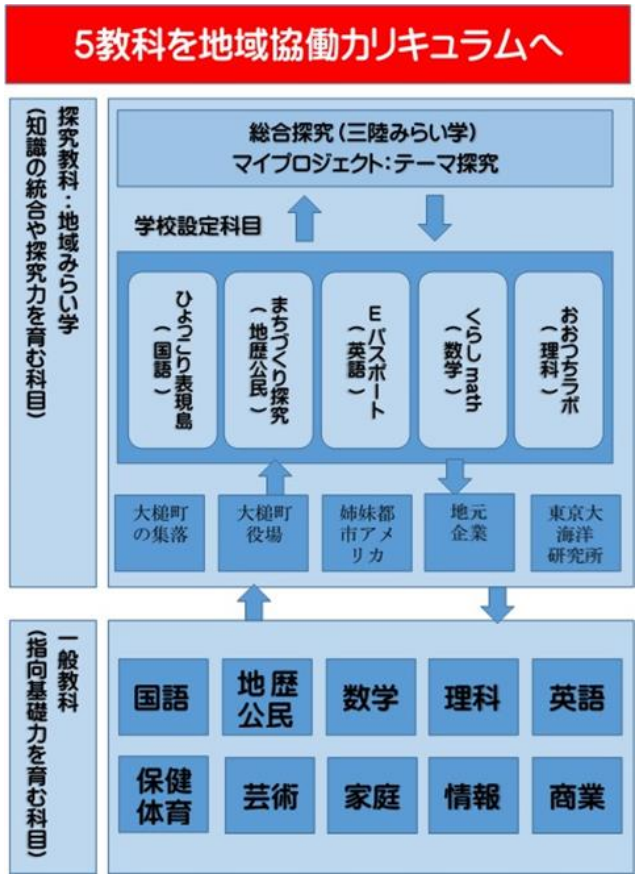
登壇いただいた先生方、ありがとうございました。生徒一人ひとりの主体性を育てるために使

えるものを探すという意味で地域があるということ、校則でも話題に上がった自由にするということは子供たちを放置することではないということなど、どのように捉えたら良いかわからないお題をみんなで考えていく場になったと思います。より良い好事例を生み出し、こうしてシェアできる時間があるのも、コロナ以降の良いところだと思います。こうした勉強を通して皆さんで好事例をシェアしていく雰囲気を作りながら、もっと楽しい、生徒たちが毎日通いたいと思える学校を全国に創っていけたら良いと思います。大槌高校の皆さん、ありがとうございました。そして、青山先生、牧野先生、浅野さん、どうもありがとうございました。

2　学校設定教科「地域みらい学」

生徒の資質・能力の育成のために各教科・科目と総合的な探究の時間を相互に関連させ、教科横断的な学習を実現することと、就職を中心とするコースの生徒に対して、これまで通りの授業でよいかという疑問点から、より探究的な学びを実践する科目を設定し、カリキュラムの中に体系的・系統的に位置づける教育課程を構築した。

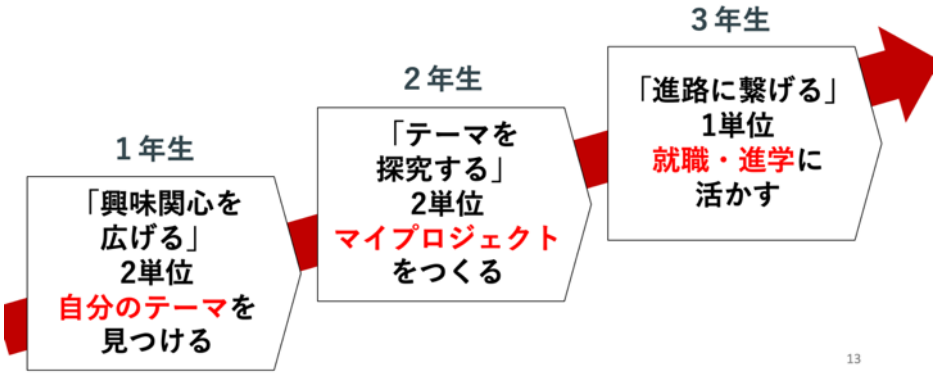
学校設定科目「三陸みらい探究」に加えて、国語、地理歴史・公民、数学、理科、英語のそれぞれが探究的な学びを実践する、「ひょっこり表現島」、「まちづくり探究」、「くらし math」「おおつちラボ」「Ｅパスポート」を設定し地域協働カリキュラムとして今年度から実施した。



◇各学校設定科目の実施状況◇

（１）三陸みらい探究

三陸地域の復興を担うリーダーを育成することを目指し、３年間を通して身の回りや地域の課題を解決する力を身につけることを目標としている。同科目では、大槌町というフィールドを題材に、地域課題の発見・解決に向けた活動を実施した。東日本大震災を経験した大槌町を題材にすることで、生徒は複雑多様な地域の事情や住民感情の揺れ等に触れることになる。そのような状況から、自分自身を見つめ、理想の姿を描き、それを実現するための実践を行った。この学びを通して、地域を創る側の視点を持って社会参画する意欲と力を涵養するとともに、今後ますます不確実性の高まる未来を生きていく力を育むことを目指した。大槌町においては、震災後の生活基盤の復旧は完成を迎えている。今後は高校生が社会の構成員として主体的な意志をもち、理想の姿に向かい行動を起こすことも復興の姿そのものとなる。三陸みらい探究では、そうした地域におけるロールモデルの基盤となる資質・能力の育成を目指した。３年間を見通した流れは以下の図の通りである。



昨年度は、１・２年生を対象としたが、今年度は３年生も含めた全学年で取組を進めた。

１年生では「興味関心を広げる」をテーマに、自分紹介プレゼンテーションや町内外の大人による人生講話、大槌町の行政をシミュレーションするワークショップ活動等に取り組んだ。自分自身に目を向けるところから徐々に視点を社会へ広げ、町内・町外の具体的な取組を知り、課題解決を体験的に学ぶ機会を設定している。

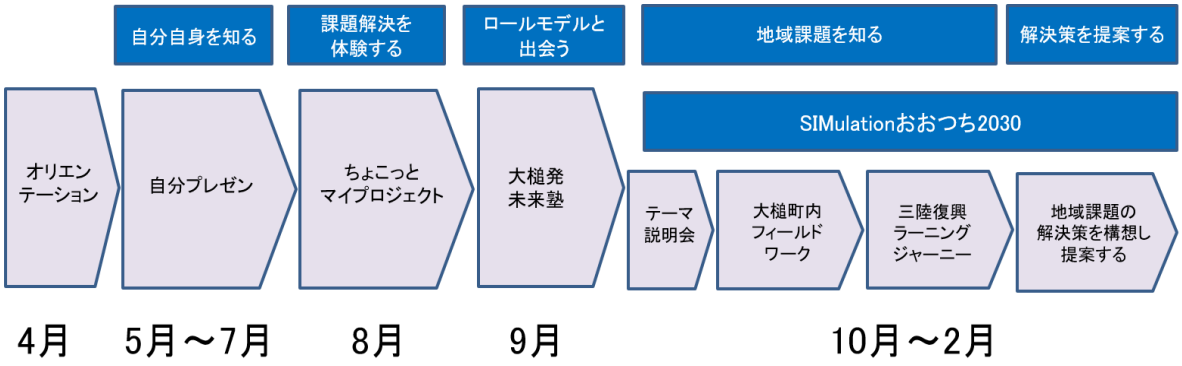
２年生では「テーマを探究する」をテーマに、自ら設定したテーマでプロジェクトを企画し、実行しながら探究を進めるマイプロジェクト活動に取り組んだ。各自の興味・関心から問いを設定し、他者や地域を巻き込みながら問いの検証を繰り返すことで、実践的な探究活動を目指している。

３年生では「進路に繋げる」をテーマに、大学・短大進学を目指す文理コースでは進路志望に関連したテーマでの探究活動、専門学校・就職を目指す「教養コース」では就きたい職業の未来を考える活動を実施した。また、18 年間で得た強みや知見を語るプレゼンテーション活動を通して、これまでの学びを総括した。

ア　１年生の取組

１年生では自分と社会に目を向けながら心が動くテーマを探すことを目標に、自分紹介プレゼンテーションや、町内外のゲストによる人生講話、大槌町役場へのヒアリングや町外視察を通して大槌町の地域課題解決に向けた提案を行う活動に取り組んでいる。２年生で行うマイプロジェクト探究活動に向けた下地作りの時期と位置付け、生き方・考え方を見つめ直し、自分と地域社会課題との関わりを考える機会を繰り返し設定している。

１年間を通した授業の流れは以下の通りである。



（ア）自分プレゼン（４月～７月）

総合探究を始めるにあたって、自己発見・自己理解を深めることを目的に、自分自身をプレゼンテーションする「自分プレゼン」の作成に取り組んだ。また、「自分プレゼン」を町内の中学３年生に行うことで、より深い理解につなげることを目指した。今年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を十分に行いながら、大槌学園、吉里吉里学園それぞれの生徒に対して、対面での発表会を実施した。

◆授業の流れ

回数	日程	内容
1	４月 14 日（水）	オリエンテーション
2	４月 21 日（水）	学びに向かう関係性づくり①
3	４月 28 日（水）	学びに向かう関係性づくり②
4	５月 12 日（水）	自分グラフを使っての自己理解
5	５月 19 日（水）	ロールモデルの自分プレゼンを聞く
6	５月 26 日（水）	自分プレゼンをつくる①
7	６月２日（水）	自分プレゼンをつくる②
8	６月９日（水）	自分プレゼンをつくる③
9	６月 16 日（水）	自分プレゼン発表練習
10	６月 30 日（水）	自分プレゼン発表練習（リハーサル）
11	７月８日（木）	自分プレゼン発表会

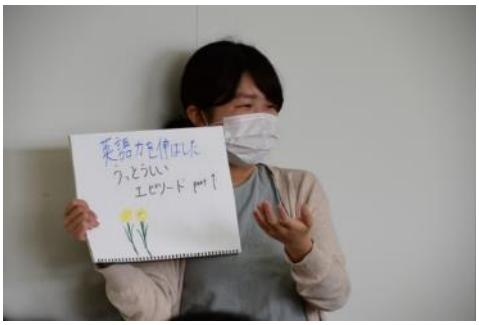
◆オリエンテーション・学びに向かう関係性づくり

オリエンテーションでは、総合探究の年間を通した目的と流れを説明し、自らの意志を持ち主体的に行動する「マイプロジェクト」を実施することへの意識づけを行った。

また授業全体を通してお互いの意見や考えを交流させる機会が多いため、心理的安心のある関係性づくりのため活動（共通点探しゲーム・傾聴トレーニング）を実施した。

◆ロールモデルの自分プレゼンを聞く

自分プレゼンテーションのお手本として、認定ＮＰＯ法人カタリバの職員３名に授業に参加いただいた。人生の先輩方の経験談に触れることによって、自分が行う発表へのイメージづけを行った。



◆自分プレゼンの作成

生徒は「私に元気をくれる〇〇」、「私を変えてくれた〇〇」、「私が生きる上で大切にしたいこと」の中から１つのテーマを選択し、５分～８分程度のプレゼンを作成した。最後はスケッチブックに清書し、紙芝居形式でのプレゼンが完成した。

◆自分プレゼン発表会

日　時：令和３年７月８日（木）３、４校時

場　所：大槌高校体育館（大槌学園生徒）、吉里吉里学園校舎（吉里吉里学園生徒）

テーマ：「中学生に自分プレゼンを伝えることを通じて、自分について考える」

対　象：大槌学園９年生、吉里吉里学園９年生

開始	終了	内容	進行
11:00	11:05	【あいさつ】 ・　大槌高校生徒代表あいさつ／趣旨説明 ・　学園生徒代表あいさつ	総合司会
11:05	11:17	【アイスブレイク】 ・　大槌高校生徒代表によるアイスブレイク	アイスブレイク担当生徒
11:17	11:20	・　グループ内での自己紹介	グループ司会
11:20	11:31	【発表】 ・　高校生１人目発表（８分） ・　質疑応答（３分）	グループ司会
11:31	11:42	・　高校生２人目発表（８分） ・　質疑応答（３分）	グループ司会
11:42	11:53	・　高校生３人目発表（８分） ・　質疑応答（３分）	グループ司会
11:53	11:58	・　振り返り記入	グループ司会
11:58	12:03	・　グループ内で感想や目標を共有	グループ司会
12:03	12:10	・　全体での感想共有	総合司会
12:10	12:15	・　学園生徒代表あいさつ ・　大槌高校生徒代表あいさつ	総合司会

【当日の様子】

司会進行・アイスブレイクの運営もすべて生徒が行い、小グループにわかれて中学３年生への発表を行った。発表後は中学生からの質疑を受け、中学生はプレゼンを聞いてから、高校生活に向けた自分の決意をまとめる活動を実施した。

生徒たちは、後輩やお世話になった先生の前で、自らの経験を堂々と発表した。

【生徒の感想】

・自分の経験を振り返ることはとても難しかったけれど、最終的には自分のことをよく理解することができて、特に長所に気づくことができて良かった。

・普段あまり考えないことを考えることができて、とてもいい機会になった。自分が何のために大槌高校に来たのか、これからどんな目標を持って頑張るのかについて、改めて考えることができて、今後の学校生活に対してモチベーションが上がりました。

・中学生の前で発表するのはとても緊張したけれど、しっかり伝わったと感じることができて嬉しかった。司会の経験もすることができて、人とコミュニケーションを取ることのハードルが少し下がった気がします。

（イ）ちょこっとマイプロジェクト

身近な課題解決を体験することを目的として、夏休み中に１週間で取り組む「ちょこっとマイプロジェクト」を実施した。後続するSIMulationおおつちで町の課題解決に向けた提案を行うことを見据えて、それまでに取り組んできた自己理解やロールモデルと出会う活動との橋渡しをする時期として位置づけた。「自分のやってみたいこと」と「誰かを喜ばせること」の２点を軸に、好きなテーマで１週間のプロジェクトを立案して実施し、成果発表を行った。

◆授業の流れ

回数	日程	内容
1	7月21日（水）	オリエンテーション
2	7月29日（木）	「ちょこっとマイプロジェクト」計画立案
～「ちょこっとマイプロジェクト」実施期間～		
3	8月25日（水）	「ちょこっとマイプロジェクト」発表準備①
4	9月1日（水）	「ちょこっとマイプロジェクト」発表準備②
5	9月8日（水）	「ちょこっとマイプロジェクト」発表会

◆「ちょこっとマイプロジェクト」計画立案＆実施

生徒が立案した「ちょこっとマイプロジェクト」には、以下のような企画があった。

・自己理解を深めるために、１週間毎日日記を書き続ける。
・いつもお世話になっている家族のためのプレゼントを制作する。
・三陸鉄道の魅力を絵で伝える。
・トンボの産卵の観察。
・部活動の技術を向上させる方法を調べ、実際に試してみる。
・特撮映画の歴史を調べて一覧にまとめる。

◆「ちょこっとマイプロジェクト」発表

５名程度のグループに分かれて、「ちょこっとマイプロジェクト」の成果を、プレゼンテーション形式で発表した。

（ウ）大槌発みらい塾（９月）

「大槌発みらい塾」とは、町内外や多様な年代の方々との交流や価値観の触れ合いを通して、自らの生き方・考え方を見つめ、今後の進路・自らの未来を考えていくための材料とすることを目的とした企画である。１学期、総合探究では自分と向き合うことを通じて、自分の興味関心を探るという活動を行ってきた。さらにその学習を進めるために、高校生のロールモデルとなりうる地域内外の大人を招いて話を聞く機会を設けた。

日　時：令和３年９月 17 日（金）３・４校時
場　所：大槌高校体育館
テーマ：「身の回りの課題に取り組むチャレンジャーと出会う」
対　象：大槌高校１、２年生

◆講師・プロフィール

番	分野	所属・氏名	プロフィール
1	郷土芸能	大槌虎舞協議会会長 菊池忠彦氏	城山虎舞に関わり、震災の１ヶ月後には避難所で公演を再開。震災後も精力的に伝承活動に取り組んでいる。
2	教育・福祉	ままりば代表 小川麻里子氏	子育てママの就労支援、多世代交流事業、居場所づくり等に取り組んでいる。
3	水産業	大槌町役場産業振興課 黒澤勉氏	大槌町漁業協同組合で鮭の増養殖事業に従事。東日本大震災後から、産業振興課において水産業の振興に取り組んでいる。
4	海洋研究	東京大学大気海洋研究所 早川淳氏	東京大学大気海洋研究所において、貝や海藻の研究に取り組んでいる。はま研究会の活動にも協力してくださっている。

5	自動車整備	ロータス倉本代表 倉本栄志氏	町内で自動車整備会社を経営。震災で本社工場が流出したが、いち早く営業を再開。その後も釜石に給油所を開設するなど、地域の復興に取り組んでいる。
6	観光	大槌町地域おこし協力隊 片山悠氏	東京都出身で、今年度地域おこし協力隊としてＩターン。飲食店や宿泊施設の広報活動に取り組んでいる。
7	大学生	岩手大学理工学部 小笠原隼氏	本校卒業生。高校時代は復興研究会や生徒会等の活動に取り組む。大学では防災・建設環境について学び、卒業研究では土砂災害や地盤の分析を行っている。
8	大学生	岩手県立大学社会福祉学部 寒河江彩乃氏	昨年度本校卒業生。高校時代にはマイプロジェクトの活動で「発達障がい児の保護者」について探究した。
9	大学生	岩手県立大学総合政策学部 野﨑悠矢氏	昨年度本校卒業生。高校時代には各種行事の様々な場面で活躍。地域活性について学ぶために大学に進学。

◆当日の様子

生徒は町内外９名の大人から２名を選び小グループで話を聞いた。講師のみなさんに、自身が取り組んでいる分野についてのお話しだけでなく、これまでの人生の中での悩み、葛藤等を丁寧に話していただくことで、生徒は自身の経験と照らし合わせながら聞くことができた。また、大槌高校出身の卒業生という身近な存在の話に触れた生徒は、同じような環境の中で自分の夢を実現していった先輩の姿に強く心を動かされている様子だった。

◆生徒の感想

・片山さんの話を聞いて、片山さんが中高生時代、人前で話すことが苦手で自分に自信が無かったという所が、今の私にとても似ているなと思いました。私は高校を決める際、同じ中学の人と一緒の高校に行くか、同級生は誰も行かないこの大槌高校へ進学するかすごく悩んだ時、違う人とも接して色々な景色を見てみたいと思い大槌高校に進学する事を決めました。あの時自分で選択した道であり、「自分が決めた事だから最後まで頑張ってみよう」

と思える事が多くあります。だからこそ、片山さんが最後に話していた、飛び込んでみたからこそ、見える景色があるという言葉にはとても共感しました。

・小川さんのお話を聞いて、誰かに頼ることも必要ということを学びました。自分は性格的に一人で抱え込んで誰にも相談できないことが多いので、小川さんの「周りの手を借りることも大切」という言葉を聞いて少し気が楽になりました。人に話すだけで少しすっきりするので、辛くなる前に誰か信頼できる人に相談したいと思います。また、助けてもらうだけでなく自分も困っている人がいたら手を差しのべたり、話を聞いてあげられる人になりたいと思いました。将来幼稚園教諭や保育士などの保育系の分野に進みたいと考えているので、子育てや産前後のケアについても知識を深めていきたいです。今回は貴重なお話しをありがとうございました。

・野﨑さんのお話しを聞いて、自分の考えに自信を持つという話が心に残りました。私は、自分の意見が合っているかどうか不安になり、発言できないことが多くあります。だから、野﨑さんの話を聞いて、自分の考えに自信を持ったり、マイプロなどの探究活動を楽しんで良いのだと思いました。また、つまずいたら、今まで接していなかった人と接したりすることが良いということも分かりました。ありがとうございました。

（エ）SIMulation おおつち 2030（SIM おおつち 2030）

SIMulation おおつちとは、2030 年の大槌町を想像した際に想定される地域課題に対して、解決策を構想し提案する活動である。生徒が解決策を構想する地域課題テーマは、第９次大槌町総合計画の６つの柱に基づき、大槌町議会に設定していただいた。内容は下記の通りである。

番	高校生が解決策を構想する地域課題テーマ
1	農業の担い手増加のための施策を考えよ
2	高齢化社会の中でも、医療・介護サービスを安定的に提供するための担い手育成の仕組みを考えよ
3	魅力的なふるさと科のカリキュラムを考えよ
4	大槌町のごみの排出量を減らすための施策を考えよ
5	大槌町へのＵ・Ｉターン者数増加のための施策を考えよ
6	持続可能な地域コミュニティの再生に向けた施策を考えよ

学習は以下の順で行った。

a　大槌町議会によるテーマ説明会
b　各テーマに関する町内の現状を調査する（大槌町内フィールドワーク）
c　課題が生まれている原因を分析する
d　町外を視察し、各テーマに対する解決策の先進事例を学ぶ（ラーニングジャーニー）
e　解決策を構想する
f　構想した解決策を発表する（課題解決のためのアイデア発表会）

◆授業の流れ

回数	日程	内容
1	９月 29 日（水）	オリエンテーション
2	10 月６日（水）	大槌町議会によるテーマ説明会
3	10 月 13 日（水）	大槌町フィールドワーク事前学習
4	10 月 27 日（水）	大槌町内フィールドワーク
5	11 月 10 日（水）	大槌町内フィールドワーク振り返り
6	11 月 17 日（水）	課題が生まれている原因を分析する①
7	11 月 24 日（水）	課題が生まれている原因を分析する②
8	12 月１日（水）	課題が生まれている原因を分析する③
9	12 月８日（水）	ラーニングジャーニー事前学習
１０	12 月 13 日（月）	ラーニングジャーニー
１１	12 月 23 日（水）	ラーニングジャーニー振り返り
１２	１月 19 日（水）	解決策を構想する
１３	１月 26 日（水）	解決策を構想する
１４	２月２日（水）	解決策を構想する
１５	２月９日（水）	発表準備
１６	２月 21 日（月）	発表準備
１７	２月 25 日（金）	課題解決のためのアイデア発表会

a　大槌町議会によるテーマ説明会

大槌町議会の芳賀潤議員、菊池忠彦議員からテーマに関する説明を行っていただいた。生徒はそれぞれのテーマに関する基礎的な情報や、大槌町の現状についての理解を深めた。その後、自身が構想したいテーマについての希望調査を行い、調査の結果をもとに各テーマ 10 名ずつのグループに分かれて活動がスタートした。

b　大槌町内フィールドワーク

各テーマに関する町内の現状をより深く理解するために、大槌町内でのフィールドワークを行った。フィールドワークは、前半に大槌町役場職員へのヒアリング、後半にテーマに関連する施設や住民を訪問する形式で実施した。

番	分野	役場ヒアリング担当課	訪問先
1	農業	産業振興課	農家　東梅康悦氏
2	医療・介護	健康福祉課	医療法人あかね会
3	ふるさと学習	教育委員会学務課	はまぎく若だんな会　芳賀光氏
4	ごみ・環境問題	町民課	大槌町クリーンセンター
5	移住定住促進	産業振興課	Ｉターン者　中本健太氏
6	地域コミュニティづくり	協働地域づくり推進課	臼澤自治会

【当日の様子】

活動の前半では、各課の担当者の方に来校していただき、大槌町の行政事業の説明を行っていただいた。生徒は事前に用意した質問をもとにヒアリングを実施した。活動の後半では、テーマに関連する施設や住民を訪問しヒアリングや体験活動を行った。

【生徒の感想】

・自分は大槌町で生まれ育ったけれども、まだまだ知らないことがたくさんあるということを実感しました。今回学んだことをもとに、与えられているテーマに対する解決策を頑張って考えたいと思いました。また、実際に農家さんの畑で収穫体験をさせていただいたことによって、体感することで農業の魅力に気づくということを学びました。差し入れもいただいてとても嬉しかったです。

・介護に関わる人は少ないというイメージを持っていたけれども、町内で介護の仕事をしている人は思ったよりも多いということに驚きました。それでも担い手が不足しているのは、高齢者の数が年々増えていることが原因ということも知り、今回お話を聞いて知ることができて良かったです。

c　課題が生まれている原因を分析する

各テーマ 10 名のグループを５名ずつの２チームに分けて、課題が生まれている原因を分析するワークを行った。ワークは「分解の木」という、課題解決の際に用いられるフレームワークを活用し、「なぜ？」を３回繰り返して原因を細かく分解していった。

d　町外を視察し、各テーマに対する解決策の先進事例を学ぶ（ラーニングジャーニー）

各テーマに関する課題解決のための先進的な事例を学ぶために、大槌町外の自治体や民間団体を訪問し、調査活動を実施した。最終的に町への提案アイデアを考えるにあたり、大槌町に活かせる知見を持ち帰ることを目指した。訪問するエリアは、いずれも各テーマに対して先進的な取組を行っている、盛岡市、矢巾町、花巻市、北上市、住田町、陸前高田市、宮城県気仙沼市に設定した。

◆訪問先

	分野	地域	訪問先	概要
1	農業	花巻市	ファームプラスカフェ	花巻市の農家平賀さんが経営するカフェ。首都圏から来る児童生徒や、岩手県への移住を考えている方向けに、農業体験の機会等も提供している。
			花巻市 大迫総合支所 地域振興課	花巻市大迫町の農業に関わる事業を管轄している。花巻市では、新規就農者支援に力を入れており、特に大迫地区のぶどう栽培に取り組む新規就農の成功事例が多い。

2	医療・介護	北上市	北上市 福祉部長寿介護課 専修大学北上福祉教育専門学校（介護ロボット体験会）	県内の自治体の中でも、特に介護の担い手育成に力を入れている自治体の１つ。市内の養成施設と連携した奨学金制度、外国人の担い手確保、介護ロボットの導入等、幅広い取組を行っている。
3	ふるさと学習	住田町	住田町教育委員会 すみた森の案内人の会 吉田洋一氏 （地域創造学の体験）	住田町をフィールドにして行われる探究型の活動。小中高の 13 年間の学びが行われている。町独自に作成した地域創造学の学習指導要領もある。
4	ゴミ 環境問題	矢巾町	矢巾町町民環境課 リサイクルモア	矢巾町と(株)青南商事が締結した、３Ｒの推進による廃棄物の発生抑制などを目的とした協定に基づき、(株)青南商事が設置する無人の資源リサイクル回収施設。
		盛岡市	環境学習交流センター	環境に関する情報の収集・提供や、学習及び保全活動の支援を行う活動拠点施設。環境問題に関する講習会や、体験活動等も開催している。
5	移住定住促進	宮城県 気仙沼市	気仙沼市移住・定住支援センター 「ＭＩＮＡＴＯ」 移住者との交流活動 三浦亜美氏 渡辺修司氏 加藤航也氏	気仙沼市への移住を考えている方をサポートする事業を幅広く展開している。スタッフ全員がＵ・Ｉターン者で運営している。
6	地域コミュニティづくり	陸前高田市広田町	一般社団法人長洞元気村	長洞地区、仮設住宅団地自治会として生まれ、現在は一般社団法人となって活動を続けている。現在は海産物の直送や被災地体験型の防災教育ツアーの受け入れなどを行っている。

			古民家美術館　三陸館	広田町出身の画家、故畠山孝一さんの絵を展示している古民家美術館。2020 年２月に孝一さんが逝去され、ＮＰＯ法人ＳＥＴに関わる学生がクラウドファウンディングを行い、コミュニティスペースをオープンさせ、地域住民の交流の場となっている。

◆当日の様子

グループごとにバスに乗って現地へ行き、１日を通して各地域の課題解決の取組を視察した。現地では午前と午後に分けて２つの事業所を訪問し、お話しを聞いた。

各視察先では体験活動等を実施していただき、楽しみながら活動に参加することができた。

◆生徒の感想

・気仙沼市で出会った３名の移住者の方が、口を揃えて「人のつながりが移住のきっけにな

った」というお話しをしていたことが印象に残った。僕は移住を考える時は、働く場所があるか、近くにお店があるかなどのハード面が大事だと思っていたけれど、人とのつながりや、若者が活躍している空気に人が巻き込まれているということは新しい発見だった。大槌にも、若者が集まれる場所や、やりたいことを実現できる雰囲気が必要だと思った。

・住田町の地域創造学は、実は大槌町のふるさと科を参考にしていたということを初めて知りました。大槌は海が有名だけれども、住田町では森をテーマにして様々な活動を行っていました。また、住田の中学生が考えたアイデアが実際に町で実施されていることも知り、すごいなと思いました。

e　解決策を構想する

大槌町内フィールドワーク、課題が生まれている原因の特定ワーク、ラーニングジャーニーなどを通して考えてきたことをもとに、解決策を構想し、まとめる活動を行った。活動は、各テーマ 10 名のグループを５名ずつの２チームに分けて行った。チームごとに解決策を３つ構想し、それらを比較するワークを経て最終的に１つの解決策に絞った。その後、発表会に向けた資料の作成や発表練習を行った。資料の作成はすべて Microsoft teems を活用して、生徒全員が共同編集できる形式で進めていった。

f　構想した解決策を発表する（課題解決のためのアイデア発表会）

各チームが構想した解決策のアイデアを、これまでの活動の振り返りとともに発表した。今年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で校内のみでの発表会となり、２年生の発表会と合同で実施した。

日　時：令和４年２月 25 日（金）１、２校時

場　所：大槌高校各教室

テーマ：「大槌町の地域課題に対する解決策のアイデアを発表する」

◆当日の様子

これまでの活動の振り返りと、構想した解決策のアイデアの提案を、パワーポイントのスライドにまとめて 15 分程度で発表した。発表を聞いていた２年生の生徒からは、１年間マイプロジェクトを行ってきた先輩としての観点から鋭い質問が多く出た。

◆生徒からの感想

・本番を迎えるまで、しっかりと発表ができるか不安だったけれど、発表を終えられてほっとしている。ただ、２年生の先輩から、自分たちだけでは考えつかなかった視点での質問をたくさんもらい、答えられなかったのが悔しかった。今回の活動を通して、大槌町についてたくさん知ることができた。もう少し色々な角度から考えられるようになりたいと思った。

・他のグループの発表を聞いて、すぐにでも実施できそうな内容の提案もあって驚きました。考えたことをただ発表するだけでなく、伝わりやすいようなまとめ方、表現方法を工夫することの大切さを学びました。

・活動を通して、大槌町の現状や、課題を解決するための方法を学ぶことができました。今回もらった質問に対してもより深く考えなければいけないと思いました。２年生からはマイプロジェクトが始まるので、今回の取組を通して学んだことを活かしていきたいです。

イ　２年生の取組

２年生では、生徒各自が興味関心から取り組みたいテーマを設定し、問いを立てながら検証アクションを繰り返していく「マイプロジェクト」に取り組んだ。

４、５月は、自分の興味や身の回りの気になることを模索しながら、個人でテーマを設定した。６月からは、各自のテーマに関する問いを立て、検証アクションを実行した。フィールドワークを行い、生徒のテーマに関連する地域の方からの協力を得ながら活動を実施した。

８月以降は、生徒や教員が４つのゼミに分かれて、個々で進めるプロジェクトを共有・相談するコミュニティをつくりながら授業を展開した。また、オンライン探究交流を実施し、他県の高校２年生とオンラインツールを活用しながらお互いの探究の進捗状況を共有した。校内で、10 月に中間発表会、２月に最終発表会を実施した。

プロジェクト活動の指導にあたり、認定ＮＰＯ法人カタリバのスタッフ４名と大学生インターン２名に協力をいただいた。

１年間を通した授業の流れは以下の通りである。

（ア）テーマ設定（４月～５月）

◆気になること探しワーク・テーマの設定

自分の過去の経験から印象に残った出来事を振り返ったり、新聞や広報誌を見て気になる記事を探したりしながら、テーマに繋がりそうなキーワードを書き出した。その上でプロジェクトのテーマとそれに関連する３つのキーワードを個人で設定した。

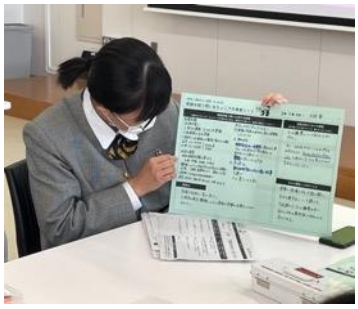
（イ）マイプロジェクトの問いⅠ（６月～７月）

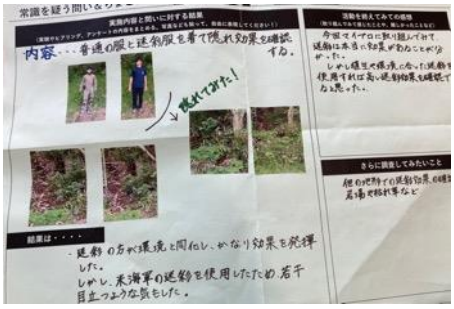
◆“常識を疑う問い”から、ちょこっとマイプロを実行しよう

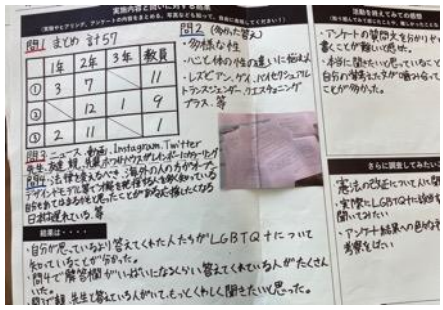
「本当に（テーマ）は〇〇なのか？」という“常識を疑う問い”を設定した。

“常識を疑う問い”を検証するために、１週間で実行できるアクションを計画した。

次の授業までの１週間を使い、各自が計画したアクションを実行した。







【生徒から出てきた問い】
・本当に好きなものばかり食べていたら栄養が偏るのか
・本当に筋力をつければ打球は伸びるのか？
・本当に迷彩服を着ると自然に溶け込めるのか？
・本当に避難所には必要なものが揃っているのか？

◆“アイデアを広げる問い”からプロジェクトの未来を考えよう

「どのようにしたらは〇〇できるのか？」という“アイデアを広げる問い”を設定した。

ブレストカードを使い、問いに対するアイデアをグループで出し合った。

【生徒から出てきた問い】
・どうやったらＬＧＢＴＱの方々が生きやすい世の中になるのか？
・どうやったら目の不自由な人の事故を防げるのか？
・どうやったら得意なイラストを誰かのために役立てられるのか？
・どうやったらなりたい職業を見つけられるのか？

◆第１回オンライン探究交流会（６月１日）

小規模校３校がオンラインで集まり、互いの探究活動を共有しながら学びを深めていく「オンライン探究交流会」を実施した。本校の２年生 39 名と、山形県立小国高等学校２年生 28 名、熊本県立小国高等学校２年生 59 名が参加し、オンラインビデオ通話を活用して交流した。

１回目の交流会では、オンラインツールの活用方法を学ぶと同時に、各校の紹介や生徒同士のアイスブレイクなどを行った。

◆第２回オンライン探究交流会（７月１３日）

２回目の交流会では「自分のテーマを探究することの面白さ」をテーマとした講演会を実施した。ロールモデルとの出会いを通して、マイプロジェクトを進めていくイメージを深めることができた。

講師は自分のテーマを仕事につなげている社会人６名と、高校時代にマイプロジェクトに取り組んだ大学生～20 代前半の若者６名に参加していただいた。

【テーマ・講師一覧】

通番	テーマ	講師名（所属）
1	自然科学	大土直哉 氏（東大海洋研国際大気海洋研究センター）
2	探究・ＩＴ	大垣敬寛 氏（icho café/ 学習塾ＥＳＴＥＭ）
3	地域活性化	荒武麻耶 氏（未来づくり拠点ＭＯＧ）
4	メディア	加藤聡 氏（日本テレビ）
5	エンタメ	三原修平 氏（バンダイ）
6	写真	仁科勝介（写真家）
7	医療	伊谷野真莉愛 氏（医学生）
8	国際	三輪浩朔 氏（株式会社アカイノロシ）
9	マイノリティ	坂口歩 氏（大学生）
10	ファッション	長崎航平 氏（起業準備中・19 歳）
11	スポーツ	河合佑真 氏（株式会社ＳＵＰＯＴＡ・大学生）
12	地域活性化	竹中聡馬 氏（株式会社ＢｉＢｉ・大学生）

◆マイプロジェクト・フィールドワーク（７月 20 日）

各自の探究活動を進めていくにあたり、各テーマに精通した地域の大人と出会うことを目的として「マイプロジェクト・フィールドワーク」を実施した。

生徒のテーマから 19 ヶ所の訪問先及び講師を設定し、生徒たちが各講師のもとに出向いて、プロジェクトの進め方や今後の方向性などについて相談をした。また、遠方の講師については、オンラインで実施した。

【テーマ・講師一覧】

	テーマ	講師名（所属）★はオンライン参加
1	福祉・障がい	東梅麻奈美 氏（地域共生ホームねまれや）
2	料理・栄養	藤原テエ子 氏（大槌ジビエプロジェクト）
3	食文化	早川淳氏（東大大気海洋研究所国際沿岸海洋研究センター）
4	アニメ・イラスト	平舘豊 氏（三陸コネクト）
5	音楽	君塚彩 氏（アマチュアミュージシャン）
6	スポーツ×地域活性	河合秀保 氏（河合商店）
7	映画	島田香織 氏（三陸ブレーメン企画）
8	ものづくり	芳賀正彦 氏（ＮＰＯ法人吉里吉里国）
9	韓国文化	南景元 （大槌町スクールソーシャルワーカー・韓国出身）
10	魅力発信	片山悠 氏（大槌町地域おこし協力隊） 小國夢夏 氏（大槌町観光交流協会）
11	自衛隊	相澤 美智夫 氏（大槌町役場 危機管理室・自衛隊経験者）
12	防災	島村亜紀子 氏（大槌町役場 防災・まちづくり専門官）
13	役場	黒澤直美 氏（大槌町役場 学務課）
14	心理学	菊地祐架 氏（大槌町スクールソーシャルワーカー）
15	スポーツ技術向上	佐藤陸 氏（トレーニングジムＫｉｎｇ８）
16	医療	大江将史 氏（救急総合診療科・医師）★
17	スポーツ×教育	伊藤正治 氏（前大槌町教育長）★
18	ゲーム	浅田太一 氏(大槌町出身・大学生・マイプロジェクト経験者)★
19	その他	廣瀬久実 氏（大学生・マイプロジェクト経験者）★

◆夏休み中のアクション計画（７月）

フィールドワークでのアドバイスを活かし、夏休み中のアクションを計画した。

（ウ）マイプロジェクトの問いⅡ（８月～10 月）

◆ゼミ活動

夏休み明け以降は、授業時間等を使い各自で探究活動を進める体制に入った。町内の協力

者との打ち合わせに出かけ、ＰＣ・タブレットを使ってオンラインインタビューを行うなど、地域の方々に協力を求めながら活動を進める姿が見られた。

生徒のテーマや教員の専門分野をもとに４つのゼミをつくり、ゼミごとに各自の探究活動の進め方を相談し、定期的に生徒同士が互いの進捗状況を共有した。

◆マイプロジェクト中間発表会（10 月 14 日）

問いⅠ、問いⅡ期間のまとめとして、中間発表を実施した。個人・グループ合わせて 41 プロジェクトが、半年間実施してきた活動の進捗とそこから得た学びについてプレゼンテーション形式で発表した。

◆第３回オンライン探究交流会（10 月 28 日）

７月の２回目の交流会に引き続き、３回目のオンライン交流会を実施した。

３校の生徒が小グループをつくり、これまで実施してきた活動について各自が５分間で発表した。お互いの活動に対してフィードバックをし合うことで、自分自身の活動を振り返り、今後の進め方を模索する機会となった。

（エ）マイプロジェクトの問いⅢ・まとめ（11 月～２月）

◆活動の振り返り・まとめ（１月）

11 月以降も、引き続きゼミごとに分かれて生徒が各自で探究活動を進めていった。

冬休み明けの１月以降は、ワークシートを活用しながら、これまで立てた問いやその検証アクションを整理するとともに、活動を通して得た学びについて振り返る機会をとった。

◆第４回オンライン探究交流会（２月 18 日）

10 月の３回目の交流会に引き続き、４回目のオンライン交流会を実施した。

３校の生徒が集まった小グループをつくり、これまで実施してきた活動について各自が５分間で発表した。お互いの活動に対してフィードバックをし合うことで、自分自身の活動を振り返り、今後の進め方を模索する機会となった。

◆最終発表会（２月 25 日）

個人・グループ合わせて 41 プロジェクトが、１年間の探究活動の成果と学びについてプレゼンテーションにまとめて発表した。１年生が発表を見学し、後輩にマイプロジェクトに取り組んだことで得られた力や学びなどを共有した。

◆１年間のまとめ（３月３日）

マイプロジェクトに関するこれまでの活動をルーブリックで評価し、その結果を返却しながら担当教員と振り返りを実施した。

コロナ禍により、マイプロジェクトの活動成果を地域の方に見ていただく機会をつくることができなかったため、学校ＨＰやケーブルテレビ等で生徒の発表動画を公開した。

生徒一人ひとりがプロジェクトを通してお世話になった地域の人を選び、発表動画のＱＲコードが掲載されたチラシを配布した。チラシに、生徒たちが感謝のメッセージを記入した。

（オ）プロジェクト実践事例

◆テーマ・活動内容一覧

No	テーマ	発表タイトル	活動内容
1	食	引きだせしあわせ！もぐもぐプロジェクト	好き嫌いがある妹にも食を楽しんでほしいという想いから、野菜を美味しく食べられる料理を模索した。また、考案したメニューを地域の子ども食堂で提供した。
2	イラスト	大槌ＰＲキャラクター制作プロジェクト	特技のイラストを活かして、大槌町の新しいＰＲキャラクターを考案した。
3	スポーツ	プール～うにさんコース脱出プロジェクト～	体育の授業で行われるプールについての調査を行い、プールが苦手な人でも楽しめる新たなスポーツを検討した。
4	障がい者	共生	インクルーシブ教育やユニバーサルデザインなどを調査し、インクルーシブデザインの考え方を用いた教室の掲示を実践した。
5	音楽	音楽療法	音楽療法について調査し、身近な人たちに音楽療法の手法を実践した。
6	韓国	大槌の魅力を韓国へ	韓国語を習得するため韓国人とオンラインでの交流を重ね、大槌町の観光パンフレットを韓国語で作成した。
7	食	魚嫌いな人でも美味しく食べられる魚を使った料理を作る	魚の臭みが苦手という理由から、魚を美味しく食べられるような代替料理を作り、魚嫌いを克服した。
8	医療	私が変えたい医療の世界～国ごとの医療に対する意識の違い～	医療を受ける選択をする人としない人の意識の違いについて調査するため、外国人へのヒアリングやインタビュー等を実施した。

9	映画	本と映画	本と映画が好きという想いから、原作本と実写映画の違いに着目し、なぜ違いが生まれるのか調査した。
10	食	漬物プロジェクト	漬物の美味しい食べ方を知るために、地域で昔からよく食べられている漬物や世界各国の漬物などを作り、漬物が持つ魅力について探究した。
11	韓国	私が日本と韓国の架け橋に～不自由がない世界へ☆	日韓のお互いの悪いイメージを払拭したいという想いから、交流イベントやスピーチを通して、お互いの歴史や文化を認め合うために必要な要素を検討した。
12	食	大槌のもう一つの「海の恵み」	町内で廃棄されているピーマンを活用したお菓子を試作し、地域の新たな特産品としてカフェ等での提供ができるよう取り組んだ。
13	イラスト	大槌高校の部活紹介動画制作プロジェクト	特技のイラストを活かして、高校の部活動を紹介するアニメーション動画を作成した。
14	イラスト	絵の価値とは？	大槌町を舞台としたアニメーション映画のＰＲ活動の一貫として、自ら描いた絵を町内各所に展示し、様々な人から意見をもらい、絵が持つ価値について考察した。
15	アイドル	嵐みたいに売れるにはどうしたらいいの？	応援しているアイドルグループが国民的な人気グループへと成長するために、ファンに何ができるのかをワークショップ等を開催して検討した。
16	音楽	ギター	ギターやロックに関する歴史を調査し、ギターの演奏会などを開催してギターの魅力について探究した。
17	建築	未来の家	建築士へのヒアリングを通して、将来の日本で高齢者が安心して暮らせるような家を考え、設計図を作成した。
18	文化	気軽にオシャレをしよう	高校生でも気軽にオシャレを楽しんでほしいという想いから、オリジナルのネイルチップを製作し、地域のフリーマーケットで販売した。
19	音楽	こどもと音楽	町内の幼稚園や学童施設に通う子供たちを対象に手作り楽器を使ったワークショップを実施し、音楽がコミュニケーションのツールとして有効なのかを模索した。
20	スポーツ	野球の技術上げプロジェクト	筋トレの工夫によって、バッティングの飛距離が伸びるのかを調査した。また、野球の魅力を中学生に伝える活動を実施した。
21	スポーツ	ダンクできるか	ダンクシュートができるようになることを目指して、ジャンプ力向上に効果的な筋トレや新しい練習メニューを実践した。

22	心理学	人との関わり	心理学実験を通して、対人コミュニケーションに関する悩みを解消する方策について検討した。
23	郷土芸能	虎舞復活プロジェクト	震災後の虎舞団体の活動縮小や人口減少という課題に対して関係者へのヒアリングを通して解決策を模索した。
24	食	ベジタブルライフ～小中学生が食べられる野菜料理を提案しよう～	大槌町の給食センターで野菜の残量が増加しているという課題を聞き、小中学生の声を集めて、野菜を美味しく食べられる給食の献立を提案した。
25	字の上達	ペン習字	字を綺麗に書けるようになりたいという想いから、字を綺麗に書く練習をし、綺麗に書く工夫について小学生にワークショップを通して伝える活動をした。
26	防災	津波の価値観と認知的不協和理論	東日本大震災津波で亡くなった人々の要因分析や社会心理学理論を活用して、安渡地区の避難訓練について提案した。
27	弓道	私の弓道プロジェクト	弓道の上達に向け、自分の課題を分析し、最も力を発揮できるルーティンをいくつか実践した。
28	ＬＧＢＴＱ＋	制服の選択肢を増やすために	性に関することや決められた制服を着ることについて違和感を持ち、女子制服へのスラックス導入などを検討する場を設けた。
29	心理学	心理学	悩みを抱えている人に心を開いてもらう方法について考えるため、アンケートやヒアリング調査を実施した。
30	動物	犬と共に生きる。	ペットの健康維持に向けて、飼い主が与えてはいけない食べ物や人間と共に楽しめる食事について提案・発信した。
31	心理	人間の心理（ストレス）	人がストレスを抱える原因についてアンケート調査などから分析し、ポジティブになるために必要なことをまとめた。
32	福祉	個性を認め合える社会に	障がい者に対する偏見や健常者との相互理解について調査し、中学生に障がい者の理解を促すワークショップを実施した。
33	アニメ	アニメの世界をジオラマで再現する	好きなアニメの世界をジオラマで再現し、大槌町文化交流センターに展示をして多くの人に見てもらった。
34	発達障がい	発達障がいと差別～人間社会における倫理観を巡って～	発達障がいを持つ生徒への支援方法のヒアリングを行い、発達障がいの当事者として周囲の人たちに知ってもらいたいこと発信した。

35	ものづくり	ものづくりプロジェクト	町内で活躍する棟梁にものづくりについて教えてもらい、一から木材を集めてオリジナルの机を完成させた。
36	映画	Let's make a movie project.	映画で地域を盛り上げる人々とのヒアリングを通して、自ら脚本を書き、映画制作を行うことに挑戦した。
37	キャンプ	みちのく潮風トレイルでキャンプ	町内に気軽にキャンプができる場所がないという課題から、「みちのく潮風トレイル」コースでハイキングとキャンプができるコースを提案し、実施した。
38	魅力発信	魅力発信	大槌町の観光協会のＩｎｓｔａｇｒａｍに、高校生目線で大槌町の魅力を発信する投稿を行い、町の魅力発信のより良い方法について模索した。
39	ゲーム	パズル	オリジナルのパズルゲームを制作し、中学生への体験会を実施した。
40	魅力発信	「伝える」を「伝わる」に	大槌町のふるさとＣＭの作成や学校ＰＲ動画の作成を行う中で、自分たちの伝えたいことが相手に伝わるためにはどうしたら良いのかを模索した。
41	服	服作ってみた	購入した服をただ着るだけでは面白くないという想いから、服のリメイクや部活のオリジナル Ｔ シャツのデザインなどに取り組んだ。

《事例①「津波の価値観と認知的不協和理論」》

東日本大震災津波で亡くなった人の行動を記録する「生きる証」から安渡地区住民の被災当時の様子を読み解き、なぜ逃げ遅れてしまったのかを分析した。逃げ遅れの要因を踏まえて、今後のより良い避難訓練に向けて改善策を提案した。

《事例②「大槌町のもう一つの『海の恵み』」》

身近に地域ならではのものを使った町の特産品となるお菓子がないという課題に着目し、地元農家から廃棄されている規格外ピーマンを譲り受け、ピーマンを使ったお菓子作りに挑戦した。地域のカフェ経営者からアドバイスを受けながら試作を重ね、地域の子ども食堂で提供した。

《事例③「絵の価値とは？」》

大槌町を舞台としたアニメーション映画を盛り上げるため、観光協会と協力し、ＰＲに向けたチラシ制作に取り組んだ。また、アニメーションをモチーフとしたイラストを制作し、町内各所に展示することで、イラストが持つ価値とは何かという視点で探究を進めた。

◆生徒の感想

・私は人と話すことがあまり得意な方ではなかったのですが、活動を通して地域の人たちと関わることで、人と話すことが楽しいと感じるようになりました。地域で様々な活動をすることで、自分は地域に役立てることができるのだなと気づきました。また、私の趣味を活かしたマイプロジェクトをすることで、他の人も自分の趣味に関心を持ってくれたことが嬉しかったです。

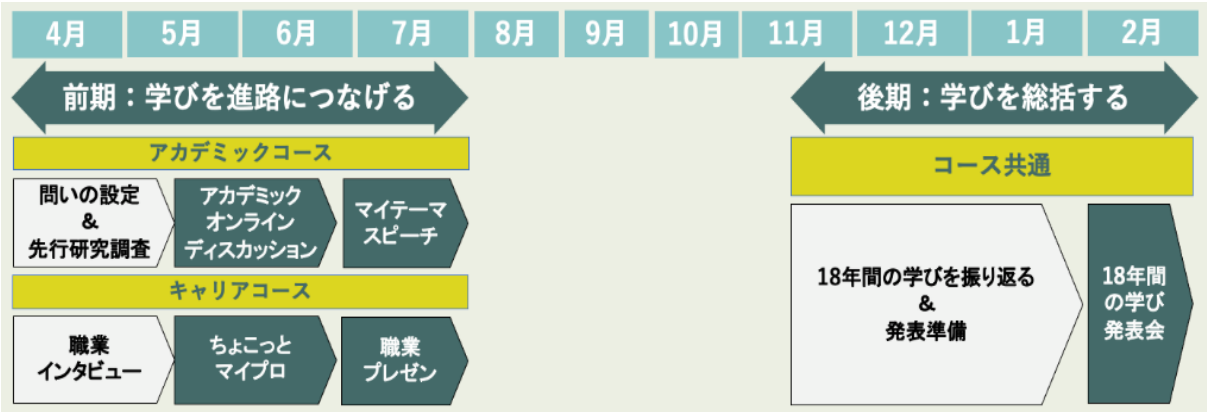
・マイプロを始めてから、自分自身で考える力が身についたと感じました。「どうやったら〇〇できるのか？」という答えのない問いについて何度も考え、他の人と話し合いながら自分なりの答えを見つけていく過程が印象に残っています。また、自分の考えを相手にしっかり伝える力も身についたと思います。

・マイプロをする前の自分は、何事にもめんどくさい、やりたくないと思ってしまいがちでしたが、活動をしていくうちに自分のテーマや問いを持って取り組むことが楽しいと思えるようになりました。マイプロアワードに出場し、学校外で発表するという挑戦をしたことで、自分に自信がつき、成長できたと思います。

ウ　３年生の取組

前期（４月～６月）、後期（11 月～２月）に分けて実施した。前期では、これまでに取り組んできた学習をそれぞれの希望進路へ接続することを目指し、大学・短大進学や公務員を希望する「アカデミックコース」と専門学校進学や就職を希望する「キャリアコース」の２コースで授業を展開した。オンラインを活用し、関心ある進路先の専門家や希望する職種の社会人との対話を通して、自らの現状と将来の在りたい姿を比較しながら進路実現に向けて必要な力を認識することができた。後期では 18 年間の学びの集大成として、これまでの人生を通して身につけた力と様々な経験から得られた知見について語るプレゼンテーションを作成した。マイプロジェクト活動等でお世話になった地域の方を学校に招き、プレゼンテーションを発表する機会も予定していた。（※感染症拡大のため中止）

１年間を通した授業の流れは以下の通りである。



【前期（４月～６月）】

（ア）アカデミックコース：「アカデミック・オンラインディスカッション」

a　問いの設定・先行研究調査

前年度のマイプロジェクトで探究した問いをベースに、ディスカッションで話したい問いを設定した。論文検索サイトを活用して先行研究の調査を行うことで、自分のマイプロジェクトがどのような学問分野や研究と結びついているのかを認識した。

各生徒がディスカッションに参加してほしい専門家（大学教授、有識者等）に対して、メール等でアポイントを取った。

b　アカデミック・オンラインディスカッション

生徒自身のテーマと近い分野で研究や実践に取り組む専門家とのオンラインディスカッションを下記の 16 テーマで実施した。生徒が４人１組になり、自分のテーマ以外のディスカッションにも参加することで、多様な問いについて深く考え、自分の意見を述べる力が身についた。

【テーマ・講師一覧】

	テーマ	講師
1	防災	小井田伸雄氏（岩手県立大学総合政策学部 教授）
2	表現・コミュニケーション	吉永弥生氏（元大槌町巡回型カウンセラー）
3	アロマテラピー	山本加奈子氏（川崎医療福祉大学 准教授）
4	保育士・幼児虐待	河合清美氏（ＮＰＯこども発達実践協会 代表理事）
5	英語教育	関菜々子氏（大槌高校卒業生）
6	地域コミュニティ・住民自治	三浦大介氏（大槌町教育次長）
7	高齢者の栄養課題	五味達之祐氏（身体教育医学研究所うんなん）
8	音楽教育	箱山智美氏（千厩中学校 校長）
9	土砂災害対策	山本信次氏（岩手大学農学部 教授）
10	教育哲学	古瀬正也氏（ワークショップデザイナー）
11	ボードゲーム	今村亮氏（株式会社ディスカバ）
12	心に寄り添う看護	宮本裕司氏（コミュニティナースカンパニー）
13	文学の価値	横山英行氏（元出版会社編集者）
14	消防士の使命感	橋本陸氏（大船渡地区消防組合 消防士）
15	デジタル音楽制作	横山伸治氏（ＮＰＯカタリバ ｂ－ｌａｂスタッフ）
16	法学・法律	阿部梨華子氏

ｃ　アカデミック・テーマスピーチ

活動のまとめとして、５分間のスピーチを実施した。ディスカッションを通して自分が探究してきた問いがどのように深まり、今後の進路等にどのように活かしていきたいかを発表した。

（イ）キャリアコース：「2040 年の仕事と私」

a　職業インタビュー

自らが将来なりたい職業の先輩に対して、オンラインを活用してインタビューを行った。インタビューは、仕事の内容やその職業に求められる力などについての質問を中心に行い、自分がその職業に就くために、残りの高校生活で身に付けたい力について考えた。

【職業・事業所一覧】

番	職業	ご協力いただいた事業所名 （フリーランスの方は氏名）
1	公務員	大槌町教育委員会学務課
2	製造業	株式会社エノモト岩手工場
3		千田精密工業株式会社
4	製鉄業	日本製鐵東日本製鐵所君津地区
5	介護士	社会福祉法人　楽水会 特別養護老人ホーム　アミーガはまゆり
6	保育士	幼保連携型認定こども園　おおつちこども園
7	宿泊業	三陸花ホテルはまぎく
8	美容師	ジャストビューティー株式会社 Just Beauty Rufure
9	フェイスエスティシャン	healing salon kokage
10	システムエンジニア	RAY　LAB 合同会社
11	ガソリンスタンドスタッフ	株式会社赤武石油ガス
12	自動車整備士	株式会社ロータス倉本
13	自衛官	陸上自衛隊
14	トリマー	釜石どうぶつ病院
15	イラストレーター	木下　千尋氏
16	ブライダルヘアメイク	石岡悠希氏
17	ゲームサウンドクリエイター	丹羽啓介氏
18	事務職	大槌高校事務室

b　なりたい職業に求められる力を身に付ける「ちょこっとマイプロジェクト」

職業インタビューでの学びをもとに、自身が身に付けたい力を付けるために、それぞれが２週間程度で実施できるプロジェクトを立案し実践を行った。

c　発表会

活動のまとめとして、職業インタビューやちょこっとマイプロの内容をまとめた５分間のプレゼンテーションを作成し、校内で発表会を行った。

【後期（11 月～２月）】

（ウ）コース共通：「私が 18 年間で身につけた大槌（ハンマー）と知見」

a　オープンダイアログ

発表の内容を考えるにあたり、18 年間で身につけた力について対話を通して確認する「オープンダイアログ」というワークを行った。このワークは、生徒３人～４人と、教員１名を加えたグループをつくり、その中から選んだ対象者１名の長所や身に付けた強み等を、残りの生徒と教員で対話を行って見つけるという内容である。自己理解だけではなく、他者からの視点で自分にどのような強みがあるのかを理解することを目的として行った。

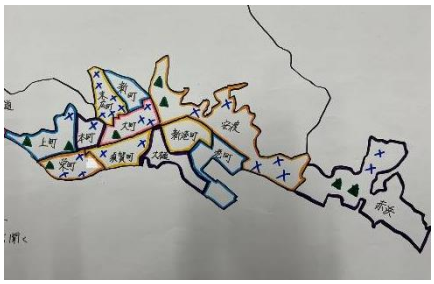
b　発表会

学校コンセプトである「大海を航る大槌（ハンマー）を持とう」になぞらえ、自身が 18 年間で身につけた「大槌（ハンマー）＝強み」をテーマとした５分程度のプレゼンを作成して発表を行った。

当初は、生徒がこれまでにお世話になった方を自ら招待して行う予定だったが、新型コロナウイルス感染症に関わる諸般の事情を鑑みて校内のみでの実施となった。地域への公開による発表の代替として、動画におさめた発表を地域の文化交流施設やローカルテレビで発信することを予定している。

生徒たちが作成したプレゼンの資料は、大槌高校のホームページ内（下記ＱＲコード）において公開した。

ｉ　ひょっこり表現島（国語）

実施学年・単位数	２年生　２単位
設置理由	地域言語を用い地域独特の表現を深く理解することにより、より多彩な「伝える力」「表現力」を育成する手立てとするために設置する。
科目目標	地域言語を深く学び、身近な言葉を大切にしながら表現力を高める。
今年度の取組	［他地域の生徒へのインタビュー調査］ 全国で使用される方言を調査し、学級内で共有し合うことを通して自分の住む地域以外で使われている方言と比較しながら、自らが無意識に活用している方言について理解を深めた。また調べた方言を活用して、関西の学校とオンラインで連携し、方言がどのような場面で使用されるのか（話す相手や状況により使用言語が異なるのか）に関するインタビュー形式の調査を行った。 ［方言地図の作成］ 大槌の 26 の方言（「ごんぼほる」「ひゃっこい」「のらすなよ」等）が釜石、鵜住居、大槌のそれぞれの地域における使用実態に違いはあるかを地図にすることで定量的に可視化した。  ［方言による地域ＰＲ動画］ 方言を活用して、大槌町・大槌高校を自分なりの視点で映像としてまとめる。どのような方言や視点が見られるのか等、他者視点を持ちながら制作を行う。
現状の成果と課題	［成果］身近な言語で普段意識しない方言の特徴を捉え、親しもうとする態度が身についた。（生徒の変化例：方言を使用することを恥ずかしいと言っていた生徒が、親しみを感じた、方言を大切にしていきたいという感想をもらす等）。 ［課題］方言調査は沿岸３地域の比較に留まった。他地域と連携しながらより広い調査を行っていきたい。また授業には専門知識が必要となり、今回の取組では実践女子大の協力をいただき授業を行ったが、今後も大学等との連携を図る必要がある。
今後の取組	・今回の活動で興味を持った生徒は教育課程外の時間を活用して、方言甲子園出場等でさらなる探究の機会を得る活動を行う。 ・次年度以降、題材やテーマが変わる際にも探究的な視点を持った科目の実施や関係機関との連携など継続性を担保していく。

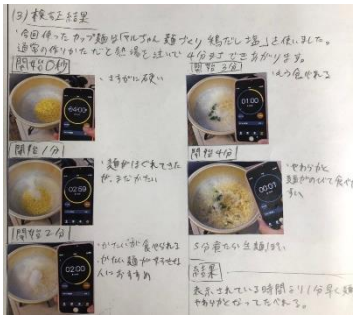
ii　まちづくり探究（地歴公民）

実施学年・単位数	３年生　２単位
設置理由	複雑さが増す社会においては、正解が一つに定まることはなく、様々な課題（矛盾・葛藤・衝突）が生まれる。課題の解決は容易ではないが、それぞれの主張の背景を理解しながら、解決の方向性を探る力が求められる。
科目目標	身近なテーマから地域や日本・世界にある課題に関する背景やそれぞれの主張を理解し、想像することができるようにすることで、人間関係の調整や人間関係に係る課題の解決能力向上を図る。
今年度の取組	前期中間は身近なテーマ（「犬」と「猫」どちらを飼うべきかなど）のディベートを通して主張を立論することに重点を置いた取組を行った。前期末は「大槌町と釜石市を合併すべきか」というテーマで議論を行い、立論の背景となる町の課題や財政の課題について理解を深めた。 後期中間はデザイン思考で課題を解決することを目指し、「学校の課題をデザインする」ことをテーマに学習を行った。校内で交流が生まれることを狙った「子ども食堂」の設置や「校内表示盤」の改良など具体的な意見が出された。後期末は町の交流センターの課題を解決するというテーマで「若者への震災伝承の方法について考えよう」など町にある課題に対して解決策を提案した。
現状の成果と課題	［成果］根拠を持って主張し、主張に対する反論を想定して準備をしておくなど、自らの視点だけではない複数の視点で捉える力が身についてきている。また課題に対して解決策を考えるということも自然とできるようになってきている。 ［課題］当事者意識の醸成にはまだ課題がある。後期末で行った取組については地域の方に直接課題を提示してもらうことで、期待に応えたいという思いが醸成され、意欲的に向かう姿勢が見られた。地域との接点を生むことで学びへの意欲が計画的に育まれるよう次年度に活かしていきたい。
今後の取組	・課題を構造的に捉えることができるよう効果的なインプットの機会を拡充する。 ・次年度以降は教科の学びとの接続を図る。民主主義制度に関することや人権に関すること等、同時期に学習する公民科目と関連付け、大槌の課題についてどのように取り組んでいくのかを考えることで教科と探究の横断が図る。

ⅲ　くらしｍａｔｈ（数学）

実施学年・単位数	２年生　２単位
設置理由	生活をする中で気づかないうちに様々な分野で数学の知識が活用されている。具体的に身近な分野で活用されている数学を学ぶことにより、数学の良さを認識するために設置する。また数学を用いて、暮らしの中にある課題を発見し、解決しようとする態度の育成を目指す。
科目目標	身の回りにある事象について数学を用いて考察する能力を培い、数学の良さを認識できるようにするとともに、それらを活用して生活に役立てる態度を育てる。
今年度の取組	前期は、商業活動において数学がどのように活用されているかを学んだ。料理の原価を計算で求める方法を学んだ後、生徒自身が作りたいメニューを決めて、必要な材料とその費用を算出した。その後、売価も想定して、効率的に目標売り上げをあげるための計算を連立方程式から求めた。 後期は、日常で使われている道具を用いて数学がどのように関わっているかを学んだ。建物の高さをメジャーと角度から算出することについて、Ｅｘｃｅｌを活用して計算し、レポートにまとめた。 現在は、大槌町をデータから数学的に考察する活動を行っている。
現状の成果と課題	[成果]日常生活で使うことのできる題材を意欲的に調べ、積極的に他の生徒と意見交換を行う姿勢が見られた。 [課題]他の「地域みらい学」の各科目の探究活動との兼ね合いが課題である。１年間を通して大槌町を数学的に考察するための予備知識として取り組んできたが、その手法を教えることに多くの時間を要した。実践の時間確保が今後の課題としてあるが、実践的な授業は他の探究活動でも行なっているため、生徒の負担になっている。
今後の取組	・大槌町を数学的に考察する経験を活かして、今後は他の市町村との比較もテーマに入れて取り組むことで、大槌町の課題を数学的に捉える機会とする。

ⅳ　おおつちラボ（理科）

実施学年・単位数	３年生　３単位
設置理由	既習内容を相互に関連付けることで、より深い理解の定着を目指し設置する。特に課題解決学習に取り組むことで問題に対しての仮説設定や、実験・検証方法を自ら模索することで、科学的課題への関心、理解を深める。
科目目標	理科的、科学的な学習内容を活用し、身近な理科的、科学的課題を自ら仮説を立て、実践を行うことで、各分野の知識を統合し自ら課題を解決する姿勢を身につけさせる。
今年度の取組	日常生活において「便利・不便」に感じることや「不思議」なことから調べたいテーマを設定し、仮説を立て、調べ学習によって検証する過程を学んだ。また、仮説に対して、自分なりに実験等を行い、データを活用した検証を行う過程を学んだ。  例「カップ麺は鍋で煮たら早くできるのか。」 「本当にシャボン玉は雨の日割れないのか」 地域課題とＳＤＧｓに注目し、17 項目ある中の食糧問題、医療、海の生態系等の理科的な到達目標に特化して調査を行った。まずは国・企業・県・大槌や釜石市の成果と課題や取組の現状把握を行った。その上で自分の町をより持続可能にしていく視点を提案するため、他の市町村で取り組んでいる前例を論文から見つけ、効果の有無を検証し卒論ポスターとしてまとめた。 例「どうしたらごみの量を減らすことができるのか」 「無人バスをどのようにしたら走らせることができるか。」
現状の成果と課題	[成果]調べて終わるのではなく、根拠となるデータを使って検証まで行うことで、自分の言葉で論理立てて理科的に説明する力が身についた。またＳＤＧｓについての理解が深まり、地域の持続可能性に対する課題についても調べる力がついた。 [課題]疑問や違和感を持つ土台となる理科的な知識の不足があり、テーマを自分で見つけることが難しい生徒が多い。大槌という地域には考えるテーマが多くあるが、自分なりに興味を見出し、噛み砕くことができるような基礎的な学力が必要となる。
今後の取組	・町内でのフィールドワークや、出前授業の機会を増やす。また郷土財エリアなどを題材に、自然保全について考えるような授業を組む。 ・自分なりに課題を見出し、かみ砕くことができるような基礎的な学力をつける。

ｖ　Ｅパスポート（英語）

実施学年・単位数	２年生　３単位
設置理由	英語コミュニケーションⅠ及び論理・表現Ⅰの学習内容を相互に関連付け、教科書では扱わないテーマや場面を設定し、発展的な英語によるコミュニケーション能力を育成するために設置する。特に４技能（「読む」「書く」「聞く」「話す（発表・やりとり）」）をバランス良く取り入れ、多様な場面での実践的な英語コミュニケーション能力のさらなる育成を重視する。
科目目標	英語コミュニケーションⅠ及び論理・表現Ⅰの学習内容を統合させ、多様な場面における実践的な英語によるコミュニケーション能力の育成を目指す。
今年度の取組	前期で身につける資質能力をジブンゴト・課題設定と置き、ネイティブスピーカーの故郷であるカナダ・トロントに「留学してみる」ことをテーマに、ホストファミリーへの自己紹介やお土産、自分の学校等を紹介するというプレゼンの作成を行った。生徒たちは伝えたいことを英語にして、英語を母語にする人にもコミュニケーションを図ることができることを学んだ。 後期は身近にある複雑な事柄についてプレゼンや文章をつくり伝えるという取組を行った。外国人に災害に関することや防災グッズについて説明し、大槌を１日満喫できるようなプランを作成し、大槌の姉妹都市出身のＡＬＴにオンラインによるプレゼンを行った。また大槌で生活する外国人を授業に招き、身近にいる外国人について意識する機会を設けた。
現状の成果と課題	[成果]将来的に外国の方とコミュニケーションを取ろうとするために必要な学び続けるための基礎的な態度を身につけることができた。また身近なテーマを題材にすることでオーセンティックに取り組む様子が見られた。また内容を精査して一部文理コースに採用するなど授業づくりにも生かされている。 [課題]基礎的な英語コミュニケーション能力を育成するため、４技能のバランスをどのように取るかが課題である。また、どの教員が担当しても一定の成果があがる継続性についても今後対応していく必要がある。
今後の取組	・外国人に向けた大槌の紹介映像を作る等の取組に発展させる。 ・積極的にフィールドワークを行うことを通して、より身近なテーマで表現する機会を作る。

３　　目標の進捗状況、成果、評価

（１）資質・能力調査について

◆調査概要

本校ではすべての教育活動を通して「大槌高校魅力化構想骨子」で設定した目指す人物像の３つの柱である「自立」「協働」「創造」を育んでいく。令和２年度より、目指す人物像について９つの資質・能力の育成指標を設定し、年２回(５月・２月)の４件法アンケートにより調査を行っている。（今年度は５月・１月に実施した）　※アンケート項目は【表２】参照

		資質・能力	内容
自立	1	ジブンゴト	三陸地域の復興や自身の未来に向けた意志をもつ
	2	課題設定	問題解決のために取り組むべき課題を明らかにする
	3	自己調整	学習の過程や結果をもとに、学び方を自律的に調整する
協働	4	共感・相互理解	価値観や意見の違いをみとめ、受け入れる
	5	One Team	自分の意志をよりよく伝えながら、多様な人を巻き込む
	6	リーダーシップ	他者に対して前向きに働きかけ、動かす
創造	7	レジリエンス	困難な状況でもプラスに考えて乗り越える
	8	価値創造	新しい視点やアイデアをつくりだし、課題解決に活かす
	9	チャレンジ	失敗をおそれず積極的に物事に取り組む

◆調査結果

令和４年１月に今年度２回目の調査を実施した。調査を開始した令和２年５月時点での調査結果と合わせて、肯定的な回答をした生徒数の変化を【表１】に示した。なお、１年生については令和３年５月に実施した調査結果と比較して１年間の変化を示した。

【表１】アンケート結果：資質・能力別の肯定的回答者数の割合

	F	G	H	A	B	C	D	E	F
	1年生	2年生	3年生	1年生		2年生		3年生	
	増減 (B-A)	増減 (D-C)	増減 (F-E)	R3年 5月	R4年 1月	R2年 5月	R4年 1月	R2年 5月	R4年 1月
ジブンゴト	-3.0%	-4.6%	+6.1%	76.7%	73.7%	81.1%	76.5%	70.2%	76.4%
課題設定	+5.2%	+0.4%	+6.9%	75.4%	80.6%	80.2%	80.6%	70.8%	77.7%
自己調整	-1.2%	+1.6%	+4.8%	58.1%	56.9%	56.6%	58.2%	65.5%	70.3%
共感・相互理解	+1.2%	-0.8%	+4.3%	93.6%	94.8%	90.1%	89.3%	82.1%	86.5%
One Team	+4.3%	-3.8%	+8.3%	72.9%	77.2%	65.6%	61.7%	66.7%	75.0%
リーダーシップ	-0.3%	-6.5%	+7.1%	70.3%	70.1%	70.8%	64.3%	67.9%	75.0%
レジリエンス	+5.9%	-3.3%	+9.2%	56.4%	62.3%	59.4%	56.1%	58.3%	67.6%
価値創造	+1.0%	-0.6%	+6.5%	67.4%	68.4%	61.8%	61.2%	63.1%	69.6%
チャレンジ	-0.1%	-6.0%	+0.6%	60.6%	60.5%	58.0%	52.0%	64.3%	64.9%
平均値	+1.4%	-2.6%	+6.0%	70.2%	71.6%	69.3%	66.7%	67.7%	73.7%

【表２】アンケート結果：設問別の肯定的回答者数の割合

			質問項目	G B−A 1年生	H D−C 2年生	I F−E 3年生	A 1年生 R3年5月	B 1年生 R4年1月	C 2年生 R2年5月	D 2年生 R4年1月	E 3年生 R2年5月	F 3年生 R4年1月	通番
自立（意志がある）	ジブンゴト	1	よりよい地域づくりのために自分から積極的に活動したいと思う	−9.1%	−15.8%	6.0%	72.9%	63.8%	81.1%	65.3%	64.3%	70.3%	1
		2	地域に対して貢献したいと思う	−3.9%	−5.5%	6.6%	72.9%	69.0%	83.0%	77.6%	69.0%	75.7%	2
		3	自分の将来を真剣に考えている	4.9%	2.8%	4.9%	84.7%	89.7%	84.9%	87.8%	76.2%	81.1%	3
		4	未来は自分で変えていけると思う	−3.9%	0.0%	6.9%	76.3%	72.4%	75.5%	75.5%	71.4%	78.4%	4
				−3.0%	−4.6%	6.1%	76.7%	73.7%	81.1%	76.5%	70.2%	76.4%	
	課題設定	5	日頃から疑問や問題意識を持って生活している	9.6%	1.5%	13.8%	59.3%	69.0%	67.9%	69.4%	61.9%	75.7%	5
		6	理想と現実のギャップを認識できる	−5.3%	−2.7%	−8.3%	91.5%	86.2%	92.5%	89.8%	78.6%	70.3%	6
		7	問題が起きたとき、解決までの手順を考えることができる	11.5%	−3.7%	16.5%	69.5%	81.0%	79.2%	75.5%	61.9%	78.4%	7
		8	問題が起きたとき、原因をつきとめようとする	4.9%	6.6%	5.5%	81.4%	86.2%	81.1%	87.8%	81.0%	86.5%	8
				5.2%	0.4%	6.9%	75.4%	80.6%	80.2%	80.6%	70.8%	77.7%	
	自己調整	9	学習している内容を他の物事と結びつけて考える	4.3%	4.8%	10.7%	49.2%	53.4%	58.5%	63.3%	59.5%	70.3%	9
		10	自分に合った学習方法を探そうとする	−4.0%	−0.4%	4.2%	69.5%	65.5%	69.8%	69.4%	71.4%	75.7%	10
		11	最後まであきらめずに理解しようとする	−9.2%	−0.7%	−7.7%	67.8%	58.6%	66.0%	65.3%	83.3%	75.7%	11
		12	計画を立ててから学習に取り組む	4.2%	2.6%	11.8%	45.8%	50.0%	32.1%	34.7%	47.6%	59.5%	12
				−1.2%	1.6%	4.8%	58.1%	56.9%	56.6%	58.2%	65.5%	70.3%	
協働（仲間とともにある）	共感相互理解	13	相手の話を聞くときは、何を伝えたいのか考えながら聞く	−1.8%	−5.2%	0.8%	93.2%	91.4%	86.8%	81.6%	85.7%	86.5%	13
		14	常に相手の立場に立って理解しようとしている	3.3%	0.8%	7.3%	89.8%	93.1%	84.9%	85.7%	73.8%	81.1%	14
		15	頑張っている人を見ると応援したくなる	1.7%	3.6%	6.2%	96.6%	98.3%	94.3%	98.0%	85.7%	91.9%	15
		16	自分と違う意見も受けいれることができる	1.6%	−2.5%	3.2%	94.9%	96.6%	94.3%	91.8%	83.3%	86.5%	16
				1.2%	−0.8%	4.3%	93.6%	94.8%	90.1%	89.3%	82.1%	86.5%	
	One Team	17	集団の中で自分の役割を見つけることができる	4.6%	−3.1%	16.5%	67.8%	72.4%	62.3%	59.2%	61.9%	78.4%	17
		18	相手の話を受けて質問をすることができる	−2.1%	−17.1%	12.0%	79.7%	77.6%	66.0%	49.0%	69.0%	81.1%	18
		19	周囲と良い関係をつくるために、行動や発言に気をつけている	5.0%	9.1%	5.2%	88.1%	93.1%	86.8%	95.9%	78.6%	83.8%	19
		20	自分の考えをわかりやすく相手に伝えることができる	9.6%	−4.3%	−0.4%	55.9%	65.5%	47.2%	42.9%	57.1%	56.8%	20
				4.3%	−3.8%	8.3%	72.9%	77.2%	65.6%	61.7%	66.7%	75.0%	
	リーダーシップ	21	安易に他人の意見に流されない	−0.6%	−2.5%	13.4%	66.1%	65.5%	69.8%	67.3%	59.5%	73.0%	21
		22	困難な状況でも前向きな発言をすることができる	−4.1%	−7.9%	5.3%	61.0%	56.9%	52.8%	44.9%	59.5%	64.9%	22
		23	互いの個性を尊重し協力することができる	−0.3%	−0.6%	3.5%	91.5%	91.2%	92.5%	91.8%	85.7%	89.2%	23
		24	目的を達成するために、相手を説得することができる	4.0%	−14.9%	6.3%	62.7%	66.7%	67.9%	53.1%	66.7%	73.0%	24
				−0.3%	−6.5%	7.1%	70.3%	70.1%	70.8%	64.3%	67.9%	75.0%	
創造（逆境からつくり出す）	レジリエンス	25	難しい仕事を与えられても、そこに楽しさを見出せる	0.1%	8.4%	18.5%	52.5%	52.6%	52.8%	61.2%	57.1%	75.7%	25
		26	いまの苦労は将来役に立つと考えている	11.6%	−3.4%	−5.6%	79.7%	91.2%	83.0%	79.6%	78.6%	73.0%	26
		27	自分はプラス思考である	5.2%	−4.5%	6.8%	47.5%	52.6%	45.3%	40.8%	50.0%	56.8%	27
		28	困難なときほど頑張れる	6.9%	−13.7%	17.2%	45.8%	52.6%	56.6%	42.9%	47.6%	64.9%	28
				5.9%	−3.3%	9.2%	56.4%	62.3%	59.4%	56.1%	58.3%	67.6%	
	価値創造	29	自分には発想力がある	10.6%	−13.6%	4.4%	52.5%	63.2%	58.5%	44.9%	52.4%	56.8%	29
		30	自分なりの視点で物事を見ることができる	6.4%	−3.4%	11.7%	81.4%	87.7%	83.0%	79.6%	66.7%	78.4%	30
		31	問題を解決するために創意工夫することが得意である	−3.4%	9.0%	−3.1%	54.2%	50.9%	35.8%	44.9%	57.1%	54.1%	31
		32	過去の経験を問題解決に活かすことができる	−9.4%	5.7%	13.0%	81.4%	71.9%	69.8%	75.5%	76.2%	89.2%	32
				1.0%	−0.6%	6.5%	67.4%	68.4%	61.8%	61.2%	63.1%	69.6%	
	チャレンジ	33	頑張れば道は開けると考えている	6.4%	−1.8%	−2.6%	83.1%	89.5%	77.4%	75.5%	81.0%	78.4%	33
		34	失敗を恐れず行動することができる	−7.0%	−10.7%	−3.4%	50.8%	43.9%	43.4%	32.7%	54.8%	51.4%	34
		35	何事にも積極的に取り組むことができる	−8.6%	−5.7%	12.8%	54.2%	45.6%	54.7%	49.0%	54.8%	67.6%	35
		36	自ら行動して現状を変えようとする	8.9%	−5.6%	−4.5%	54.2%	63.2%	56.6%	51.0%	66.7%	62.2%	36
				−0.1%	−6.0%	0.6%	60.6%	60.5%	58.0%	52.0%	64.3%	64.9%	

◆考察

学年ごとに比較すると３年生の増加がどの項目においても最も高く、２年生では全体で減少が見られ、１年生では微増している。３年生は探究のまとめを行う機会が多くあり、資質・能力の成長を実感できるが、１・２年生は段階に応じた難易度の高い探究活動が設定されているため、自らの成長実感が乏しい可能性がある。

３年生はすべての項目において、肯定的な回答をした生徒数が増加した。特に「レジリエンス」「One Team」の困難な状況でも前向きに取り組む力や、他者とともにより良い関係を築きながら集団を形成していく力の向上が顕著であった。「レジリエンス」は特に「困難なときほど頑張れる」の項目に大幅な上昇がみられた（※別紙参考資料①参照）生徒は今年度、難易度の高い探究や進路に向けた取組等を実践し成果を収めた成功体験が、自己評価にプラスの影響を与えたと考えられる。また、「One Team」においては「集団の中で自分の役割を見つけることができる」や「相手の話を受けて質問することができる」の項目に大幅な上昇が見られた。これまで様々な探究活動の場面で、生徒それぞれが役割を認識し貢献してきた。そうした日々の積み重ねが結果の向上に寄与したと考えられる。

２年生は多くの項目で減少しており、特に「リーダーシップ」と「チャレンジ」において減少が見られた。中でも、「リーダーシップ」における「目的を達成するために相手を説得することができる」や「チャレンジ」における「失敗を恐れずに行動することができる」の項目が減少した。生徒は今年度、自身の興味関心に基づいたテーマを設定し、地域と協働しながら問いの更新や課題の解決を行う「マイプロジェクト」に取り組んだ。「マイプロジェクト」はグループではなく個人での活動が中心となるため、１人で地域に出て自らの活動を推進する必要がある。生徒は、自らの目的を達成するために他者を巻き込む経験や、失敗するリスクを１人で引き受ける経験は、ほぼ初めてのことであったといえる。そうした活動の中で感じた困難さが生徒の自己評価に影響を与えたと考えられる。

１年生は「レジリエンス」や「課題設定」の項目において上昇が見られた。「レジリエンス」では「今の苦労は将来役に立つと考えている」の項目において大幅な上昇が見られた。生徒は入学からの１年間で、新しい環境での生活習慣の確立、人間関係の形成、探究的な学習での取組等、苦労を実感する場面を何度か経験してきた。今年度は進路や探究活動を中心に、大槌高校を卒業した先輩の経験談を聞く機会を複数回設けてきた。高校時代の苦労が卒業後の人生に役立つといった話に触れることによって、現状を前向きに捉えられるようになったのではないかと考えられる。「課題設定」においては、「問題が起きた時に解決までの手段を考えることができる」の項目が特に上昇した。今年度は探究活動の中で、大槌町にある地域課題解決のための方策を構想し、提案する取組を行ってきた。その中で、課題解決のためのプロセスを学び、解決のための手段を構想していることが結果に影響したと考えられる。

（２）ルーブリックを活用した評価について

校内での探究活動の評価はルーブリックを活用して行っている。評価表を作成するにあたり、大槌高校魅力化構想において策定した人物像の柱「自立・協働・創造」をベースにして三陸みらい探究で育てたい資質・能力を６つ設定した。その上で、６つの資質・能力に関する具体的な評価項目を単元別に作成し、評価を行っている。

学習指導要領解説において示される「生徒に個人として育まれる良い点や進捗の状況などを積極的に評価することや、それを通して生徒自身も自分の良い点や進捗の状況に気づくようにすることも大切である」という指針に則り、項目別の段階評価にあわせ、文章による評価も生徒に知らせている。

【ルーブリック評価表】

大槌高校 三陸みらい探究ルーブリック評価表

【三陸みらい探究で育成する資質・能力の設定】
・「大槌高校魅力化構想骨子」にて設定した目指す人物像をもとに、三陸みらい探究で育成する資質・能力を６つに細分化して設定する。
・それぞれの資質・能力を３段階でレベル分けし、それぞれ１～３学年終了時の目標状態として設定する。
・下記の表を活用した他者評価・自己評価を行い、資質・能力の成長を評価する。

育てたい人物像	資質・能力		内容	レベル１（１学年終了時の目標状態）	レベル２（２学年終了時の目標状態）	レベル３（３学年終了時の目標状態）
				高校生としての自覚	社会の一員としての自信	進路実現・社会人としての自立
自立（意志がある）	1	ジブンゴト	三陸地域の復興や自身の未来に向けた前向きな意志	三陸地域の復興や身の回りの出来事を自分に関係のあることと考え、自分の意見を持つことができる。	社会や未来を良くしようとする意欲を持ち、志を自信をもって語ることができる。	社会の一員として自覚をもち、よりよい未来にしようとする意志を持てる。
	2	課題設定力	課題解決や自己実現のために、取り組むべき課題を明らかにする力	理想の姿と現状のギャップから問題を見つけ、取り組むべき課題を考えることができる。	解決策の実行を繰り返しながら、より重要な新しい課題を設定することができる。	課題に対する関心や周辺知識への理解を深め、熱意をもって取り組みたいテーマを見つけられる。
協働（仲間とともにある）	3	共感・相互理解	価値観や意見の違いをみとめ、前向きに受け容れる力	自分と異なる他者の意見や価値観を尊重し、受け入れることができる。	対立する意見や価値観を取り入れ、その背景を想像することができる。	価値観の違いをふまえ、身の回りの他者や社会全体がよりよくなるための考えを持つことができる。
	4	One Team	自分の意志をよりよく伝えながら、多様な人を巻き込む力	自分の考えをはっきりと伝え、所属する集団の中で協力して活動することができる。	自分の意見や考えをわかりやすく発信し、身近な他者を巻き込んで活動することができる。	自分の考えを論理性と熱意をもって伝え、多様な立場の人の中で活動することができる。
創造（逆境から創り出す）	5	レジリエンス	困難な状況をプラスに考え、前向きに挑戦し続ける力	与えられた環境の中で、ひるまず前向きに物事に挑戦することができる。	全く新しい環境や、思い通りにいかない状況でも、物事に前向きに挑戦することができる。	困難な体験もプラスに捉え、未知の環境へ飛び込むことを楽しむことができる。
	6	価値創造	新しい視点やアイデアをつくりだし、課題解決に活かす力	すでにある事例を参考にしながら、課題の解決策を考えることができる。	集めた情報を活用して、自分なりの新しい視点やアイデアを持つことができる。	既存の枠組みにとらわれず考え、誰かの役に立つ知見を発信することができる。

Ⅲ　参　考　資　料

◇目標設定シート

◇魅力化評価システムによる評価結果

【別紙様式５】

ふりがな	いわてけんりつおおつちこうとうがっこう	指定期間	2019～2021
学校名	岩手県立大槌高等学校		

地域との協働による高等学校教育改革推進事業　目標設定シート

１．本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（ 年度）
a	（卒業時に生徒が習得すべき具体的能力の定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） アンケート調査による、下記指標に関して、4件法において肯定的回答の割合 ・課題の発見と解決に必要な知識及び技能 ・探究の意義・価値理解、地域・社会との関わり合い ・課題発見・解決への指向 ・主体性・協働性 ・価値創造への提案と次へつながる学び						単位：％
	本事業対象生徒：			54.9%	65.4%	68.1%	90（2021年度）
	本事業対象生徒以外：	56	64				
	目標設定の考え方：本事業の目標は三陸沿岸部地域のリーダー育成である。本事業を通じ、自ら進んで地域に働きかけることができる力を生徒全員に身につけて欲しい。						
b	（高校卒業後の地元への定着状況を測るものとして、管理機関において設定した成果目標） 卒業者の中で県内就職者・県内進学者数の占める割合						単位：％
	本事業対象生徒：			55.6%	57.7%	56.40%	70（2021年度）
	本事業対象生徒以外：	56	64				
	目標設定の考え方：震災前は県外就職率は48％と高い比率であった。震災以後県内就職者が増えているが、その率を更に高めたい。また、県内に進学した者が将来県内に就職することが考えられるので、県内進学者も加味して考えたい。						
c	（その他本構想における取組の達成目標）						
	本事業対象生徒：						
	本事業対象生徒以外：						

２．地域人材を育成する高校としての活動指標（アウトプット）

		2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（ 年度）
a	（地域課題研究又は発展的な実践の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 生徒が外部団体へ本校の取り組みをプレゼンテーションする機会の回数。						単位：回
		19	18	20	22	30	30（2021年度）
	目標設定の考え方：これまで年間を通じ進路や保健衛生、金融、防災などの講演会を行ってきたが、本事業で地域の人材を活かした授業展開を日常的に行うため。						
b	（普及・促進に向けた取組の実施状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 外部から講師を招いて行う授業や講演会の回数。						単位：回
		11	11	19	12	20	15（2021年度）
	目標設定の考え方：復興研究会の他校交流班を中心に外部団体へ本校の取り組みを発表する機会が多いが、今後本事業を積極的に発表する機会を増やすことが望まれるため。						
c	（その他本構想における取組の具体的指標）						
	目標設定の考え方：						

３．地域人材を育成する地域としての活動指標（アウトプット）						
	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	目標値（ 年度）
a	（地域人材を育成する地域としての活動の推進状況を測るものとして、管理機関において設定した活動指標） 目標設定の考え方：大槌高校魅力化構想会議の年間の開催回数。					単位：回
		1	2	3	3	4
	目標設定の考え方：大槌高校魅力化構想会議は本事業のコンソーシアムの母体であり、運営指導委員会と連動するものである。この会議が年間、円滑に開催され事業への提言や内容の検討が行われることは活動の指標として適している。					
d	（その他本構想における取組の具体的指標）					
	目標設定の考え方：					

＜調査の概要について＞

1．生徒を対象とした調査について

	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	2021年度
全校生徒数（人）	209	190	159	146	149
本事業対象生徒数			42	95	149
本事業対象外生徒数			117	51	0

Portfolio of sustainable education and community

高校魅力化評価システム　組織診断ポートフォリオ

高校名	岩手県立大槌高等学校											
年度	2021年度											
回答者数	生徒・学生	140（内訳）	1年生	59	2年生	44	3年生	37	4年生	0	5年生	0
	（昨年度）	146（内訳）	1年生	53	2年生	42	3年生	51	4年生	0	5年生	0
	大人	24（内訳）	教職員	21	（昨年度）		大人	31	（内訳）	教職員	20	

【MEMO】

教育目標、育てたい生徒像など

How to read　結果の読み取り方

このポートフォリオでは、以下の５側面、４領域、３軸により、高校と地域の学びの「いま」と「変化」を読み取ることができます。

５つの側面を　➡ 各校・地域の状態を、「①学習活動」「②学習環境」「③生徒の自己能力認識」「④生徒の行動実績」「⑤満足度」の５つから把握しています。

４つの領域から　➡ 各設問を「主体性」「協働性」「探究性」「社会性」の４つの資質・能力に関する領域に分類しています。

３つの軸で　➡ 上記のデータを「時間軸（前年度からの伸び）」「学年軸（学年による違い）」「地域軸（他地域との比較）」の３つの軸で整理しています。

結果に出てくる数字や言葉は次の意味を表しています。

【割合（%）】　➡ 各項目で「４．あてはまる」「３．どちらかといえばあてはまる」という肯定的回答をした割合

【平均】　➡ 「あてはまらない＝１」～「あてはまる＝４」の回答の平均値

【他地域】　➡ 同じ機会に調査を実施した他校の回答の平均値

【回答上昇者の割合】　➡ （個人IDで紐づけを行い、複数回調査を実施した場合に表示）前年と比べて、各領域の回答平均値が上がった回答者の、全回答者に占める割合

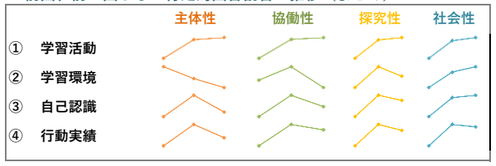
Summary　総括表

■今回の結果（まとめ）

	主体性	協働性	探究性	社会性
① 学習活動	2	3	3	2
② 学習環境	3	3	4	3
③ 生徒の自己認識	2	3	2	2
④ 生徒の行動実績	2	3	2	1

※肯定的回答割合が50%未満=1,50~65%=2,65%~80%=3,80%以上=4

■前回、前々回からの肯定的回答割合の推移（まとめ）



※左から前々回、前回、今回。非受検回もグラフに表示されるため読み取り注意。

■強み・伸びしろ

	強み：肯定的回答割合が最も高い項目		伸びしろ：肯定的回答割合が最も低い項目	
① 学習活動	83.6%	活動、学習内容について生徒同士で話し合う	55.0%	日本や世界の課題の解決方法について考える
② 学習環境	85.7%	周りの大人は、じっくりと話を聞き、考える手助けをしてくれる	61.4%	地域に、尊敬している・憧れている大人がいる
③ 生徒の自己認識	88.6%	自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	47.9%	将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う
④ 生徒の行動実績	68.6%	友人などから、意見やアドバイスを求められた	38.6%	地域社会などでボランティア活動に参加した

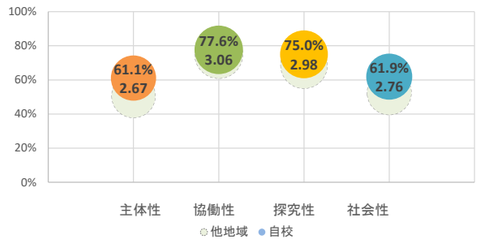
■総合的な生徒の満足度（⑤）

	満足度
生活全般の満足度（0~10で6以上）	50.7%
前回、前々回からの推移	
高校に対する満足度	76.4%
前回、前々回からの推移	

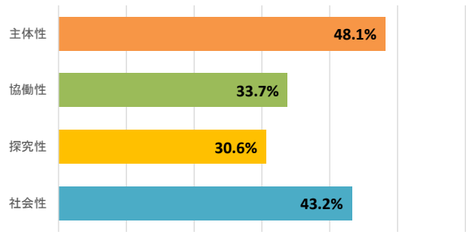
※非受検回もグラフに表示されるため読み取り注意。

①学習活動（明示的なカリキュラム）

■今回の結果



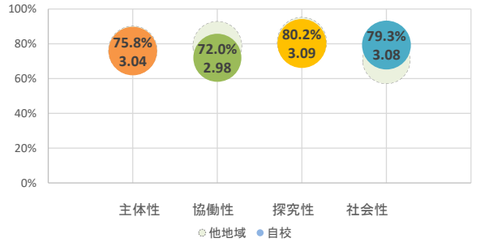
■前回調査時からの変化（回答上昇者の割合）



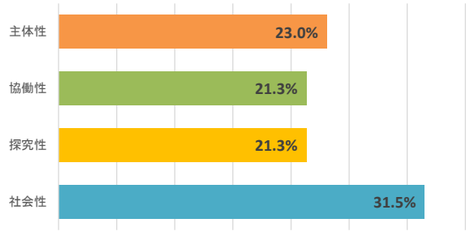
※上段の数値（%：縦軸）が肯定的回答割合、下段の数値が平均値

②学習環境（学びの土壌：非明示的なカリキュラム）

■今回の結果

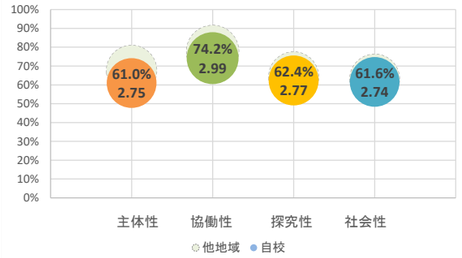


■前回調査時からの変化（回答上昇者の割合）

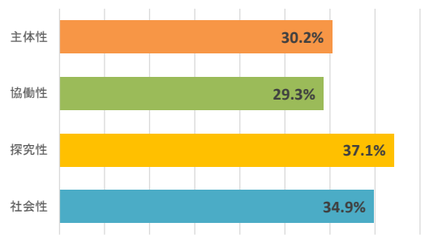


③生徒の自己認識（資質・能力の主観的認識）

■今回の結果

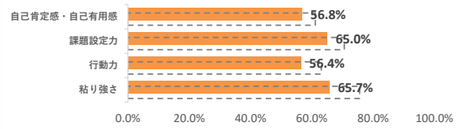


■前回調査時からの変化（回答上昇者の割合）

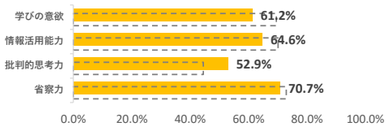


■今回の結果（詳細）

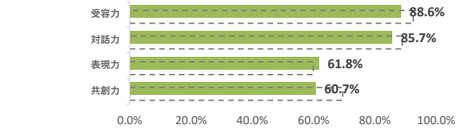
主体性



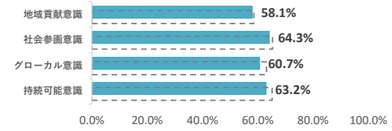
探究性



協働性



社会性

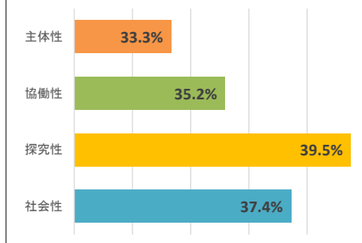


※点線は他地域における肯定的回答割合

④生徒の行動実績（資質・能力の発揮）

■今回の結果

■前回調査時からの変化（回答上昇者の割合）



【学習活動】【学習環境】読み取り・検討の視点

- 自校の強みや課題、それを増進／克服するための、協働のあり方は？
- 普段から意識して取り組んでいる活動の機会や環境づくりは？その成果は出ていそうか？
- 協働を支えるコーディネート機能として、どのような役割が必要か？

【生徒の自己認識】読み取り・検討の視点

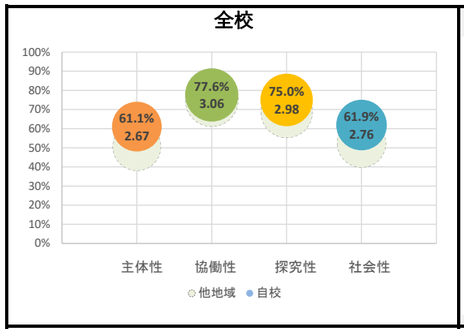
- 普段から意識している、育てたい生徒像や、身につけさせたい力に関する指標の結果は？
- 前回からの変化は？その要因として、何が考えられそうか？（学習活動、学習環境と関連付けて）
- 今後、意識して伸ばしていきたいと考える力は？そのために必要な「次の一手」は？

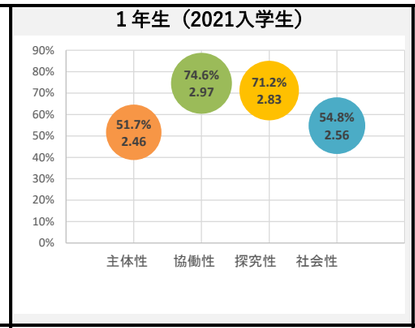
【生徒の行動実績】読み取り・検討の視点

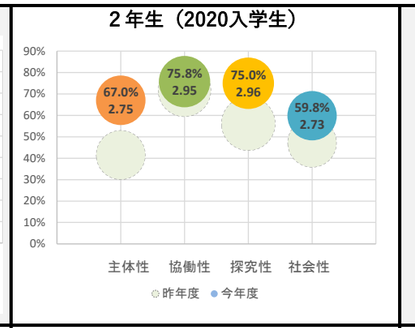
- 生徒に期待する具体的な行動は？
  生徒の自己認識との関連は？
- 具体的な行動を促すような、学習活動や
  学習環境づくりはできているか？

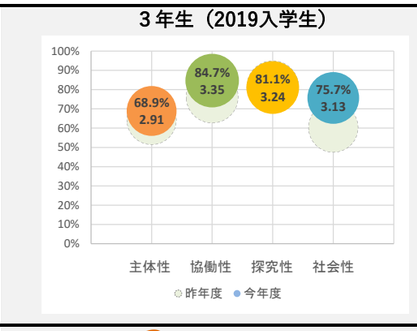
Details 詳細結果

① 学習活動（明示的なカリキュラム）





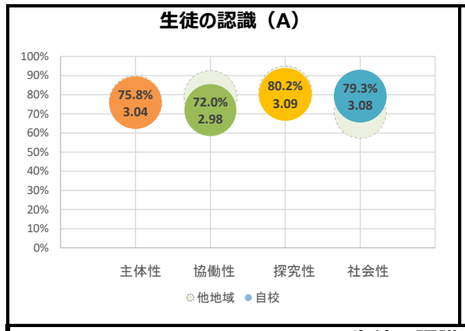


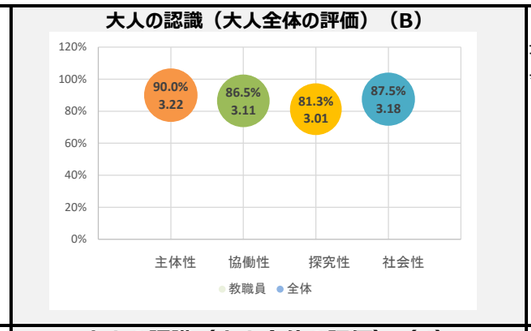


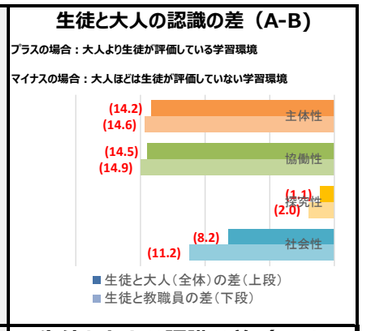
● 10pt以上の増加　● 0～10ptの増加　● 減少

	全校			1年生（2021入学生）			2年生（2020入学生）			3年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年～3年	回答上昇者
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合（%）	差(pt)	割合(%)	割合（%）	差(pt)	推移	割合(%)
主体性に関わる学習活動	**61.1%**	**3.19**	**10.45**	**51.7%**	**10.19**	**-6.64**	**67.0%**	**25.54**	**52.3%**	**68.9%**	**4.63**		**43.2%**
5 自主的に調べものや取材を行う	63.6%	-4.24	-0.14	57.6%	8.57	-11.42	63.6%	14.58	52.3%	73.0%	-0.84		37.8%
6 学校外のいろいろな人に話を聞きに行く	58.6%	10.63	21.03	45.8%	11.80	-1.86	70.5%	36.49	52.3%	64.9%	10.10		48.6%
協働性に関わる学習活動	**77.6%**	**0.68**	**2.69**	**74.6%**	**2.88**	**-4.79**	**75.8%**	**4.06**	**32.6%**	**84.7%**	**8.49**		**35.1%**
7 グループで協力しながら学習や調べものを行う	82.9%	2.04	-0.72	81.4%	0.22	-6.74	79.5%	-1.59	25.0%	89.2%	15.38		45.9%
8 活動、学習内容について生徒同士で話し合う	83.6%	-2.73	-4.37	84.7%	5.50	1.41	79.5%	0.30	34.1%	86.5%	-1.61		29.7%
9 活動、学習内容について大人（教員や地域の大人）と話し合う	66.4%	2.73	13.17	57.6%	2.91	-9.04	68.2%	13.46	38.6%	78.4%	11.71		29.7%
探究性に関わる学習活動	**75.0%**	**2.74**	**6.33**	**71.2%**	**15.05**	**2.14**	**75.0%**	**18.87**	**38.6%**	**81.1%**	**-0.47**		**20.9%**
10 自分の考えを文章や図表にまとめる	66.4%	2.73	3.71	59.3%	14.04	-2.58	63.6%	18.35	34.1%	81.1%	4.89		27.0%
11 話し合った内容をまとめる	80.0%	4.66	2.92	81.4%	22.87	2.78	77.3%	18.78	38.6%	81.1%	0.13		21.6%
12 活動、学習のまとめを発表する	75.7%	1.74	8.34	67.8%	11.19	3.51	81.8%	25.21	43.2%	81.1%	-2.25		18.9%
13 生徒同士で活動、学習の振り返りを行う	77.9%	1.83	10.34	76.3%	12.12	4.84	77.3%	13.12	38.6%	81.1%	-4.63		16.2%
社会性に関わる学習活動	**61.9%**	**4.60**	**9.44**	**54.8%**	**7.63**	**-3.13**	**59.8%**	**12.68**	**40.9%**	**75.7%**	**15.36**		**45.9%**
14 地域の魅力や資源について考える	64.3%	-1.47	9.89	59.3%	-1.06	-4.96	59.1%	-1.29	27.3%	78.4%	11.71		32.4%
15 地域の課題の解決方法について考える	66.4%	7.52	10.52	59.3%	14.04	2.18	68.2%	22.90	50.0%	75.7%	11.39		43.2%
16 日本や世界の課題の解決方法について考える	55.0%	7.74	7.91	45.8%	9.91	-6.62	52.3%	16.42	45.5%	73.0%	22.97		62.2%

② 学習環境（学びの土壌：非明示的なカリキュラム）







● 10pt以上の増加　● 0～10ptの増加　● 減少

	生徒の認識（A）							大人の認識（大人全体の評価）（B）				生徒と大人の認識の差（A-B）	
	全体	昨年度との差	他地域との差	全体	学年別			全体	昨年度との差	うち教職員	昨年度との差	生徒と大人（全体）	生徒と教職員
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	回答上昇者	1年生	2年生	3年生	割合(%)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	差(pt)
主体性に関わる学習環境	**75.8%**	**-0.65**	**-0.41**	**23.0%**	**69.5%**	**77.3%**	**84.2%**	**90.0%**	**-1.61**	**90.5%**	**-3.52**	**-14.2pt**	**-14.6pt**
20 失敗してもよいという安全・安心な雰囲気がある	76.4%	-1.65	-2.47	21.0%	71.2%	79.5%	81.1%	87.5%	-2.82	85.7%	-9.29	-11.1pt	-9.3pt
21 挑戦する人に対して、応援する雰囲気がある	85.0%	-3.36	-5.58	18.5%	76.3%	86.4%	97.3%	91.7%	-1.88	90.5%	-4.52	-6.7pt	-5.5pt
33 目標や当事者意識を持って挑戦している人がいる	74.3%	-7.22	-6.00	24.7%	64.4%	81.8%	81.1%	87.5%	-9.27	90.5%	-4.52	-13.2pt	-16.2pt
34 地域に、尊敬している・憧れている大人がいる	61.4%	1.84	4.59	30.9%	59.3%	56.8%	70.3%	-	-	-	-	-	-
30 人の挑戦に関わらせてもらえる機会がある	74.3%	9.90	12.22	29.6%	69.5%	75.0%	81.1%	87.5%	3.63	90.5%	0.48	-13.2pt	-16.2pt
26 自分が何かに挑戦しようと思ったとき、周りは手を差し伸べてくれる	83.6%	-3.41	-5.23	13.6%	76.3%	84.1%	94.6%	95.8%	2.28	95.2%	0.24	-12.3pt	-11.7pt
協働性に関わる学習環境	**72.0%**	**-6.29**	**-6.82**	**21.3%**	**64.8%**	**72.7%**	**82.4%**	**86.5%**	**-0.64**	**86.9%**	**-8.10**	**-14.5pt**	**-14.9pt**
22 人と違うことが尊重される雰囲気がある	70.7%	-9.42	-8.58	22.2%	62.7%	70.5%	83.8%	87.5%	6.85	85.7%	0.71	-16.8pt	-15.0pt
23 ありのままの自分が尊重される雰囲気がある	72.1%	-1.83	-9.45	25.9%	66.1%	72.7%	81.1%	87.5%	0.40	85.7%	-9.29	-15.4pt	-13.6pt
27 自分と異なる立場や役割を持つ人との関わりがある	78.6%	-5.68	-3.50	19.8%	71.2%	77.3%	91.9%	83.3%	-6.99	85.7%	-14.29	-4.8pt	-7.1pt
28 立場や役割を超えて協働する機会がある	66.4%	-8.23	-5.76	17.3%	59.3%	70.5%	73.0%	87.5%	-2.82	90.5%	-9.52	-21.1pt	-24.0pt
探究性に関わる学習環境	**80.2%**	**-1.84**	**-0.87**	**21.3%**	**78.8%**	**75.6%**	**87.8%**	**81.3%**	**3.02**	**82.1%**	**-2.86**	**-1.1pt**	**-2.0pt**
17 本音を気兼ねなく発言できる雰囲気がある	72.9%	-7.96	-10.28	23.5%	67.8%	68.2%	86.5%	75.0%	7.26	76.2%	6.19	-2.1pt	-3.3pt
18 将来のことや実現したいことを話し合える大人がいる	82.9%	0.67	3.00	17.3%	84.7%	77.3%	86.5%	70.8%	-9.81	71.4%	-18.57	12.0pt	11.4pt
24 周りの大人は、じっくりと話を聞き、考える手助けをしてくれる	85.7%	-1.96	-0.87	14.8%	84.7%	79.5%	94.6%	95.8%	2.28	95.2%	0.24	-10.1pt	-9.5pt
31 お互いに問いかけあう機会がある	79.3%	1.89	4.66	29.6%	78.0%	77.3%	83.8%	83.3%	12.37	85.7%	0.71	-4.0pt	-6.4pt
社会性に関わる学習環境	**79.3%**	**3.43**	**8.54**	**31.5%**	**74.2%**	**79.0%**	**87.8%**	**87.5%**	**0.40**	**90.5%**	**-0.77**	**-8.2pt**	**-11.2pt**
19 地域から大切にされている雰囲気を感じる	79.3%	-4.28	-3.51	28.4%	69.5%	84.1%	89.2%	91.7%	-1.88	90.5%	-4.52	-12.4pt	-11.2pt
25 興味を持ったことに対してすぐに橋渡しをしてくれる大人がいる	82.1%	2.01	5.21	27.2%	74.6%	79.5%	97.3%	91.7%	1.34	95.2%	-4.76	-9.5pt	-13.1pt
29 地域の人や課題などにじかに触れる機会がある	78.6%	5.28	13.40	32.1%	78.0%	77.3%	81.1%	87.5%	3.63	90.5%	5.48	-8.9pt	-11.9pt
32 自分の暮らす地域を、外からの視点で考える機会がある	77.1%	10.70	19.07	38.3%	74.6%	75.0%	83.8%	79.2%	-1.48	85.7%	0.71	-2.0pt	-8.6pt

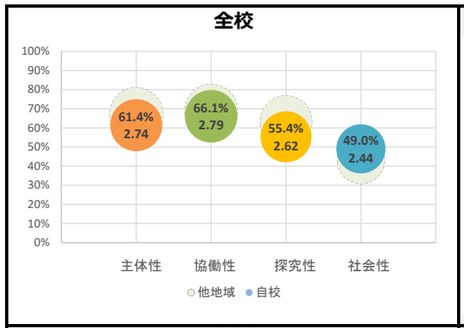
※大人の自己評価は、「21_大人用」シートでご確認いただけます。

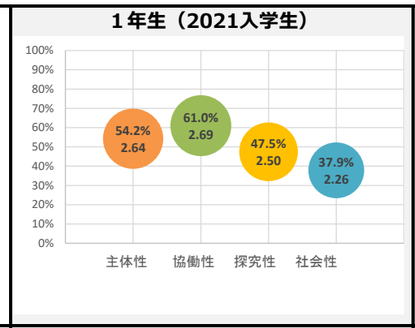
③ 生徒の自己認識（資質・能力の主観的認識）

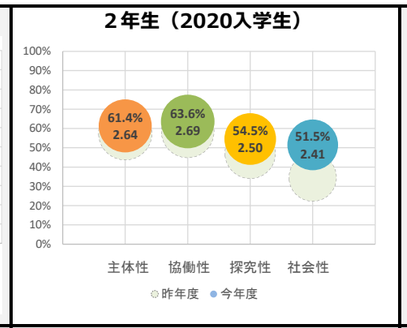
● 10pt以上の増加　● 0～10ptの増加　● 減少

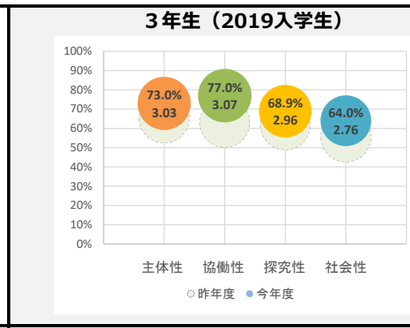
		全校			1年生（2021入学生）			2年生（2020入学生）			3年生（2019入学生）			
		全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年～3年	回答上昇者
		割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合（%）	差(pt)	割合(%)	割合（%）	差(pt)	推移	割合(%)
	主体性に関わる自己認識	**61.0%**	-5.46	-6.64	**53.0%**	-4.35	-12.81	63.4%	6.04	28.4%	70.9%	8.74		32.4%
	【自己肯定感･自己有用感】	56.8%	1.99	-4.38	49.2%	7.64	-12.75	59.1%	17.58	34.1%	66.2%	12.64		37.8%
49	自分にはよいところがあると思う	58.6%	-1.02	-13.34	54.2%	8.95	-12.43	59.1%	13.81	34.1%	64.9%	7.72		37.8%
50	私は、自分自身に満足している	55.0%	5.00	4.58	44.1%	6.33	-13.08	59.1%	21.36	34.1%	67.6%	17.57		37.8%
	【課題設定力】	65.0%	-6.92	-5.60	57.6%	-4.64	-4.28	65.9%	3.64	22.7%	75.7%	6.63		29.7%
37	現状を分析し、目的や課題を明らかにすることができる	65.0%	-6.92	-5.60	57.6%	-4.64	-4.28	65.9%	3.64	22.7%	75.7%	6.63		29.7%
	【行動力】	56.4%	-8.30	-6.68	44.1%	-12.54	-21.41	65.9%	9.31	34.1%	64.9%	4.15		29.7%
38	目標を設定し、確実に行動することができる	57.1%	-9.98	-5.32	49.2%	-7.45	-7.99	63.6%	7.03	31.8%	62.2%	-4.50		24.3%
51	自分で計画を立てて活動することができる	55.7%	-6.61	-8.05	39.0%	-17.62	-34.83	68.2%	11.58	36.4%	67.6%	12.81		35.1%
	【粘り強さ】	65.7%	-8.60	-9.90	61.0%	-7.85	-12.79	62.5%	-6.37	22.7%	77.0%	11.55		32.4%
35	うまくいくか分からないことにも意欲的に取り組む	66.4%	-10.97	-13.01	66.1%	-3.71	-17.23	56.8%	-12.99	15.9%	78.4%	9.33		27.0%
45	忍耐強く物事に取り組むことができる	65.0%	-6.23	-6.78	55.9%	-11.99	-8.35	68.2%	0.26	29.5%	75.7%	13.77		37.8%
	協働性に関わる自己認識	**74.2%**	-1.23	-3.52	**73.1%**	7.29	-5.48	69.3%	3.52	30.1%	81.8%	5.27		28.4%
	【受容力】	88.6%	-3.89	-3.97	91.5%	6.62	-1.33	81.8%	-3.09	20.5%	91.9%	-0.97		16.2%
41	自分とは異なる意見や価値を尊重することができる	88.6%	-3.89	-3.97	91.5%	6.62	-1.33	81.8%	-3.09	20.5%	91.9%	-0.97		16.2%
	【対話力】	85.7%	0.78	-3.22	91.5%	12.28	1.05	72.7%	-6.52	25.0%	91.9%	6.18		21.6%
40	相手の意見を丁寧に聞くことができる	85.7%	0.78	-3.22	91.5%	12.28	1.05	72.7%	-6.52	25.0%	91.9%	6.18		21.6%
	【表現力】	61.8%	2.54	1.88	55.1%	5.08	-4.44	61.4%	11.36	40.9%	73.0%	14.64		32.4%
47	自分の考えをはっきり相手に伝えることができる	66.4%	3.41	0.26	62.7%	13.66	-3.95	65.9%	16.85	40.9%	73.0%	3.93		18.9%
48	友達の前で自分の意見を発表することは得意だ	57.1%	1.66	3.49	47.5%	-3.49	-4.92	56.8%	5.87	40.9%	73.0%	25.35		45.9%
	【共創力】	60.7%	-4.35	-8.78	54.2%	5.18	-17.19	61.4%	12.31	34.1%	70.3%	1.22		43.2%
42	共同作業だと、自分の力が発揮できる	60.7%	-4.35	-8.78	54.2%	5.18	-17.19	61.4%	12.31	34.1%	70.3%	1.22		43.2%
	探究性に関わる自己認識	**62.4%**	-0.78	-1.93	**53.7%**	-2.15	-15.50	65.3%	9.44	36.8%	72.5%	12.11		37.4%
	【学びの意欲】	61.2%	-3.65	-8.34	54.8%	-1.80	-15.04	65.9%	9.31	32.6%	65.8%	3.86		27.9%
36	家や寮で、誰かに言われなくても自分から勉強する	53.6%	-7.39	-18.36	49.2%	-1.79	-17.51	54.5%	3.60	27.3%	59.5%	-2.45		29.7%
58	地域を対象とした課題探究学習に熱心に取り組んでいる	60.0%	2.47	2.77	50.8%	5.56	-11.06	70.5%	25.17	45.5%	62.2%	5.02		24.3%
64	学習を通じて、自分がしたいことが増えている	70.0%	-6.03	-9.43	64.4%	-9.18	-16.55	72.7%	-0.86	25.0%	75.7%	9.01		29.7%
	【情報活用能力】	64.6%	-5.91	-5.49	56.8%	-6.43	-17.03	63.6%	0.43	30.7%	78.4%	10.52		32.4%
43	情報を、勉強したことと関連づけて理解できる	69.3%	-8.11	-7.13	64.4%	-5.40	-16.55	65.9%	-3.90	29.5%	81.1%	2.51		21.6%
44	勉強したものを実際に応用してみる	60.0%	-3.70	-3.85	49.2%	-7.45	-17.51	61.4%	4.76	31.8%	75.7%	18.53		43.2%
	【批判的思考力】	52.9%	11.08	8.33	37.3%	1.44	-15.09	61.4%	25.51	45.5%	67.6%	31.85		51.4%
39	複雑な問題を順序立てて考えることが得意だ	52.9%	11.08	8.33	37.3%	1.44	-15.09	61.4%	25.51	45.5%	67.6%	31.85		51.4%
	【省察力】	70.7%	-4.63	-2.22	66.1%	-1.82	-14.85	70.5%	2.53	38.6%	78.4%	2.19		37.8%
46	自分を客観的に理解することができる	70.7%	-4.63	-2.22	66.1%	-1.82	-14.85	70.5%	2.53	38.6%	78.4%	2.19		37.8%
	社会性に関わる自己認識	**61.6%**	1.39	-1.53	**54.8%**	0.40	-10.57	63.6%	9.23	35.1%	69.9%	13.09		34.6%
	【地域貢献意識】	58.1%	0.33	-0.53	49.7%	-1.23	-19.33	61.4%	10.42	38.6%	67.6%	11.22		36.9%
62	将来の国や地域の担い手として、積極的に政策決定に関わりたい	49.3%	6.82	6.27	37.3%	-0.45	-10.33	54.5%	16.81	43.2%	62.2%	28.83		48.6%
53	地域をよりよくするため、地域の問題に関わりたい	59.3%	-2.36	-2.87	50.8%	-1.98	-25.34	63.6%	10.81	38.6%	67.6%	5.66		29.7%
55	将来、自分の住んでいる地域に役に立ちたい	65.7%	-3.46	-4.99	61.0%	-1.25	-22.32	65.9%	3.64	34.1%	73.0%	-0.84		32.4%
	【社会参画意識】	64.3%	2.64	-1.09	58.2%	5.36	-9.27	65.2%	12.32	33.3%	73.0%	12.66		30.6%
54	私が関わることで、社会状況が変えられるかもしれない	51.4%	6.22	3.96	33.9%	1.82	-13.72	63.6%	31.56	50.0%	64.9%	17.25		43.2%
59	地域や社会での問題やできごとに関心がある	70.0%	2.88	-0.27	67.8%	3.65	-3.63	68.2%	4.03	27.3%	75.7%	16.15		27.0%
52	18歳選挙権を取得したら、選挙に行くと思う	71.4%	-1.17	-6.97	72.9%	10.62	-10.45	63.6%	1.37	22.7%	78.4%	4.57		21.6%
	【グローカル意識】	60.7%	0.67	-2.48	57.1%	-0.17	-2.46	62.1%	4.89	33.3%	64.9%	12.48		36.9%
56	地域の課題と世界での課題は関連していると思う	66.4%	3.41	-1.95	61.0%	-1.25	-5.65	68.2%	5.92	43.2%	73.0%	15.83		35.1%
61	将来、見知らぬ土地でチャレンジしてみたい	67.9%	-2.69	-0.63	71.2%	1.38	4.52	65.9%	-3.90	22.7%	64.9%	2.96		32.4%
60	将来、自分のいま住んでいる地域で働きたいと思う	47.9%	1.28	-4.86	39.0%	-0.64	-6.26	52.3%	12.65	34.1%	56.8%	18.66		43.2%
	【持続可能意識】	63.2%	1.91	-2.01	54.2%	-2.37	-11.24	65.9%	9.31	35.2%	74.3%	15.99		33.8%
57	地域文化や暮らしを、自らの手で未来に伝えたい	57.9%	6.49	0.50	44.1%	-4.99	-17.84	68.2%	19.13	40.9%	67.6%	22.33		37.8%
65	自分の将来について明るい希望を持っている	68.6%	-2.66	-4.52	64.4%	0.26	-4.64	63.6%	-0.51	29.5%	81.1%	9.65		29.7%

④　生徒の行動実績（資質・能力の発揮）









● 10pt以上の増加　● 0～10ptの増加　● 減少

	全校				1年生（2021入学生）			2年生（2020入学生）			3年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差		学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年～3年	回答上昇者
	割合(%)	差(pt)	差(pt)		割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合（%）	差(pt)	割合(%)	割合（%）	差(pt)	推移	割合(%)
主体性に関わる行動	**61.4%**	-7.06	-5.82		**54.2%**	-3.31	-12.43	**61.4%**	3.82	26.1%	**73.0%**	7.50		41.9%
68 授業で分からないことを、自分から質問したり、分かる人に聞いた	65.0%	-6.23	-12.77		61.0%	-3.13	-12.79	63.6%	-0.51	22.7%	73.0%	8.69		37.8%
71 授業で興味・関心を持った内容について、自主的に調べ物を行った	57.9%	-7.90	1.14		47.5%	-3.49	-12.07	59.1%	8.15	29.5%	73.0%	6.31		45.9%
協働性に関わる行動	**66.1%**	-2.08	-2.86		**61.0%**	2.53	-11.60	**63.6%**	5.15	36.4%	**77.0%**	13.93		33.8%
69 自分の考えについて、様々な人に意見やアドバイスを求めた	63.6%	-4.92	-4.51		55.9%	3.10	-15.50	61.4%	8.53	38.6%	78.4%	6.95		24.3%
70 友人などから、意見やアドバイスを求められた	68.6%	0.76	-1.21		66.1%	1.95	-7.71	65.9%	1.76	34.1%	75.7%	20.91		43.2%
探究性に関わる行動	**55.4%**	-5.60	-7.88		**47.5%**	0.29	-27.54	**54.5%**	7.38	39.8%	**68.9%**	7.01		39.2%
72 授業で「なぜそうなるのか」と疑問を持って、考えたり調べたりした	56.4%	-7.27	-8.79		50.8%	1.79	-25.34	54.5%	5.49	38.6%	67.6%	3.28		37.8%
73 公式やきまりを習う時、その根拠を自分で考えたり調べたりした	54.3%	-3.93	-6.96		44.1%	-1.22	-29.74	54.5%	9.26	40.9%	70.3%	10.75		40.5%
社会性に関わる行動	**49.0%**	-1.41	5.90		**37.9%**	3.26	-1.04	**51.5%**	16.92	39.4%	**64.0%**	8.41		35.1%
66 いま住んでいる地域の行事に参加した	46.4%	3.28	12.14		37.3%	12.76	8.72	47.7%	23.20	40.9%	59.5%	11.84		37.8%
67 地域社会などでボランティア活動に参加した	38.6%	-2.52	6.81		18.6%	-0.22	-7.55	47.7%	28.86	47.7%	59.5%	4.70		24.3%
74 先生、保護者以外の地域の大人と、なにげない会話を交わした	62.1%	-4.98	-1.25		57.6%	-2.75	-4.28	59.1%	-1.29	29.5%	73.0%	8.69		43.2%

⑤　総合的な生徒の満足度

	全校			1年生（2021入学生）			2年生（2020入学生）			3年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年～3年	回答上昇者
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合（%）	差(pt)	割合(%)	割合（%）	差(pt)	推移	割合(%)
75 今の生活全般に対する満足度	50.7%	-5.45	-11.40	54.2%	14.61	13.76	38.6%	-0.99	29.5%	59.5%	2.32		32.4%
63 この学校に入ってよかったと思う	76.4%	-8.50	-9.61	71.2%	-9.95	-19.29	81.8%	0.69	18.2%	78.4%	-4.95		13.5%

補足・追加設問

	全校			1年生（2021入学生）			2年生（2020入学生）			3年生（2019入学生）			
	全体	昨年度との差	他地域との差	学年	昨年入学生との差	一昨年入学生との差	学年	1年次との差	回答上昇者	学年	2年次との差	1年～3年	回答上昇者
	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合(%)	差(pt)	差(pt)	割合（%）	差(pt)	割合(%)	割合（%）	差(pt)	推移	割合(%)
76 国際社会の課題解決に貢献したい	44.3%	5.93	-5.83	42.4%	12.18	-	31.8%	1.63	36.4%	62.2%	28.83		45.9%
77 まだ世の中にない新しい技術やサービスを生み出してみたい	45.0%	3.90	-5.21	40.7%	8.60	-	36.4%	4.29	40.9%	62.2%	28.83		48.6%
78 客観的な証拠に基づき考え、判断する科学的視点から課題解決にあたることができる	42.9%	7.93	1.74	33.9%	11.26	-	34.1%	11.45	38.6%	67.6%	31.85		45.9%